
Crystal Legend 7_4 ~もしかして怪談？~

Crystal

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C r y s t a l L e g e n d 7 | 4 ｝もしかして怪談？！

【Nコード】

N 4 8 8 8 E

【作者名】

C r y s t a l

【あらすじ】

仕事の息抜きで海水浴にやってきた優子たち。美人な浮遊霊に取り憑かれ、なんとか彼女を成仏させようと悪戦苦闘すること…。
現地で出会った可愛い退魔師“美咲”と協力して、千年前の怨霊とも戦います。

第1話 休日は…、海水浴に出かけよう(前書き)

2003/11/20～2004/02/24 連載作品

初登場の美咲ちゃん。旅館の娘として登場させる予定だったが、書いているうちにとんでもないキャラクターに化けてしまいました(笑)

同一作者小説紹介

Crystal Legend シリーズ 「Crystal Legend 7|2」トルマリンの胎動」、「Crystal Legend 7|3」はじまりの時代」、「Crystal Legend 7|4」もしかして怪談?」

超獣神グランゾル シリーズ 「超獣神グランゾル」、「鳳凰編」

なんちゃらプラネット シリーズ 「なんちゃらプラネット」

美咲ちゃん シリーズ 「もしかして怪談?」

4コマ劇場 シリーズ 「桜のひみつ」、「ラズベリル ショート劇場」

第1話 休日は…、海水浴に出かけよう

番組収録の合間、優子は一つの提案をアリスとセリアにしていた。

「明日からの休みだけ…、どこか遊びに行かない？」

優子の言葉に、二人は考え込んでしまう。べつに反対というわけではなく、行き先を考えているようだ。

「でも、今からじゃ～宿とか取るの難しいんじゃないの」

セリアは、ずばりな質問をする。夏休みも半ばとなって、観光地の宿泊施設はどこも埋まっていると予想されるのだ。

「ま～、なんとかなるんじゃない」

アリスは、ドリンクを片手に呟く。

「最悪、あたしとセリアは、野宿でも構わないし…」

旅慣れているアリスたちにとつて、野宿はそれほど苦にならない。さらに言ってしまうえば、妖精族と精霊族の二人は睡眠を取る必要もなかった。

「え～つと…」

優子が汗を流しながら唸り声を上げる。どこに行くかは別にして、さすがに野宿は遠慮したい。最悪の事態を想定して、テントでも持つていくべきなのだろうか…。

「ねえ、ついでだからシヨウたちも誘おうよ」

アリスは、考え込んでいる優子に声をかける。その瞬間、優子はパツと明るくなった。

「じゃあ、お仕事終わってから、お兄ちゃんのところに行ってみよう」

優子が元気良く右手を突き上げる。

「行き先は、そのとき決めることにしましょ」

話がまとまり、アリスとセリアも頷く。そこで、収録再開の合図が聞こえてきた。

優子は、明日からの旅行を考え、うきうきした気分となる。しか

し、楽しいはずの旅行で身も凍るような出来事が待っていないとは、このときの優子に想像もつかなかった。

翌日、優子たちは小田が運転するワゴン車に乗り込み、一路海へと向かっていた。

流れる景色を見ながら、楽しそうにはしゃぐ優子たち…。そんな中、後部座席には、いかにも不機嫌そうなシヨウが座っていた。

「で…。なんでおまえらと一緒に、泳ぎに行かなきゃならないんだ！」

シヨウは、かなり機嫌が悪そうである。

昨晚、金緑石の樹神社に向かった優子たちは、シヨウを拉致する形で強引に連れてきたのだ。飛鳥も誘ったのだが、突如な計画であったため、参加することはできなかったようである。

「いいじゃないの〜」

隣りに座っていたアリスが、シヨウに微笑みかける。

「海と言えば水着…。あたしたちの水着姿が見られるのよ。感謝してほしいもんだわ」

そう言って、アリスは胸を突き出すようにポーズをとった。

シヨウは、そんなアリスの身体に視線を向ける。頭から爪先までをゆっくり眺め、顔を背けてムツとした。

「けっ！」

途端に、アリスの裏拳がシヨウの顔面に叩き込まれる。シヨウは、顔を押しえて七転八倒した。

「でも、お兄ちゃんと海に行くなんて…。何年ぶりかな〜」

できれば二人きりで行きたかった…。という願望は口にせず、優子は満面に笑みを浮べた。三年前に死んだと思われていたシヨウと再び旅行ができるのだ。一緒に出かけられるだけでも、優子には夢心地であった。

「あっ、海が見えてきた」

セリアの言葉に、優子たちも反応する。窓を開けると、風と共に

海と太陽の匂いが入ってきた。

「いい風ね〜」

セリアは、風になびく髪を手で押える。普段はあまり感情を顔に出さないセリアも、どこか嬉しそうであった。

しばらく海岸線を走っていたワゴン車は、樹々に囲まれた駐車場に入る。堤防へと伸びる脇道があり、そこを登れば海が広がっているはずである。

「よっと」

優子がいち早く車から飛び降りる。大きめのバッグを肩にかけ、照り付ける太陽を見上げた。

「さて…、行きま…」

そのとき、優子はアリスと小田が言い合っているのに気づく。

「ねえ、どうしたの？」

優子は、アリスたちに声をかけた。

「小田ちゃんが、もう帰るって言うてるのよ〜」

小田も一緒に来ると思っていたアリスは、かなり慌てている。

「小田ちゃんは、普段から仕事し過ぎなんだから、こんなときぐらいのんびりしなくっちゃ…」

アリスが諦めずに誘っても、小田は首を縦に振ろうとしない。それどころか、ワゴン車のエンジンも切っていないかった。

結局、小田は仕事のためにとんぼ返りしてしまう。

「電車で来れば良かったね…」

セリアの呟きがすべてを物語っていた。小田は、仕事で忙しいのにも関わらず、優子たちを送ってくれたのだ。

「おまえら…、小田さんに迷惑ばかりかけてるんじゃないだろうな…」

シヨウは、アリスたちをジッと睨む。完全に否定できないところが心苦しい…。

「ともかく、海に来たんだし…。小田さんには悪いけど、わたしたちだけで楽しみましょ〜」

優子は、シヨウたちを急かすように歩きはじめるのだった。

堤防に出ると、海水浴場を一望することができた。

きれいな砂浜が広がり、規模の大きな海の家が並んでいる。そのわりに、海水浴に来ている人が少なく感じられた。

「穴場みたいね…」

アリスがにやりと微笑む。これならファンの目を気にせず楽しめるそうだ。

「シヨウは、場所をおさえといて。あたしたちは着替えてくるから

」

アリスは、優子たちの荷物もシヨウに渡す。かなりの量なのだが、シヨウにとっては軽いものである。

「やれやれ…」

シヨウは、大きなため息をついた。そんな様子を、優子がジッと見つめる。

「ん…、どうした？」

シヨウは、視線を感じて優子の顔を覗き込む。

「うん、なんでもないの！」

真っ赤な顔をして慌てる優子…。

「さあ〜とと、着替えに行きますか〜」

優子は、元気いっぱいに砂浜へ着地した。

「えっ…」

その瞬間、なんともいえない嫌な気配に包まれる。何者かが優子を注目し、いくつもの視線が身体に絡み付いてくるよう…、そんな気配を感じたのだ。

「優子、何してるの？ 早く行きましょ〜」

セリアが優子の手を取って引く張る。どうやら、セリアには何も感じられないようであった。

（気のせい…だよな）

優子は、ゆっくりと歩きだす。セリアたちに感じられないのだから

ら、別になんともないのだろう。優子は、不安を振り払うように、海の家にある更衣室へと向かった。

優子たちを見送った後、シヨウは砂浜を歩いていた。適当な場所にレジャーシートを広げ、荷物を置いて大きなパラソルを差す。その日陰で、シヨウはうたた寝をはじめた。

数分後、水着となった優子たちがやってくる。

「お兄ちゃん」

優子は、はにかみながら微笑んだ。シヨウは、チラッと視線を向けたものの、すぐに寝入ってしまう。

「ねえ、お兄ちゃんも一緒に泳ごうよお」

かなり恥かしかったが、優子は甘えた声を上げた。

「ああ、ダメダメ シヨウを起こすには、これぐらいしないとっ！」

アリスが足を高く上げる。そして、シヨウの腹部に、踵をおもいつきり振り下ろした。

突然なことに、シヨウは咳き込みながら飛び起きる。

「ゲホツゲホツ！ な、なにしゃがる…！」

立ち上がったシヨウは、アリスの背後に回り、腕で首を締め上げた。

「ちよっ…、ギブギブ！」

アリスがシヨウの腕を叩く。苦しがるアリスを見て、なぜか優子が羨ましそうな顔をしていた。

「はいはい。じゃれるのもいい加減にしましょうね」

セリアは、落ち着いた様子で、二人を止めに入る。さすがは幼馴染み、このあたりは手慣れたものである。

「ところで…、最初に言っておきます。わたし、泳げませんので正確には泳いだことがないだけだが、この場合、かなづちと言っても問題ないだろう。

それを聞いたシヨウは、セリアの肩に手を置く。

「セリア…。泳ぎの特訓だ！」

シヨウは、にっこりと微笑みを浮かべ、力強く叫んだ。

「えっ！」

驚いたセリアは、慌てふためく。背中を押されて、波打ち際までやってきた。

「あの〜。水に入る前には、準備運動を…」

不安になったセリアが、最後の抵抗をする。だが、その提案は、完全に無視された。

「きゃあっ！」

海にほおり込まれたセリアは、浅瀬でバサバサと溺れる。足が届く深さなのだが、パニックとなっているため、それどころではない。シヨウは、溺れるセリアを見て、助けるどころか微笑ましそくに眺めていた。

相手にされなかった優子は、落ち込んで項垂れる。楽しいはずのシヨウとの旅行も、どうやら最初から躓いてしまったようだ。

第2話 はじまりの怪奇現象…

波間にふわふわ浮んでいる優子は、仰向けで空を見上げていた。抜けるような青空だったが、優子の気分は深く沈んでいる。その理由は、セリアの練習に付き合っているシヨウが、全く相手にしてくれなかったからだ。

「泳げないのなら、先に言ってくればよかったのに…」

優子は、ひとりごとのようにぼやく。

最初からわかっていれば、別の場所を選ぶこともできたのだ。もっとも、セリア自身は楽しんでいるようなので、気のまわし過ぎかもしれない。

「なっ、なに？」

ふと、優子は嫌な気配を感じた。立ち泳ぎをして周囲を確認するが、特におかしなところは見られない。身震いを感じた優子は、慌てて砂浜へと泳ぎ出す。異変は、その瞬間に始まった。

突然、周りの海水が冷水のようになる。刺すような冷たさに、優子の身体はだんだん痺れはじめていた。必死に手足をばたつかせるが、思うように動かない。すると、何かが足にまとわりつくような感じがした。それは、氷のように冷たく、優子の足首をギュツと締め付ける。

（人の手！）

優子は、直感的にそう感じた。

足首に絡みついた何かは、優子を海中に引きずり込もうとする。

優子は、息苦しさで得体の知れない恐怖に、パニックとなってしまう。つた。

優子が溺れるのは、もはや時間の問題である。そのとき、近くの海面が盛り上がり、人の形をした何かが優子の前に現われた。

「わあっ」

大きな声を上げて優子に抱きついたのは、海中を潜って近づいて

きたアリスだった。ちよつとしたいたずらで驚かそうとしたのだが、優子は恐怖から逃れようと必死である。

「ゆ、優子、暴れないで！」

落ち着かせようと抱きしめるが、パニック状態の優子には逆効果のようであった。

そこに、優子の異変に気づいたシヨウが泳いでくる。優子は、シヨウの姿に安心したのか、気を失ってしまった。シヨウは、優子の身体を支えて立ち泳ぎをする。

「ア〜リ〜ス〜…」

シヨウが抗議の視線をぶつけると、アリスは素直に謝った。

(ippitai, doui iu koto da?)

シヨウは、あらためて優子に異変を感じていた。優子の身体は、まるで氷のように冷たくなっていったからだ。

長時間水に浸かっていたとはいえ、この冷たさは異様である。もちろん、アリスに驚かされたことが原因だとも思えない。優子の身に何かが起こったことは、まず間違いないだろう。

異変の理由はわからないが、いまは優子の身体が心配である。シヨウは、仰向けに優子を抱き、浜辺に向かって泳ぎはじめた。

「うう…ん…、お…兄ちゃん？」

突然の浮遊感に、優子は目を覚ました。どうやら、シヨウに抱き上げられているようである。

「ちよつと、大丈夫なの〜」

セリアは、顔色の悪い優子を心配する。

「優子…、ごめん！」

アリスは、優子を覗き込み、両手をあわせて謝罪した。

それを見た優子は、アリスのいたずらであったと直感する。

「あんたね〜。足を掴んで引っ張るなんて…、死んじゃうかと思っただから…」

気分が優れないのか、優子は額を押さえながら呟く。悪ふざけに

しては、少しやり過ぎである。だが、それを聞いたアリスは、意味がわからず小首を傾げた。

「足を掴んで…って、なんのこと？」

アリスは、優子を驚かせようと、水中から近づいて抱きついただけである。アリスは、必死に無実を訴えた。

アリスが惚けているようには、とても見えない。優子は、恐る恐る自分の足首に視線を向けてみる。そこには、強い力で圧迫されたような、紫色のアザが出来ていた。

それは指の形…、まるで人の手で握り絞めたような形をしていた。

「こ、これって…」

セリアは、顔を青くして、優子のアザを見つめる。

「いや〜っ、言わないでー！ー！」

優子は、手で両耳を塞ぎ、ブルブルと頭を振った。おやくそくな展開ではあったが、まさか自分が体験することになるうとは思わなかった。

結局、それ以降は泳ぐ気になれず、早めに海水浴を切り上げる。

そして、街を散策しながら、今晚泊めてもらうことになっている神社へと向かうことにした。

鬱蒼と広がる森の中、石段を上ると立派な神社があった。この地で古い歴史を持つ、樹神社である。

「樹神社って、どこにでもあるよね…」

優子は、呆れ口調で呟いた。

自然崇拜で有名な樹神社は、全国各地に点在している。じつは、この地にある樹神社で泊めてもらえるよう、本家の娘である飛鳥が連絡をしてくれていたのだ。

優子たちは、境内をきよろきよろと見回す。しばらくすると、巫女装束に身を包んだ一人の少女がやってきた。

「え〜っと、SPINELのみなさんですね」

優子が返事をする、少女はにっこりと微笑んで自己紹介を始め

る。

「わたしは飛鳥の従妹で、樹神美咲と申します」

美咲は、ぺこりとおじぎをした。

「シヨウ…、巫女さんだよ」

アリスがシヨウに耳打ちをする。が…、シヨウの反応はいつもと変わらない。

「ダメですね…、この朴念仁は…」

アリスは、やれやれといったふうのため息をつく。そんな二人のやりとりを見て、美咲は苦笑してしまった。

自己紹介を終えた優子たちは、美咲の案内で住居の大部屋にやってくる。

「あの…。なにか…?」

優子は、美咲の視線を感じて、大汗をかいてしまう。美咲は、ここまで案内する間も、優子の様子をチラチラと窺っていたのだ。

「い、いえ！ なんでもありません！」

慌てて否定する美咲だったが、かなり挙動不審である。

「そういえば…。みなさんって…、お笑い芸人さんなんですよね」

「

美咲は、話題を変えるように、そんなことを問いかけた。

ピシッ！

その瞬間、すべての時が止まった。

カクカクした動きで、優子が美咲に視線を向ける。

「み、美咲ちゃんって…、いつもどんなテレビを見てるのかな？」

優子は、引きつりながらも微笑んだ。

曜日ごとにレギュラー番組を持ち、企業CMにもバンバン出ているスーパーアイドルSPINELが、どう間違ったらお笑い芸人になるのだろうか…。

「えっ、もしかして違ってましたか！」

美咲は、勘違いに気づき、慌てて口を押さえる。どうやら美咲は、テレビや情報誌をあまり見ることがないようだ。そして、美咲のボ

ケボケは、さらに続いた。

「ええーっ！ ショウさんって、男のかただったんですか〜！」
そのセリフに、優子たちは大爆笑する。

「だって、一番美人…」

美咲の素直な感想に、ショウを含めた全員が落ち込んだ。

名乗ってなお女性と間違えられたのは、ショウも今回がはじめてである。しかし、美咲が驚いたのにも理由があった。飛鳥から『女の子四人組がそっちに行くから、お願いね』と言われていたのだ。そのため、用意した部屋は一つしかない。

「飛鳥〜、あんたって子は〜…」

優子は、陰ながらガツポーズをした。ショウと同室なのが、すごく嬉しいらしい。

「オレたちは、別に構いませんよ」

もう一室用意すると焦っている美咲を見て、ショウはにっこりと微笑んだ。精霊界を冒険しているときも、宿屋ではアリスやセリアと同室が多かった。お互い、こういった状況には慣れているのである。

「そ、そうですか…」

それを聞いた美咲は、落ち着きを取り戻す。だが、悩みでもあるのか小さく唸りはじめ、優子に向かってあることを問いかけた。

「優子さん…。最近、あなたの身の回りで、なにか変わったことはありませんでしたか？」

意味ありげな質問に、優子はドキツとする。

「か、変わったことね〜…」

優子は、頭を捻って考え込んでしまう。魔獣化事件の発生、魔族の転入生、ラル大陸での戦い、ガートイスの襲来、リウム誕生…。自慢ではないが、優子の回りでは変わったことが絶えない。

「と…、特にないかな〜」

優子は、苦笑しながら頭をかく。それらの事件を話せるはずもなく、優子は惚けることにした。

「そう…ですか…」

とても納得したようには見えなかったが、美咲は失礼なことを聞いたと頭を下げた。

第3話 除霊することは、大勇者でも無理っぽい？

巫女の御勤めがある美咲はいなくなり、大部屋には優子たちだけが残された。

ここは純和風な大部屋であり、テレビなどは見当らない。しばらくは大人しくしていた優子たちも、すぐに暇を持て余してしまった。「ねえ…、海でのことなだけで…」

不意に、アリスが話しを始める。

「あれってやつぱり、幽霊…だよね…」

にやりと微笑み、ゆっくりと優子を見つめた。

突然始まった幽霊話しに、優子は真っ青となり、セリアは大きな悲鳴を上げる。そんな三人を見て、シヨウはため息をついた。

（おまえら、どっちかといったら、霊に近いほうだろうが…）

シヨウは、心の中でそう呟くのだった。

精霊族や妖精族は、実体こそあるが人間界という霊に近い存在である。天空族に至ってはさらに霊体に近い存在で、そんな三人が霊を恐がっているのはおかしな話であった。

「お兄ちゃんは、幽霊…平気なの？」

優子は、震えながらシヨウに近寄ってくる。

「平気…っていうか、実際に見たことないからな…」

シヨウは、苦笑しながら頭をかいた。精霊界で悪霊と戦ったことはあるが、この場合の霊とは意味が違うだろう。

「そ、そうよね。見えない霊に恐がっていても…、しょうがないよね！」

優子は、自分を納得させようと、必死に呟いた。

「見ようと思えば…可能だったり…して」

シヨウが声を殺して囁く。そんな言葉に、優子たちは震え上がった。

霊が見えないのは、意識のチャンネルを合わせていないだけ…。

チャンネルを調節すれば、霊の姿を見ることが出来る。シヨウは、優子たちにそう説明した。

「意識チャンネルって言われても…、ねえ〜」

優子は、アリスとセリアを見て呟く。言葉では簡単に思えるが、チャンネルを合わせるなど実感がわかないのだ。

「難しく考えなくてもいいんだよ。こんなふうには〜」

シヨウは、まるでチューナーを合わせるように意識をコントロールする。

「ま〜、実際に試してみたことはないけど、霊がいるならこれで見える…はず…、えっ!」

シヨウは、その光景に己の瞳を疑った。ぼんやりとはあるが、優子に何かがまとわりついている。徐々にはつきりしてくるソレは、全身ずぶ濡れで青白い肌をしている女性の姿であった。

「わああ!」

シヨウは、思わず仰け反ってしまう。女性は、シヨウと視線を合わせて、薄気味悪い笑みを浮べた。

「えっ、なに!」

優子は、慌てて左右を確認する。もちろん、アリスとセリアがいるだけで、何も見えるはずがない。優子は、わけもわからず縋るようにシヨウを見つめた。

(おいおい、マジで憑かれてるのか〜…)

シヨウは、反応に困ってしまった。霊自体は、部屋の中にもたくさんいるが、どれもぼんやりと光っているだけの曖昧な状態である。だが、優子に憑いている女性の霊は、はっきりとした姿をしており、パツと見は人間と変わりなかった。おそらく、非常に強い念を持った霊なのだろう。

シヨウは、ゆっくりと優子に近づく。呆然としている優子の肩…、つまり霊の頭をめがけて手刀を振り下ろした。しかし、何の手ごたえもなく、手刀は霊を突き抜ける。続いて、シヨウは光の精霊力を照射してみた。これも特に効果はなさそうだ。

さらにシヨウは、虚空から聖剣クリソベルルを取り出し、霊に突き立てる。女性の霊は、平然としていた。万策尽きたシヨウは、頭を押さえて唸り声を上げてしまった。

「ちよつと、なんなのよー！」

優子は、涙を流して恐怖する。シヨウに何かが見えていて、それをなんとかしようとしているのは雰囲気理解できた。

霊は見えるから怖いと思っていたが、それは間違いのようである。優子は、見えない恐怖に耐えられず、気を失ってしまうのだった。

美咲は、廊下を走るように大部屋へと向かっていた。突然、得体の知れない強大な力が発生したのを感じたからだ。

「ま、まさか…」

美咲は、優子の身に何かが起こったのではないかと考えていた。

廊下の角を曲がり、美咲は大部屋へと飛び込む。そこで美咲が見たものは、五精霊化したシヨウが最強の技ライトニングドラゴンを繰り出そうと構えている姿だった。

「いったい、なにをしているんですかー！」

五精霊となったシヨウには驚かず、美咲は大声で叫んでしまう。その一喝により、騒ぎは収まるのだった。

気を失った優子を、アリスとセリアが介抱する。シヨウは、人間族に戻り、座布団に腰を据えた。

「そうか。美咲ちゃんには、アレが見えていたんだ…」

シヨウは、チラツと優子の様子を窺う。優子の背後には、相変わらず女性の霊が纏わり憑いていた。優子を見る美咲の様子がおかしかったのは、このことが原因だったのだろう。シヨウの周りには、いままで霊能力を持つ者がいなかったのだから、美咲の存在はかなりの驚きであった。

一方の美咲も、シヨウが完璧な霊視をしていることに驚いていた。シヨウから不思議な力を感じていたが、それは霊能力というわけではない。いったい、どうやって霊視をしているのだろう。

「わたしは、除霊師…というか、退魔師なんです。まだ、半人前で
すけど…」

美咲は、照れくさそうに呟いた。

「へえ、美咲ちゃんには特殊な能力があるんだ」

アリスが会話に加わってくる。

「飛鳥には能力の欠片も無いのに…。本当は、美咲ちゃんが人間神
候補だったりして」

アリスは、冗談でそう囁いた。その途端、美咲が驚愕して目を丸
くする。

「ににに、人間神って…。いったいなんのこと…ですか？」

動揺した美咲は、視線を宙に泳がせる。樹神とは自然崇拜で有名
だが、じつは人間神を祀っている神社であった。

そのことを知っているのは、一族の中でもごく一部の者だけであ
る。たとえ飛鳥の友人であっても、アリスがその秘密を知っている
とは驚きであった。

「ああ、惚けなくても大丈夫…」

アリスは、シヨウが右手だけにしている手袋を強引に外してみせ
た。

「大体の事情はわかっているから」

シヨウの右手の甲には、鳥が翼を広げたような紋様が浮んでいる。
その傍らに、炎のような形をした、小さなアザが見られた。

「そ、それは人間神さまの！」

美咲は、大声で叫んでしまう。そのアザとは、紛れもなく樹神家
の伝承に残る人間神の紋章であった。

「いちおう、オレが第二候補だったりする…」

シヨウは、迷惑そうに呟いた。

もし、第一候補の身に何かが起これば、繰り上がりでシヨウが人
間神となってしまう。もちろん、そんな面倒なことはごめんだと、
シヨウは考えていた。

「す、すごいです！ 第二候補とはいえ、神さま候補のかたにお会

いできるなんて〜」

美咲は、尊敬の眼差しで、シヨウを見つめるのだった。

「こらこら、別の話題で盛り上がってるんじゃないの！ いまは、優子をなんとかすることが先決でしょ！」

セリアは、話が逸れないように釘を刺した。人間神候補の話など、この状況ではまったく関係ないことである。

「そ、そうでした！」

美咲は、慌てて気を失っている優子に近づく。意識を集中して除霊を始めようとしたが、不意にシヨウたちを見つめて苦笑する。

「あの〜…。悪い霊ではないので、除霊しなくても問題ないと思うんですが…」

とんでもないことを言う美咲に、アリスとセリアは啞然とした。

「まあ、害がなければいいんじゃないか？」

シヨウが他人事のように呟く。

「あ…。ゆうを溺れさせようとしたから、それだけは注意しておいてくれ」

シヨウは、海での出来事を思い出した。

美咲は、霊との対話をはじめ。しばらくして、対話の内容をシヨウに伝えた。

「優子さんを溺れさせたのは、彼女ではないそうです…」

驚くシヨウたちに、美咲は話を続ける。彼女は浮遊霊で、優子の慈愛に満ちた生体波長に引かれて憑いてきたという。それも、海水浴場ではなく、来る途中、小田のワゴン車の中で取り憑いたそうだ。「じゃあ、海でゆうを溺れさせようとしたのは…別の霊なのか？」

シヨウの質問に、美咲が頷く。

女性の霊によると、優子が泳いでいるとき何者かの悪意に満ちた邪念が発生して、その邪念に引き寄せられるよう、海で命を落としたり地縛霊たちが数多く集まってきたらしい。

恐ろしいことに、力の弱い霊が何体も集まって実体化し、優子を

海中へ引きずり込もうとしたそうだ。優子を溺れさせ、自分たちの仲間にしようとしていたのだ。

あときアリスが抱きつかなければ、優子は死んでいたかもしれない。

「霊って…、恐いなだね」

アリスは、真剣に恐怖する。

剣や精霊術が通用しない相手では、さすがのアリスも太刀打ちできない。自分が取り憑かれてしまったらと思うと、身震いを感じてしまうのだった。

第4話 優子に憑いた謎の浮遊霊

「ん…、うん…？」

優子は、ゆっくりと目を覚ました。

「わたし…、どうしちゃったのかな…」

身体を起こし、辺りを見回す。優子は、すぐそばで自分をジッと見つめている年上の女性がいることに気づいた。

『大丈夫…ですか？』

女性は、顔色の悪い優子を見て、心配そうに問いかける。

「あ、はい。ありがとうございます」

優子は、慌てて返事をした。そんな優子を見て、アリスとセリアは不思議そうに小首を傾げる。

「え…つと…。もしかして、美咲ちゃんのお姉さん…ですか？」

優子は、正座して女性と向かい合う。

女性は、優子の反応に驚くが、すぐに笑顔となった。

優子は、みんなに心配をかけてしまったことと、女性にジッと見つめられている照れから、苦笑気味に頭をかいた。

「ちよつとセリア！」

アリスがセリアを呼んで、優子に聞こえないようひそひそと話し始める。それを見た優子の頭上には、いくつものハテナマークが浮んだ。

「ゆっ…」

シヨウは、優子に声をかける。

「おまえ…、見えるのか？」

女性を指差し、驚いたような声を上げた。

「はあ？」

優子は、意味がわからず奇妙な声を上げる。

「見える…って」

優子は、あらためて女性を確認した。年齢は二十歳前後…、かな

りの美人である。なにより、その優しそうな微笑みは、優子の心まで穏やかにさせてくれた。

「だから、このお姉さんがなに？」

優子は、ふと彼女に違和感を感じた。

彼女は、真夏にも関わらず、コートを羽織っている。そして、さきほどまで水に浸かっていたかのように、全身がずぶ濡れであった。「ま、まさか…」

優子は、シヨウと美咲を見つめる。二人は、優子が“見える”ことに、かなり驚いているようだ。

「声まで聞こえるなんて…、よほど波長が合ったんだろっな〜」
シヨウは、楽しそうに微笑んだ。ちなみにシヨウは、声まで聞くことはできない。

ハツとした優子は、女性に視線を戻す。気持ちの持ちようか、優しそうな笑顔も途端に薄気味悪く見えてしまう。

「はう〜〜…」

優子は、彼女が霊だと気づき、真っ青な顔で再び気を失ってしまった。

優子が気を失っていたのは、ほんの数分であった。ゆっくりと起き上がり、女性の霊と視線が合つて、おもわずギョツとしてしまう。霊が見えるのは、気のせいではなかったようだ。

「ねえ、優子…。幽霊見えるって、本当なの？」

アリスは、恐る恐る問いかけた。

「え〜、なんのこと…かな〜」

優子は、真っ青な顔で惚ける。だが、視線はあさつての方向に固定されており、決して後ろを見ようとはしない。

『あの〜、優子…さん？』

霊が優子の名前を口にする。その瞬間、優子の身体がビクツと震えた。

「やっぱり見えているみたいね〜」

セリアも、興味深そうに優子の様子を眺める。確かに、何らかの気配を感じるが、セリアには一切見えなかった。

「いや、世の中には不思議なことがあるもんだね」

アリスは、しみじみと呟く。アリスたちの存在自体が不思議だということとは、この際置いておくことにしよう。

「あつ、そうだ」

何かを思いついたのか、アリスはシヨウの背後に回り込む。そして、背中から抱きつき、瞳を瞑った。

「おお、見える見える」

その行動に、優子がムツとした。

「アリスちゃん…。なぐにをやっているのかな」

このときの優子は、霊の存在を忘れてしまうほど怒っていた。

「今、シヨウの視線で優子を見ているの」

アリスは、意味不明な説明をする。

生体波長が同じであるシヨウとアリスは、同一人物といっても過言ではない。二人は、魂レベルで繋がっており、身体に触れることで、記憶や感覚を共有することができるのだ。もちろん、抱きつくほど身体を密着させる必要は、まったくくない。

「二人は、恋人同士なんですか」

仲が良さそうに見えたのか、霊はそう呟いた。

「違います!」

優子が即座に否定する。

「お兄ちゃんはわたしの…、はっ!」

文句を言おうとしたが、相手が幽霊だということを思いだし、慌ててそっぽを向く。そんな態度に、霊は悲しそうに頂垂れた。

「優しそうなお姉さんみたいだから、別に恐がる必要もないんじゃないの?」

アリスは、雰囲気ですら感じていた。幽霊といっても、見えてしまえば大したことはなさそうだ。

「って、いい加減離れるよ…。鬱陶しい…」

シヨウは、アリスの腕から抜け出そうと身体を動かす。

記憶と感覚を共有したため、アリス一人でも霊視できるはずである。しかし、大雑把な性格であるアリスには、細かな感覚の調整などできなかつた。シヨウから離れると、霊は途端に見えなくなる。

再び抱きつこうとするアリスを、優子が慌てて引き止めた。アリスは、霊が見えなくなったことに落胆し、とんでもないことを言い始めた。

「シヨウ…。幽霊が見えるようになるアイテムを創って〜」
それを聞いた優子は、目を丸くして驚く。

「シヨウたちだけ見えるなんて不公平でしょ〜」

アリスは、わけのわからない駄々をこねる。

「セリアも見たいよね」

セリアに話しを振り、にっこりと微笑んだ。

「いや…。わたしは別に…」

セリアは、苦笑しながら否定する。わざわざ、霊を見えるようにして、どうするのだろうか。

「わかつたよ…。面倒だけど創ってみるか…」

シヨウは、ため息をついて頂垂れるのだった。

クリエイト能力のあるシヨウは、無からいろんな物質を創り出すことができる。特に鉱物や宝石を創り出すことが得意で、サッカーボールほどのダイヤモンドなら数時間もあれば十分だった。また、様々な能力を付加させることで、特殊なアイテムを創ることもできる。某有名漫画に出てくる“どこにでも繋がるドア”ですら、シヨウなら三日で創り上げることだろう。

シヨウは、宙に手をかざして、精霊力を練りはじめる。すると、液体のような鉱物が生まれ、一塊の宝石となった。

「能力を付加しないといけないから、創るのに一晩ぐらいかかるぞ…」

シヨウは、待ち構えているアリスにそう伝えた。

「な〜んだ…」

アリスは、おもいつきり落胆する。どうやら、今すぐというわけにはいかないらしい。

『凄いですね〜』

霊は、アリスと違う感想を口にする。簡単そうにしているが、やっていることは奇跡に近い。女性の霊は、素直に感動していた。

そんな霊の姿を、優子はジッと見つめる。優子に無視されて落ち込んだり、シヨウの能力を見て驚いたり…。実体がないだけで、普通の人間と少しも変わらない。幽霊というだけで恐がっていた優子は、その無意味な考えを恥じるのだった。

覚悟を決めた優子は、女性の霊と向かい合う。

「え〜っと、お姉さん…。あなたの名前を聞かせていただけませんか？」

話しかけられた霊は、とても嬉しそうに微笑んだ。

『優子さん…。ありがとうございます』

霊は、自分の存在を認めてくれたことに感謝した。

『わたしの名前は…』

笑顔で自己紹介しようとしていた霊だったが、名前の箇所で声が止まる。しばらく固まっていたが、困ったような顔をして、とんでもないことを呟いた。

『わたしの名前は…、いったいなんでしょう？』

美咲は御勤めに行っているため、霊の声は優子にしか聞こえない。

優子は、豪快にずっこけた。

「…なんだって？」

シヨウが優子に問いかける。優子は、あらためて事情を確認した。どうやら、浮遊霊として長年各地をさまよっていたため、自分の名前をすっかり忘れてしまったようである。

「まいったな〜…」

優子は、苦笑気味に頭をかいた。いつまでも、霊のお姉さんでは呼びづらい。優子が頂垂れてため息をつくとき、霊のお姉さんは一つ

の提案をした。

『優子さん…。わたしの名前は、あなたが決めてくれませんか？』

霊は、にっこりと微笑む。わからないのであれば、ぜひ優子に決めてもらいたい。

「え…」

優子は、その展開に驚く。名前を付けるなど、そう簡単な問題ではない。しかし、女性の姿を見ていると、優子の脳裏にあるイメージが浮かんできた。優子は、それを口にしてみる。

「あおい…。葵さんってのは、どうでしょう？」

優子が呟くと、女性の霊は嬉しそうに微笑んだ。

こうして優子と葵の奇妙な関係は、なんの前触れもなく始まった。

第5話 確かに魔獣ですけど、そんなに恐がらなくても良いじゃないですか！

日も暮れてしばらくしたころ、美咲はシヨウたちに街へ出かけることを告げた。

「魔の気配？」

シヨウは、美咲の言葉を聞き返す。

「はい…。どうやら街に、強力な魔が入り込んだみたいなんです…。」
滝で楔をしている途中、美咲は魔の気配を感じた。それを調べに向かうというのだ。

「いまは父と母が不在なので、わたしが魔を祓いに向かいます」
固く決意する美咲だったが、退魔師として半人前であるため心配も残る。間が悪いことに、美咲の両親は、近くの街に出没した魔を祓いに行つて、数日間は帰つてこないらしい。

「一人で、大丈夫なのか？」

シヨウは、一応確認してみる。魔物や魔族が相手ならともかく、除霊では一緒に行つても役に立たないだろう。

「はい、大丈夫です」

美咲は、除霊だけではなく格闘術にも秀でている。その辺の大人が数十人襲つてきても、楽勝で勝つことができた。

「それに…。いざというときにはこれがありますから」

そういつて、美咲は左腕の袖をまくり上げる。美咲の腕には、奇妙な紋様の彫られた腕輪が付けられていた。

シヨウは、腕輪からある種の力を感じた。だが、その腕輪が何であるのかは質問しなかった。切り札として持っている以上、よほどの力を発揮するものだろう。

「それでは、留守をお願いします」

美咲は丁寧な頭を下げる。

「神社には、結界が張ってあります。邪悪な霊は、一切入って来れませんので」

優子たちを安心させるよう、美咲はにっこりと微笑んだ。

繁华街までやって来た美咲は、物陰に隠れながら魔の気配を探っていた。

退魔師とは、人知れず魔と戦い、影ながら平穏を護る者たちのことである。美咲も半人前でありながら、隠密に事を運ぼうとしていた。しかし、午後八時過ぎの市街地には意外と人が多く、巫女装束で動き回る美咲の姿は、かなり目立っていた。

「おや、美咲ちゃん。また、退魔の仕事かい？」

後片付けをしていた店員が、美咲に気づいて声をかける。

「あつ、はい！」

突然なことに、美咲も素直に答えてしまう。美咲は隠密行動をしているつもりのだが、街の人たちにとってはバレバレであった。

美咲は、慌てて建物の陰に身を隠す。そんな行動を、店員は微笑ましそうに見ていた。

「美咲ちゃん。この街の平和は美咲ちゃんにかかってるんだからね。期待しているよ。」

家の窓から顔を覗かせたおばさんは、隠れていた美咲に声をかける。美咲は、引きつった顔で苦笑した。

「はあ……。わたしって、才能ないのかな……。」

美咲が落ち込んでいると、さらに追い打ちをかけるように、仕事帰りのサラリーマンが頭を撫でてきた。

「ふえ〜ん……。」

涙目でふてくされる美咲だったが、これまでにないほどの真顔となる。突然、強力な魔の発生を感じたからだ。

美咲は、その気配に向かって走り出す。魔は、住宅の屋根伝いに、山へと向かっていた。

（霊じゃ…ない？）

美咲は、魔を有視で捉える。

はつきりとわからなかったが、どうやら実体を持つ存在のようだ。

もしかすると、狐憑きを起こした人間なのかもしれない。美咲は、覚悟を決めて魔の後を追った。

魔の気配は、郊外にある小学校で動きを止める。グラウンド中央に立ち、ジツと動かない。まるで、美咲を誘っているかのようなであった。

小学校の塀を飛び越えた美咲は、魔の存在を確認する。美咲は、その姿に思わず息を吞んでしまった。そこには、完全に実体化した巨大な獣がいたのだ。

獣がゆっくりと振り返る。漆黒な毛並みに、真っ赤な三つの瞳……。そんな化け物は、鋭い牙を剥き出しに唸り声を上げていた。

(に、逃げなきゃ…)

美咲は、直感的に勝てないことを理解する。それどころか、獣から発せられる魔によって、いまにも心臓が止まってしまいそうだ。

「ああ……」

必死に逃げようとするが、恐怖によって身体がうまく動かない。

美咲は、思わず尻餅をついてしまった。

ガタガタと震える美咲に、獣はゆっくりと顔を近づける。

バシッ！

その瞬間、退魔の力と獣の魔が反応して、衝撃が起こった。獣は、弾かれたように飛び退く。そのことで、獣は美咲を敵と見なしたようだ。

「があああー！ー！ー！」

獣は、ひときわ大きな怒声を上げた。

「いやあああー！ー！ー！」

美咲は、身を竦めて悲鳴を上げる。すると、美咲が付けている腕輪に変化が起こった。

腕輪に付く五つの石のうち、赤い石が輝き出す。それに伴い、前方の空間に魔方陣のような紋様が浮かび上がり、中から一つの影が飛び出してくる。

影は、間合いを詰め、居合いにより獣の肩を引き裂いた。獣の肩から鮮血が噴き出す。獣は、距離を取り、鋭い視線で影を睨みつけた。

「彼女に危害を加えることは、この銀星がゆるさん！」

まるで時代劇に出てくるような浪人の姿…、手には美しい日本刀が握られている。そして、驚くべきは額から伸びた二本の角…。そう、この国を代表する空想上の怪物、鬼のようなのだ。

銀星と名乗った鬼は、美咲を庇うように獣と向かい合う。

「…って、あれ？」

銀星は、はじめて獣をまじまじと見た。

「もしかして…、りうむ殿…ですか？」

それは、銀星もよく知っている、狼型魔獣のりうむであった。

「がるるう…。おっさん…」

りうむは、怒ったような声を上げた。その声は、かわいい女の子のものである。

「す、すみません。まさかりうむ殿が相手だとは思いませんでした…！」

銀星は、慌てて刀を収める。真っ青な顔でりうむに近づき、自ら斬りつけた傷を確認した。両断する勢いで斬りつけた傷は、りうむの自己回復能力により、すでに塞がりかけていた。

「ぎ…、銀星さん…」

美咲は、銀星の反応に驚く。

「もしかして、お知り合いのかた…なのですか？」

獣は、大型肉食獣の数倍はある大きさで、人の言葉を操っている。いったい何者なのだろうか…。

「あ…。このお方は、りうむ殿。我ら鬼界の恩人なのです…」

銀星は、嬉しそうに微笑んだ。

「ぎんせく、いたいよお…」

りうむは、銀星にじゃれつくよう身をすり寄せる。

「あははっ…。す、すみません」

魔獣化したリウムの体毛は針金のように太く硬いため、銀星はその痛さに苦笑した。

「あっ！ りうむ殿がおられるということは、ここがしょう殿やありす殿の世界なのですか？」

銀星の言葉に、リウムは頷いた。

「シヨウ殿…って、すっごく美人な男性の？」

美咲の説明はとんでもなかったが、銀星たちには充分であった。

シヨウたちが家に来ていることを伝えると、銀星はその偶然に驚く。

「美咲殿…。ぜひ、しょう殿にお会いしたいのですが…」

銀星は、期待に満ちた顔で美咲を見つめた。

「はい。せっかく助けに来てくれたわけですし…、すぐに帰ってしまつのもつまらないですもんね」

美咲は、照れたように微笑んだ。

「ぎんせく、いたい…いたいよお…」

その間もリウムの抗議は続いていた。リウムは、銀星が相手をしてくれないことにムツとする。そして、何を思ったのか、銀星の肩から胸にかけてを、大きな口で啜えた。

「はむはむ…」

リウムは、口を動かしながら銀星に噛みつく。

「ひっ！」

リウムの突然な行動に、美咲がびっくりする。巨大な怪物が、銀星に襲いかかっているようにしか見えないのだ。

「大丈夫です。これは、りうむ殿の友愛のしるし…。いわゆる、あま噛みというやつ…」

銀星の言葉が終わる前に、その異変は始まった。

バキバキボキッ！

骨が砕けるような音が辺りに響く…。

「り…、りうむ…殿？」

銀星は、真つ青な顔でリウムに問いかける。

リウムは、前足で銀星を押し倒し、さらにはむはむと口を動かす。銀星は、大量の血を流して痙攣しはじめている。その惨劇に、美咲は大きな悲鳴を上げるのだった。

第6話 すごいアイテムだと思うけど、あまり役に立たない気がします

その光景に、シヨウたちは愕然とした。美咲と一緒に現れたリウムが、血だらけの銀星を啜っていたのだ。

「マスター…、おみやげ…」

銀星を床に置いたリウムは、しっばを軽く揺らした。

「おみやげって…、おまえな…」

シヨウは、銀星に近づき、安否を確認する。

「銀星さん…。生きてますか？」

さすがは鬼族の末裔…、銀星は、辛うじて生きていた。

「いや、りうむ殿には参りました…」

復活した銀星は、頭をかきながら微笑む。その回復の早さに、美咲は啞然とした。

「で、銀星さん…。なんで銀星さんが、こつちの世界にいるんですか？」

シヨウたちが戻ってきた後、人間界と鬼界を繋ぐ転移門は完全に閉じられたはずである。銀星が人間界にいるのは、どう考えてもおかしい。

「じつは、美咲殿と召喚の契約を結んでおりまして…」

銀星の言葉に、シヨウたちは美咲を見つめる。美咲は、苦笑しながら腕輪を外し、机の上に置いた。

「これは、この神社に代々伝わる召喚の腕輪です…」

美咲は、腕輪について説明を始めた。

付いている宝石は、召喚者とかわした契約石である。美咲は、腕輪を使って、契約した仲間を召喚することができた。

契約石には、召喚する者の力に応じて数字が設定されている。腕輪には、合計で十の力を付けることができるのだ。ちなみに、銀星の契約石は二である。

また、契約石は取替えが可能であり、美咲は五つの石を付けてい

た。

「こちらから順番に…龍、鬼、天狗…」

美咲が召喚できる仲間を紹介する。

「河童…、トイレの花子さん…」

その瞬間、シヨウがずっこけた。

「ちよつと待てー！ー！ 後の二つは、なんの冗談だ！」

シヨウは、自然公園の湖に住んでいる河童を思いだしていた。姿を見られオロオロするだけの河童が、除霊の役に立つとは思えない。さらには、トイレの花子さんなど、まったくの意味不明である。

「知らないんですか？ 学校の怪談とかで有名ですよ」

美咲は、的外れな答えを返す。シヨウは、おもいつきり頂垂れるのだった。

「なんか、ゲームのアイテムみたいね…」

優子は、呆れたようにため息をつく。龍が四、鬼と天狗が二、河童と花子さんが一。召喚の腕輪は、まさに、RPGなどに出てくるようなアイテムのようだ。

美咲は、ほかにもいくつか契約石を持っていたが、うちのこやスカイフィッシュなど、いずれも除霊に役立ちそうになかった。

「しかし…、こんな常識を逸脱したアイテムを創るのは、ラルドさまぐらいだろうな」

シヨウの脳裏に、高笑いするラルドの姿が浮かぶ。すると、アリスが腕輪を手に取り、色々な角度から眺めはじめた。

「でも…。これって、シヨウの作品みたいだよ」

アリスの言葉に、シヨウはギョツとする。

「ほら…、ここにシヨウの銘があるし…」

腕輪の表面には、小さくではあるが古代精霊文字でシヨウの銘が刻まれていた。

すべての視線がシヨウに注がれる。

(未来のオレ…。いったい何を創っているんだよ)

シヨウは、シクシクと泣きながら、心の中で呟く。巨大ロボット

に武具生命体、そして召喚の腕輪……。これでは、怪しい錬金術師と同じであった。

銀星が鬼界へと戻り、時刻は午後十時になろうとしていた。

お風呂に入った優子たちは、布団のひかれた大部屋で寛いでいる。どういいうわけか美咲も同じ部屋で寝ることとなり、まるでお泊り会のようになってしまった。

「リウムちゃんがこんな可愛い女の子になるなんて、びっくりです」

寝間着姿の美咲は、暗黒族に戻ったリウムを、膝の上に乗せて抱きしめていた。

「リウムちゃん、ぜひ契約を！」

リウムが魔力属性であることも忘れ、美咲は契約の打診をした。

美咲的には、可愛ければ退魔に関係なくてもOKなのだ。

「ま、ますた〜…」

最初はおとなしくしていたリウムも、美咲の異様なプレッシャーから逃れ、縁側で星を見上げているシヨウのもとに駆け寄った。

「あははっ リウムは、簡単にあげられないな〜」

シヨウは、しがみ付いてくるリウムに苦笑する。

「ところで…」

シヨウは、不意に雑談している優子たちを見つめた。

「お前ら、葵さんの存在を、すっかり忘れてはいないか？」

その言葉に、優子たちはハツとした。

葵は、相変わらず優子の背後で微笑んでいる。おしゃべりしている優子たちと馴染んでおり、最初に見たときのような薄気味悪さは感じられない。美咲によると、霊は見る者の心によって、不気味に見えたりそうでなかったりするらしい。悪霊や怨霊でない限り、必要以上に恐がったりすることはないのだ。

「た、たしかに……。いつまでも、このままというわけにはいきませぬね……」

美咲は、汗をかきながら考え込む。

「やはり葵さんには、こころよく成仏してもらいたいと思います…」
それにはまず、葵がどういったわけで現世にとどまっているのか
を知らなくてはならない。美咲は、葵に未練がないかを問いかけた。
『未練…ですか？』

葵は、小首を傾げて考え込む。

『じつは、あるものを…探しています』

美咲と優子は、身を乗り出して次の言葉を待つ。

『ですが、それが何だったのか…、忘れてしまいました』

期待が大きかった分、二人はおもいつきりずっこけてしまった。

どうやら、名前と同じように、自分の目的も忘れてしまったようだ。
葵に成仏してもらおうにも、彼女の未練がわからなければ話にならない。
つまり、美咲たちの計画は、最初から躓いてしまったわけだ。

「これは、難解ですね」

美咲は、葵とのやりとりに苦笑する。そして、葵の声が聞こえていないシヨウと、姿すらみえていないアリスとセリアに、いままでの内容を説明した。

「なるほど…。まずは、記憶を取り戻さないといけないわけだな…」
そう呟くシヨウだったが、ある不安を感じた。

「え〜っと…。葵さんは、自分が死ぬことになった原因を覚えてるの？」

葵は、顔を横に振った。すると、シヨウは困ったように頭をかく。
「記憶を取り戻すことは、死の瞬間も思いだしてしまうことになるんじゃないかと…」

シヨウの言葉に、葵はハツとした。

彼女がどんな理由で命を落としたのかはわからない。だが、記憶を取り戻すことで、せっかく忘れていた死の恐怖や苦痛を思い出し
てしまうかもしれない。

「おお〜〜」

美咲は、おもわず拍手する。除霊に対しては素人のはずのシヨウが、そこまで理解しているとは驚きであった。

「シヨウさんって、修業すれば立派な霊媒師や除霊師になれるんじゃないですか」

美咲が嬉しそうに微笑む。霊媒師とは、ただ霊力が強いだけではいけない。本質を知り、霊の気持ちがあわかってこそ一流と言えるのだ。

「霊媒師って…」

シヨウは、苦笑しながら頭をかく。霊に対抗する方法は知っておきたいが、自分で霊視や除霊をすることはなるべく遠慮したい。

「とにかく、どうするのは葵さん次第ってことです…」

シヨウは、葵をジッと見つめた。

『たとえ苦しむことになっても…』

覚悟を決めた葵は、しっかりとした口調で答える。

『記憶を取り戻して、探しているものを見つけない…』

その声は美咲と優子にしか聞こえなかったが、彼女の決意はシヨウにも伝わった。

シヨウは、ゆっくりと頷く。

「わかりました。あなたの願い…、ゆうが全面的に協力するそうです！」

シヨウは、任せたといわんばかりに、優子の肩へ手を乗せた。

「ええー！ー！ー！」

驚いた優子が叫び声を上げる。当然、シヨウがなんとかしてくれろと思っていたのだ。

「ちょっと、お兄ちゃん！ わたしに、どうしろって言うのよ！」

優子が涙目で訴えると、シヨウは協力できない理由を説明した。

「オレは霊に対して素人だし、アリスやセリアは霊の存在すら確認できていない」

もっともな理由に、優子は頷く。

「そこで、葵さんに波長がぴったりなお前と、半人前だがスペシヤ

リストな美咲ちゃん。ついでに、リウムにも協力させるから、三人だけで何とかしろ。」

シヨウは、膝の上に座っているリウムの頭を優しく撫でた。

仕事を任されたリウムは、微笑みながら頷く。シヨウに頼られていることが、そうとう嬉しいらしい。

「そ、そんな……」

優子は、反論することも出来ず、がつくりと項垂れてしまった。

こうして、葵さんの未練探しを目的としたチームが結成される。

未練を解決して、葵さんには、無事に成仏してもらわなければならなかった。

第7話 未練を求めて、紅柱石心霊スポット巡り

「これが、どこの街にでもありそうな、切り倒そうとすると祟られてしまう呪いの樹です」

美咲の説明は、唐突に始まった。

「でも、ここの樹には呪いなんてありませんから、切り倒しても大丈夫です」

身も蓋もない言い方をする美咲に、優子は苦笑する。

「ですが、わたしは自然崇拜で有名な樹神の人間…。そんなことは、口が裂けても言えません」

そのわりに、美咲の声は、辺りに響き渡っていた。

「はあ…」

大きなため息をつく優子…。日付も変わり今朝から葵の記憶探しの街を回っているのだが、なぜか美咲の説明による心霊スポット巡りになっていた。

「ねえ美咲ちゃん…。こんなことで記憶探しの手掛りになるの」

特殊な趣味の人でないかぎり、観光でもこんな場所は回らない。

「え〜とですね〜」

美咲は、優子の疑問に答える。

美咲によると、ただ心霊スポットを回っているだけではなく、他の浮遊霊とコンタクトを取り、葵についての情報を集めているというのだ。

優子は、辺りを見回す。しかし、優子たち以外には、誰の姿も見られない。

すると、リウムが繋いでいる手を引っ張り、樹の幹に空いている窪みを指差した。ちょうど人が入れるほどの広さなのだが、もちろん誰もいるはずがなかった。

「リウムちゃん…。何か見えるの?」

優子は、しゃがんでリウムに視線を合わせる。が…、やはり何も

見えることはない。

「も、もしかして…」

優子は、リウムが付けている霊視のペンダントにそっと触れてみる。その瞬間、薄気味悪い男の姿が、ゆっくりと浮かび上がった。

「わああ！」

あまりの驚きに、優子はおもわず仰け反る。ペンダントから手を放すと、途端に男の姿は見えなくなってしまった。

「優子さんには、葵さんの姿しか見えないようですね〜」

美咲は、優子の反応を見て、そう結論付けた。どうやら、優子に霊能力が備わったわけではないらしい。

「そ、そうなの…?」

優子は、恐怖で真っ青となり、小刻みに身体を震わせた。

紅柱石地区には、数多くの心霊スポットが点在する。古来より霊界への通り道があるとされた紅柱石は、霊能力者の間でも隠れた霊場として有名であった。そのため、怪奇現象が絶えることはなく、美咲のような退魔師が存在していたとしても不思議ではなかった。

「じつは…。数日前から、強い魔の気配を感じるので…」

美咲は、最近の異常について、優子に話し始めた。

魔の高まりに反応して霊が活発化…。それによって、これまでにないような怪奇現象が発生している。優子が溺れかけたのも、そんな異常が深く関係していたのだろう。

「魔の気配…って、魔力のようなものなの？」

優子は、いままでの経験から、魔力についてを考えてみた。

人間族とは、もともと魔族に近い種族である。シヨウや美咲のような精霊力属性は少なく、ほとんどの人間族は魔力属性であった。つまり、辺りに漂う魔力など、人間の感情などによって、多少の増減は考えられるのだ。

「いいえ…。もっと純粋な魔、ではないかと…」

美咲は、優子の考えを否定する。

「そう…、リウムちゃんの力に似ている気がします…」

美咲は、複雑な表情でリウムを見つめた。

リウムの力は、魔力より深い闇…暗黒力である。美咲の感じている魔が暗黒力であれば、その持ち主は鉱物生命体暗黒族でしか有り得なかった。

優子は、金緑石での魔獣化事件を思い出ししていた。魔獣が成長することによって、暗黒族は生まれてくる。リウムも、そうやって誕生していた。

魔獣化事件では、首謀者である魔族ガーティスが、もう一人の暗黒族トルマリンの力を手に入れて優子たちを襲ってきた。

ガーティスは、アウインの勇者として覚醒したリウムに倒される。しかし、実際はそうではなかった。ガーティスは、闇を渡る能力で異次元へと逃れ、成長したトルマリンが復活したことで絶命する。その事実を、優子は知らなかった。

「なんにしても、リウムちゃんが悪じゃないことはわかります…」

美咲は、リウムに近づき、頭を撫でる。

「か…、かわいい…」

小首を傾げるリウムのかわいさに、美咲は思わず抱きしめてしまっていた。

「美咲…」

そのとき、どこからか美咲を呼ぶ声が聞こえてきた。美咲が見回すと、一人の少女が手を振っている。

「あつ、詩織」

美咲は、大きく手を振り返す。

「あれ？　なんで制服…、学校に行くの？」

美咲は、近づいてきた少女に問いかけた。

「うん、これから部活だよ」

美咲の親友である詩織は、明るく答えた。

「それより、美咲はまた除霊のお仕事…」

詩織は、ふと優子に視線を向ける。しばらく動きが止まっていた詩織は、プルプルと震え、優子を指差して大きく叫んだ。

「すすす…、SPINELの優子…！」

真つ赤な顔をした詩織は、かなり興奮気味である。

「え…？ あ…！」

いきなり指を差されてびっくりしたが、優子はその理由を納得した。

「え…つと、美咲ちゃんのお友だち？」

優子は、苦笑しながら問いかける。どうやら、彼女はSPINELとしての優子を知っているようであった。

「ちよつと美咲！ なんてあんたがSPINELの優子と一緒にいるのよ…！」

詩織は、美咲の肩を掴んで前後に揺する。詩織の大声に、周りの人も騒ぎはじめていた。

「ゆ、優子さんは、わたしの家へ、泊りに、来て…うつつ…！」

激しく揺さ振られ、美咲は気分が悪くなってしまふ。優子が慌てて止めに入ると、美咲はやっと解放された。

しばらく再起不能な美咲に代わり、優子が簡単に説明をする。詩織は、驚きの表情で、優子の話に聞き入っていた。

「み、美咲の従姉が…新メンバーの飛鳥！ あの、魔獣化事件で活躍した？」

詩織が言ったのは、金緑石で起こった魔獣化事件のことである。

事件の詳細は、肝心な箇所を除いて、全国に放送されていたのだ。

「魔獣化…事件？」

美咲は、聞きなれない言葉に小首を傾げる。

「あんた…、少しはテレビも見なさいって…！」

詩織は、大きなため息をついて頂垂れた。あれほど騒がれた事件も、美咲はまったく知らないようである。

魔獣化事件とは、魔力を発する石に憑かれることで、人が異形の

姿となる現象のことをいう。魔獣に襲われると、魔石のコピーを憑けられ、その者も魔獣化してしまう…。そんな事件が、夏休みに入る直前、金緑石地区で大量発生していた。

今でこそ治療法が確立されているが、数ヶ月前までは絶対に完治しない奇病であった。

それを聞いた美咲は、リウムにゆつくりと視線を向ける。リウムの額には、血のように赤い石が憑いていた。なにより、昨晚の異形な姿は、話に聞いた魔獣とそっくりである。

美咲が大汗をかいていると、無表情だったリウムが微かに微笑む。その瞬間、周囲の魔力が一気に高まった。

「があっ、がああああっ！」

リウムが叫ぶと、額の石から肉塊が溢れ出す。肉塊は身体を包み込み、みるみるうちに巨大な塊となる。それが、四つ足の獣を形成し、昨晚と同じ狼型魔獣となった。

突然なことに、詩織は尻餅をついてしまう。涙ながらに後退り、震えながら悲鳴を上げた。

「がおお、がおおお~~~~っ」

リウムは、辺り構わず、かわいい声で吠え立てる。金緑石のちびっ子に大人気…。リウムが得意としている怪獣ごっこであった。

もちろん、魔獣化したリウムを見て驚かないはずもない。周囲の人は大慌てで逃げ出し、詩織は恐怖で気を失ってしまった。

「ちよっとリウムちゃん！ なにやってるのよ！」

優子は、リウムの首に手を回し、必死で押さえ込む。それでも、リウムの怪獣ごっこは収まらない。

「あははっ……」

美咲の乾いた笑いが響く。数日前から感じていた魔の気配も、リウムの怪獣ごっこによって、無意味に高まってしまったようだ。

その夜…。ニュース番組で“紅柱石に魔獣出現！”と報道される。しかし、魔獣化したリウムの姿は有名であり、先の全国放送でも正義の味方として紹介されていたため、それほど騒がれることもな

か
っ
た。

第8話 我周塚には何かありそうだけど、現れた女性の方が気になります

紅柱石の郊外に、土を盛って作られた塚があった。

かなり歴史のあるもので、周りに柵が張られた簡単な作りをしている。すぐ近くに県道が通っているのだが、まるで塚を避けるように直前で曲がっていた。おそらく、呪いの樹と同様の理由があるのだろう。塚の詳しい謂れを知る者は少なく、何かの怨念を封じているともいわれている。その塚は、我周塚と呼ばれていた。

リウムのはじめた騒動も収まり、優子たちは我周塚にやってきていた。

「まさか、首塚とかじゃないでしょうね…」

もはや、紅柱石では何が起こっても不思議ではない。優子は、よく聞く怪談話を思い出していた。

獄門された武将の首が白光を放ちながら飛び去り、力尽きて落ちた場所に塚が作られる。そんな伝承の残るものは限られているが、首塚自体はそれほど珍しいものではなかった。

「塚とはお墓の意味合いが強いですから、完全に否定はできません…」

美咲は、震える優子に苦笑する。そして、塚をジッと見ている葵に気づいた。

『我周…、我周塚…』

葵は、何度も塚の名前を呟く。

「葵さん。何か思い出したんですか！」

その様子に気づいた優子は、大きな声で叫ぶ。葵は、驚いたように優子を見つめた。

『いえ…。おかしな名前だな…』と思ひまして…』

葵は、苦笑気味に頭をかく…。期待していた優子は、落胆して頂垂れてしまった。

「我周塚というぐらいですから、我周さんという人に関係してるん

でしょう」

そう言つと、美咲は柵を乗り越えて、我周塚の中へと入った。

「ちよっ…、美咲ちゃん！」

優子が慌てて呼び止める。もし祟られたりでもしたら、いったいどうする気なのだろうか。だが美咲は、平然と優子を手招きした。

「この塚も、呪いの力は感じられませんが、入っても大丈夫です…」

美咲の言葉に、優子も恐る恐る足を踏み入れた。

我周塚に入ると、明らかに空気が一変した。外界から遮断されたような錯覚に陥ってしまうのだ。

呪いはないにしても、なにか特別な力場であることは間違いないだろう。

「やはり…。この塚には、浮遊霊がいないみたいですね」

美咲は、辺りを見回して呟いた。

霊とは、通常の人に見えないだけで、無数に漂っているものである。もちろん、念の強い霊ではなく、ほとんど低級霊であるのだが…。つまり、霊が全く存在しないことは、まず有り得なかった。

樹神社のように結界が張られているわけでもなく、このような状態を説明することは美咲にもできない。

「なんだか、落ち着かない場所…」

優子は、そんな居心地の悪さを感じていた。まるで、四方から目に見えない重圧が押し寄せてくるようである。

「この場所では、過去に強力な除霊が行われたのだと思います」

美咲は、気持ち悪そうにしている葵を見て呟いた。いまだ、退魔の力が残っており、それが葵を苦しめているのだろう。

「昔は、ここにも小さな社があつて、本当に怨念を鎮めていたのよ」

突然、背後から声が聞こえてきて、優子たちは驚愕する。振り返ると、柵の向こう側で優子たちを見つめている一人の女性がいた。

「やつほ」

女性は、にっこりと微笑みながら手を振った。

「がるるう……」

その姿を見た瞬間、リウムが唸り声を上げる。優子の背後にまわり、身体にしがみ付いて震えだした。

「え〜と……。我周塚のことに、お詳しいんですか？」

優子は、しがみ付くリウムに苦笑しながら問いかける。

（どこかで会った気がするんだけど……）

女性を見て、優子はそう感じた。もちろん、リウムがこれほど脅えているのだから、普通でないことは確かであった。

（物の怪！ いや……、幽霊？）

美咲の驚きは、さらに凄まじい。女性からは、気配が全く感じられないのだ。

気配を消すことは、美咲にもできる。意識を集中させて息を潜めれば、それほど難しいことではない。しかし、女性の気配は完全に無で、目の前に立っているにもかかわらず存在自体があやふやであった。

おそらく、近くを通り過ぎただけなら、記憶にすら残らないであろう。

「はいはい、そんなに構えなくても大丈夫」

女性は、柵を乗り越えて、優子たちに近づく。それでも、女性の気配は変化しない。

「ふふ〜ん」

脅えるリウムを見て、女性はにっこり微笑んだ。

「この我周塚は、ある退魔師の怨霊を封じるためのもの……」

女性は、我周塚の由来を説明し始めた。

千年以上も昔……、この地には人間神が実在していた。

そんな時代、一人の退魔師が人間神の御力を我が物にしようと、ある計画を企てる。退魔師は、人間神の御力を弱め、殺害しようと

したのだ。

計画は、他の退魔師によって阻止される。退魔師は、罪人として捕らえられ処刑された。

その後、退魔師は怨霊として復活し、紅柱石に災いをもたらす。怨霊を封じ怨念を鎮めるために、我周塚が建てられたという。

二十年ほど前までは小さな社もあったそうだが、今では塚だけが残されているだけであった。

「人間神なんて信じられないかもしれないけど…、我周塚が作られたのはそうだったわけなの」

女性は、過去の出来事を、自分の目で見てきたように話した。

「信じられないものにも…」

優子は、親友の飛鳥を思い出す。飛鳥は、人間神の生まれ変わりと勘違いされ、魔族ガーティスに命を狙われていた。それを阻止しようと、優子もガーティスと戦ったことがあった。

美咲も、樹神として人間神を祀っている立場にある。そのため、女性の話は素直に信じることができた。

「この塚は、あなたたちにも大きく関係しているの…」

女性は、優子と美咲に視線を向ける。

「優子さん、美咲さん…」

優子たちは、自分の名前が知られていることに驚く。

「そして…、幽霊の彼女にも…」

女性は、優子の背後に立つ葵を指差した。

「えっ！」

優子が振り返って葵を見る。葵も、驚いたように目を見開いた。

「葵さんのことが見えるんですか！」

優子は、女性に問いかける。しかし、女性の姿は、忽然と消えていた。

「うそ…でしょ…」

美咲も愕然とする。ほんの二、三秒ほど視線を逸らしただけで、女性の姿が跡形もなく消えてしまったのだ。

優子たちは辺りを見回した。我周塚は県道に隣接して見晴らしもよく、近くに姿を隠す場所もない。まさに、狐につままれたような気分であった。

「葵さん…。さっきの人って、お知り合い…ですか？」

優子が問いかけると、葵は首を横に振って否定する。記憶を失っているため忘れていただけかもしれないが、あのような女性は葵にも覚えがなかった。

「あの女性…。葵さんについて、何か知っているのかもしれませんが…。」

美咲は、女性の言葉を思い出す。我周塚が美咲たち三人に関係しているとは、いったいどういう意味なのだろう…。

(それに、気配が感じられなかった…)

女性は、物の怪でも幽霊でもない。ただ、シヨウたちと同じように、常識を逸脱した存在であることには間違いなかった。

すると、優子にしがみ付いて震えていたリウムが呟く。

「リ、リアン…。」

リウムは、彼女の正体をそう感じていた。

「そんなバカな。」

優子は、その考えに笑い出す。

リアンとは、シヨウとアリスが過去に行っているときにやって来た、三歳ぐらいの女の子である。シヨウとセリアの娘を名乗り、未来の姿と思われる二人の写真を持っていた。

そのリアンも、今は綾菜が面倒を見てくれるはずである。

さきほどの女性はどう見ても成人…。いくらなんでも、こんな短期間に成長することはあり得ないのだ。

第9話 洞窟の奥に建つ石碑、じつは怨霊なんかを封じています

その後、優子たちは、いくつもの史跡を巡った。

謎の女性も気になっていたが、まずは葵の記憶探しが優先である。日が沈みしばらくしたころ、優子たちは海水浴場に到着していた。

「できれば、ここには来たくなかったんだけど…」

優子は、昨日の出来事を思い出し、身震いをする。実体化した霊に足を掴まれ、溺れそうになったからだ。

「うっ…」

堤防から砂浜に下りると、やはり誰かに見られているような気配を感じた。辺りは暗闇に支配され、波間との境目すらわからない。

静かな波の音が聞こえてくるだけで、優子たち以外の姿は見られなかった。

「優子さんは、霊に好かれる体質のようですから」

美咲は、何気に恐ろしいことを呟く。美咲によると、たくさんの霊が優子を注目しているそうだ。

「霊とは、水場や陰気な所に集まる人が多いんです」

そう言って、ふと葵に視線を向ける。

「そういえば…、葵さんは水に関係した場所で命を落としたのかもしれませんね」

最初見たときの葵が濡れていたことを考えると、直接の死因でないにしても、水に関係した場所で死んだ可能性は高い。

そのとき、美咲たち以外の足音が聞こえてきた。足音は、ゆっくりと確実に近づいてくる。

「な、なに？」

優子は、繋いでいるリウムの手を握り締めた。目を凝らしてみるのが、姿らしきものは見えない。ただ、何かの気配は、間違いなく感じられた。

「み、美咲…ちゃん」

視線を向けられた美咲は、優子の考えを肯定するように頷く。

「怪談話しは、霊を呼び寄せる一番簡単な方法…。どうやら、浮遊霊が集まってきちゃったみたいですよ」

美咲は、苦笑しながら宙で印を結ぶ。その瞬間、美咲たちの周りに、簡易な結界が張られるのだった。

美咲が説明している間も、足音はどんどん増えていた。優子たちの周りを囲むように歩きまわり、耳障りな足踏みの音は、さらに大きくなった。

「や、やだ…」

優子は、恐怖で身体が震え、美咲にしがみ付いた。

「な、なんか…、霊の皆さん怒ってない？」

優子が涙目で呟く。気の所為かもしれないが、敵意のようなものを感じるのだ。

「興味本意で心靈現象の起こる場所に出向くと、地縛霊の怒りをかうこともあって…」

美咲の説明は、大きなラップ音で中断した。優子は、頭を抱えてしゃがみ込む。

「あ…」

すると、美咲は何かを思い出したのか、奇妙な声を上げた。

「わたし、この場所で何度も除霊をしますから、もしかして怨まれているのかもしれないですね」

美咲は、笑いながらとんでもないことを口にした。

「つて、冗談じゃないわよー！ー！」

逃げ出そうとした優子だったが、美咲に襟を掴まれる。考えてみれば、美咲の張った結界の中が一番安全であった。

「気持ちを強く持つてください…」

美咲は、諭すように呟く。

「大丈夫です…。集まっているのは低級霊で、それほど力はありません…」

霊は、心の弱さや恐怖心に付入って憑くことが多い。強い意志を

持つことで、憑かれることを防ぐことができるのだ。しかし、美咲たちを取り囲むざわめきは、大きくなる一方である。

「いい加減にしないと、強制除霊を行います！」

美咲が印を結び大きく叫ぶと、霊のざわめきは嘘のように収まった。

につこりと微笑む美咲…。優子は、気持ちを強く持つという言葉の意味が、なんとなく理解できた。

海水浴場を奥へと進み、海岸沿いを回り込むと、切り立った崖が現れる。さらに進むと、大きな穴が開いている場所に出た。

「…洞窟？」

優子は、小首を傾げて中を覗き込む。洞窟内は、まさに暗闇であった。優子が身震いしていると、後方から暖かな光が照らされる。振り返ってみると、入口付近に置かれていた松明に、明りが点されていた。

松明を手に持った美咲は、ゆっくりと優子に近づく。

「え〜っと…。ここには、紅柱石に集まる悪霊や怨霊を鎮めるための封印があります」

美咲が洞窟内を照らすと、奥の方に石碑のようなものが見えた。

紅柱石には、街を取り囲むように五つの封印がある。退魔の力を宿す石碑で、紅柱石に集まる邪霊を封じているといわれていた。

「我周塚もそうだけど、紅柱石には不思議な場所が普通にあるんだね…」

優子は、呆れ口調で呟く。優子の住んでいる光風町には精霊界へと繋がるゲート“こだまの樹”というのもあったが、それは考えないことにした。

「そうですね…」

美咲は、苦笑しながら答える。

「この紅柱石には霊界への通り道があって、自然と死霊なんかが集まってくるんですよ」

それを聞いた優子の顔色は、一瞬で真っ青となった。封印の石碑があつたり美咲のような退魔師がいるのも、そうだった理由からである。

「は、早く帰りましょ！」

急に恐くなったのか、優子が美咲の手を引っ張る。だが、美咲はまったく動こうとしない。

「み、美咲ちゃん…？」

優子が窺うと、美咲は厳しい表情で洞窟の奥を睨んでいた。その様子に、優子は嫌な予感を覚えるのだった。

洞窟には、これまでに感じたことのないほど強力な魔が漂っていた。美咲が意識を集中すると、洞窟内に黒い霧が立ち込める。

「怨霊！」

美咲が叫んだ瞬間、霧状の怨霊が飛び出してきた。怨霊は、美咲の肩を掠めて岩場に降り立つ。

「うっ！」

痛みを感じて片膝をつく美咲…。外傷はないが、怨霊に触れられた周辺に激痛が走っていた。

「美咲ちゃん！」

よろけた美咲を、優子が受け止める。美咲の身体は、かなりの熱を持っていた。

「ちよつと…、なにあれ！」

優子は、美咲の見る方角を確認する。そこには、優子にもわかるほど実体化した黒いゲル状の塊が蠢いていた。

美咲が纏う退魔の力を破って干渉してくるなど、かなり強力な怨霊であることは間違いない。美咲は、自分の手には負えないことを悟った。

「優子…さん、急いで…逃げましょ…」

美咲は、激痛に耐えて立ち上がる。だが、怨霊に蝕まれた身体は、思うように動かない。美咲は、優子だけでも逃がそうと考えた。そ

の途端、美咲は優子に抱き上げられる。

「さあ〜て」

優子は、きよんとしている美咲に微笑みかけた。

「リウムちゃん、行きましょっ！」

そう言って、優子は海水浴場目指して走り出した。

足場の悪い岩場を走る優子とリウム…。怨霊の魔が全身に広がった美咲は、もはや自分で動くことはできないほど衰弱していた。

「ううっ…、わがぁあー！ー！」

美咲は、大きな悲鳴を上げる。このままでは、美咲の命に関わってしまう。優子は、立ち止まって美咲を砂浜に寝かせた。

「美咲ちゃん…、ちよつと我慢してね…」

優子は、美咲の胸に手を当てる。そして、美咲の苦痛が無くなるように強く念じた。すると、優子の手が淡く光りはじめ、美咲の表情が和らいだ。

優子には、昔から不思議な能力があった。手をかざして念じることで、不調を訴える人の痛みや苦しみを和らげることができたのだ。優子本人は気功の力と思っていたが、アリスによると回復術の一種らしい。怨霊に憑かれた美咲にどれほどの効果があるのかわからないが、優子は一心不乱に念じた。

その間も、怨霊は周囲の浮遊霊を取り込み、邪悪性を高めて優子たちに近づいてくる。そんな怨霊を、リウムはジッと睨みつけていた。

「ゆっ…お姉ちゃんの…じゃま…させない！」

リウムは、大きな叫び声を上げ、戦闘形態である狼型の魔獣となった。

「がぁあぁあつ！」

怨霊をめがけて、リウムが走り出す。大きく飛び上がり、鋭い爪を怨霊に振り下ろした。

「なっ！」

リウムの攻撃は、当るところか怨霊の身体をすり抜ける。

リウムは、怨霊との距離を取り、唸りながら警戒する。攻撃した右前足は、怨霊の魔にあてられて、徐々に痺れ始めていた。リウムは、真つ赤な瞳で怨霊を睨み付ける。ここでなんとかしなければ優子たちに危険が及んでしまうことを、リウムは本能的に理解していた。

第10話 知らないところで、怪しい計画が進められているようです

「ゆ、優子さん！」

意識を取り戻した美咲は、その事実には驚く。優子が高めている力は、まぎれもなく退魔の力であった。おかげで、怨霊の邪気は抜われ、身体を動かせるほど回復していた。

「ふう〜〜」

優子は、ホッと額の汗を拭う。

「優子さん…、その力は…」

美咲が問いかけると、優子は苦笑しながら視線を泳がせた。

美咲は、退魔の力を使うために、幼いころからの修業を欠かしたことがない。退魔師としての修業をしていない優子が平然と退魔の力を高めていることは、まさに信じられないことであった。

だが優子は、惚けるだけで何も語るうとはしない。どうやら、あまり知られたくない能力のようである。そんな問答も、リウムの苦しげな声で中断された。

怨霊から伸びた触手がリウムの身体に巻きつく。首を締め上げられ、リウムは苦しさ手足をばたつかせた。反撃しようにも、リウムの攻撃は怨霊を透り抜け、宙を斬るだけである。

「いけない！」

美咲は飛び起き、退魔の力を高める。指刀を振ると、リウムを捕らえていた触手が見事に断ち斬られた。

自由になったリウムは、触手を振り解いて、怨霊から距離を取る。

「死…ね…」

口を大きく開き、怨霊に向けて大質量のレーザーを発した。

激しい閃光が起こり、爆音が鳴り響く。砂浜の一部が消し飛び、そこに海水が流れ込む。いとも簡単に、砂浜の地形が変わってしまった。

リウムの力を目の当たりにして、美咲は啞然とする。攻撃力だけ

を見て、美咲が契約している龍の比ではない。もちろん、リウムの実力は、この程度ではなかった。本気を出せば、数分で紅柱石を壊滅することもできるだろう。

「がるるう……」

リウムは、唸りながら暗闇を睨み付ける。まだ、戦いは終わったわけではない。

四散したゲル状の怨霊は、各々が意思のあるように集まり、再度大きな塊となった。怨霊に対して、通常攻撃は効果がないようである。すると、突然リウムが少女の姿へと戻ってしまった。

「リウムちゃん……。いつたい、どうしたのかなあ〜？」

優子は、答えがわかっていたのに、聞かすにはいられなかった。

「……。帰る……」

リウムお決まりのセリフなのだが、はじめて聞いた美咲はずっこけてしまう。つまり、リウムは戦いに飽きてしまったのだ。

呆れて苦笑する美咲……。一瞬の隙をつかれ、怨霊が優子に飛びかかった。

「きゃああーっ！」

怨霊に纏わり憑かれた優子は、恐怖で悲鳴を上げてしまう。優子の身体は、完全に怨霊の中へと埋まってしまった。

再び魔獣化したリウムだったが、どうすることもできずにオロオロする。このまま攻撃をすれば、取り込まれた優子が傷ついてしまいかもしれない。

「しまった！」

慌てた美咲は、迫る触手を交わしながら退魔の力で怨霊を引き裂く。しかし、強力な怨霊であるため、美咲にはどうすることもできなかった。

「優子さん！」

美咲は、戦いの最中に気を抜いてしまったことを後悔する。そして、自分が憑かれるのも構わず、怨霊の中に手を突っ込んだ。

美咲の両腕に、さきほどまでとは比べ物にならないほどの激痛が走る。だが、早く引きずり出さなければ、優子は完全に取り殺されてしまう…。美咲は、優子の危機を前に、冷静な判断ができなくなっていた。

異変は、その瞬間に起こった。怨霊が大きく膨れあがったかと思うと、内側から光が溢れ出す。

「なっ！」

美咲は、おもわず驚愕の声を上げる。それは、これまで感じたことのないような、強力な退魔の力であった。

退魔の光が怨霊を浄化する。美咲に憑いた邪気も、瞬時に祓われた。

闇が弾け飛び、淡い光に包まれた優子が現れる。その姿を見た美咲は、さらに驚いてしまった。

優子の髪は金色に輝き、背中から純白の翼が生えている。神々しいまでに輝くその姿は、まさに天使のようであった。

「よっと」

天使となった優子は、軽やかに着地する。怨霊は、優子の力で完全に消滅したようだ。

「え〜っと…」

優子は、美咲の視線に苦笑する。

「優子…さん…」

美咲は、驚きの表情で優子を見つめた。

「お願いっ！ お兄ちゃんたちには黙っていて！」

とても誤魔化しきれないと判断したのか、優子は手を合わせて美咲に頼み込む。すると、美咲がとんでもないことを呟いた。

「これが噂に聞く“こすぶれ”ってやつですか…？」

真顔で問いかける美咲に、優子はずっとこけてしまう。その瞬間、優子は元の姿へと戻ってしまった。

「あははっ…」

勘違いしてくれたら、それに越したことはない。優子は、このま

ま惚けることにした。自分があのような姿になることは、他の誰にも…特にシヨウには知られたくなかったのだ。

そこに、戦いの最中、姿を消していた葵が現れる。

『優子さんって…、物の怪だったんですね。』

葵のずばりなセリフに、優子は頂垂れてしまった。

「も、もののけって…」

優子にも、自分が何者であるかわからない。ただ、自分が人間族でないこと…、シヨウとは本当の兄妹でないことを、なんとなくではあるが理解していた。

「へえ〜。あのお姉ちゃん、天空族だったのか…」

崖の上に広がる森の中、ひととき大きな樹の上に一人の少年が座っている。五歳ほどの少年で、完全に気配を断ち、戦いの一部始終を見ていた。

「あのお姉ちゃん存在は、予定外だったな〜」

少年は、興味深そうに優子を眺める。その瞳には、妖しい光が宿っていた。

全種族最強とされる天空族は、背中から翼が生えている。人間族が見れば、間違いなく天使を連想するだろう。だが、その姿とは裏腹に、気性が激しく、戦闘能力も高かった。

天空族は、魔族や暗黒族と敵対しており、人間界で目撃された戦いが天使対悪魔のように思われたとしても不思議ではない。

優子は、何らかの理由で人間界にやってきて、人間として育てられた天空族である。人間として過ごした期間が長いため、ちゃんとした肉体を持っており、普段は翼も消えていた。優子が自分に翼があると知ったのは、つい最近になってからのことである。それは、天空族の少女、ルウーに出会ったことがきっかけであった。

ルウーは、人間候補と間違えられている飛鳥を護衛するため、精霊神ファリスの命令で人間界にやってきた。シヨウやアリスと同じ精霊神ファリスの五精霊の一人で、驚いたことに優子と瓜二つな

顔をしていた。出会った瞬間、優子はルウーと血の繋がりのようなものを感じていた。

そして、天空族が操る力を天空力という。天空力は破邪の力とも呼ばれており、美咲たち退魔師は、祈りや儀式によって天空力に近い退魔の力を練り上げていたのだ。

本来、基本属性以外の力を操ることはできない。完全ではないといえ精霊力属性の美咲が天空力を操ることは、信じられないことであつた。

「せっかく、封じられていた怨霊を活性化したのにな〜」

少年が掌を上になると、小さな黒い粒子が集まって一つの塊となる。優子によつて扱われた怨霊の一部であつた。

怨霊は、触手を伸ばして、少年の身体に取り憑こうとする。少年が掌を閉じると、怨霊は霧状となって消滅した。

少年は、再び優子たちに視線を向ける。その先には、少女の姿に戻つたリウムがいた。

リウムを見つめる少年の表情は、どこか硬いものがあつた。何かを考え悩んでいるのか、頻りに唸り声を上げている。しかし、それも数秒のことで、少年の顔には嫌らしい笑みが戻つた。

「ふふっ…。リアンさんに頼まれて始めたことだっただけ、かなり面白くなつてきたかな〜」

少年がにやりと微笑む。

「リアンさんが何を考えて退魔師のお姉ちゃんにちよっかい出しているのか知らないけど…。これまで以上にがんばらないと本当に死んじゃうかもね〜」

突然、少年が後方に身を投げ出す。少年の身体は、発生した闇の霧に吸い込まれ、最初から無かつたように掻き消えてしまった。途端に、街全体が陰気な気配に包まれる。

だが、その変化は僅かであり、数日前から魔の気配が高まつていくこともあつて、美咲たちがその異変に気づくことはなかつた。

第11話 黒幕はリアン？ タダで済むとは思えません

海水浴場で怨霊を祓った美咲たちは、重苦しい雰囲気のまま樹神神社に向かっていた。

（まずったな…）

優子は、美咲の視線を感じて大汗をかく。怨霊に取り込まれ、無意識のうちに天空族に変化してしまったからだ。

（さて…、どうやって誤魔化そう…）

優子は、そんなことを考えていた。

一方の美咲は、怨霊との戦いで、なんの役にも立てなかったことを落胆する。

（悔しい…）

美咲は、優子を見つめながら、こぶしをギュツと握り締めた。

半人前とはいえ、美咲は樹神の退魔師である。怨霊を祓い優子たちを護るのは、美咲の役目であった。それなのに、怨霊の邪気を浴びせられ、死にそうなところを優子に助けられる。さらに優子は、美咲の手に負えない怨霊を一瞬で祓ってしまう。退魔の力も、美咲とは比べものにならないほど強力であった。

自惚れというわけではないが、美咲は退魔師として自信を持っていた。日々の修行も欠かしたことはない。美咲は、学校以外の生活を、巫女としての修行にあてていた。

一切の娯楽を断ち、巫力や退魔の力を高めることだけに集中する…。しかし、優子の力は、美咲を軽く凌駕していた。

ただ、優子にしてみれば、天空力とは生まれ付いての能力である。もちろん、それが美咲を納得させる理由にはならなかった。

気まずい空気が流れる中…、耐え切れなくなった葵は苦笑しながら話を切り出した。

『この街には、あんなにも強力な怨霊がいたんですね…』

葵は、怨霊の力を思い出し、恐怖で身を震わせた。霊の世界では、

力の強さがそのまま支配力となる。もし葵が近づいていたら、確実に取り込まれていたことだろう。

「いいえ…。あのような怨霊は、これまで現れたことがありません…。」

美咲は、葵の言葉を否定する。完全に実体化した怨霊が存在するなど、これまで聞いたこともなかった。

「あれほどの怨霊になると、わたしでは手に負えません。もしかすると、お父さんたちだって勝てないかも…。」

美咲は、あらためて優子の力にため息をついた。

「あははっ…。」

優子は、見つめられて苦笑する。退魔の力が強いといっても、優子にはどうすることもできない。

「美咲ちゃん…。くだいようだけど、みんなに…お兄ちゃんには絶対に黙っていてね。」

優子は、自分の正体がシヨウに知られることを恐れていた。ずっと双子の兄妹として育ってきたのに、その関係が崩壊してしまうことになるからだ。

「わかつています…。」

項垂れながら返事をする美咲…。

「世の中には、いろんな趣味の人がいますから…。」

美咲は、いまだ勘違いしていた。

優子は、種族の違いを説明しようとして思い止まった。シヨウに知られる危険性を考えれば、涙を吞んでコスプレ娘の肩書きを受け入れようと…。

ちなみに、シヨウは優子が天空族であることを知っている。五千年前の天空界で、シヨウとアリスの過去、優子とルウの関係について聞かされていたからだ。つまり、優子が正体を隠そうと努力していることは、まったくの“無駄”であった。

『でも…、これで一安心ですね。怨霊は被われましたから』

葵は、にっこりと微笑んだ。

美咲は、葵の言葉に頷く。確かに、ここ数日間感じていた魔の気配は、薄まったようだ。

しかし、あのような怨霊が、自然に発生するとは考え難い。何かの力が働き、封じられた魔が開放された可能性もある。そうなること、終わりではなく、これが始まりなのかもしれない。

神社に着くと、シヨウが境内で佇んでいた。おそらく、美咲たちの帰りを待っていたのだろう。

「なにかあったようだな…」

シヨウは、美咲たちに近づいて、そつと呟く。そんな問いかけに、優子は大汗をかいた。話したくない内容をずばり聞かれ、かなり焦っているようだ。

だが、シヨウほどのレベルになると、遠くからでも相手の生体波動を感じ取り、起こった出来事を予想することができる。怨霊との戦いや優子が天空族に変化したことも、すべて承知のうえでの質問だった。

優子の反応にシヨウが苦笑いしていると、とことこ駆け寄ってきたリウムが身体に抱きついてくる。

「ますた〜」

シヨウに頭を撫でてもらうと、リウムは嬉しそうに微笑んだ。

「お兄ちゃん…、あのね…」

覚悟を決めた優子が顔を上げると、シヨウは街の方角に視線を向けていた。

「お兄ちゃん？」

その眼差しは真剣で、優子もあまり見ない表情をしていた。

「ちよつと出かけてくる…」

突然、シヨウが大きくジャンプする。

「えっ？」

驚いた優子が見上げると、シヨウは遙か上空で浮遊していた。

すると、リウムが狼型魔獣となり、シヨウの後を追って上空へ駆

け昇る。優子たちは、シヨウたちが黒い点になったのを、ただ見上げるしかなかった。

「二人とも…、飛べるんですね…」

美咲は、それほど驚いた様子もなく、感想を呟いた。美咲が契約している仲間でも、空を飛ぶことのできる天狗がいるからだ。

天狗といつても人間族で、近所に住んでいる小学四年生の少年である。どうやら、幼いころ神隠しに遭い、そのとき神通力に目覚めてしまったらしい。

仲間として契約するまでは、事あるごとに美咲に戦いを挑んでくる困り者でもあった。少年は、風の力を纏い、自由に飛ぶことができたのだ。

『シヨウさんって、本当に人間なんですか？』

葵の問いかけに、優子は苦笑するしかなかった。

シヨウは、間違いなく人間族のだが、その非常識な強さは明らかに人間を逸脱している。優子も最近になって知ったのだが、シヨウは五歳のころから人間界と精霊界を行き来して、魔物や魔族と戦っている勇者だそうだ。

「いちおう…、人間だと…思う…」

優子が自信なさそうに呟くと、シヨウたちは街を目指して移動を始めた。

「さて…、お腹も減ったし、家に入りましょうか…」

このままシヨウの帰りを待っているわけにもいかず、優子はそう提案する。

「ああーっ、お夕飯の準備しなくっちゃ！」

美咲は、慌てて家に駆け込んだ。お客様であるアリスたちをこれ以上ほったらかしにしておくのも、さすがにまずいだろう。葵の記憶探しは明日にして、美咲は持て成しの準備に入るのだった。

紅柱石の郊外…。夜空に浮んだシヨウは、ある方向に意識を集中していた。

「リアンさん、いつまで隠れているつもりですか…」

シヨウが問いかけると、目の前に一つの影が浮かび上がる。闇に紛れるように姿を隠していたのは、我周塚で優子たちの前に現われたあの女性だった。

「お久しぶりね…、シヨウくん…」

リアンは、強風に靡く髪を押さえながら、につこりと微笑んだ。

「そうですね…。リアンさんにとっては、五千年ぶりですから…」

シヨウは、数週間前の出来事を思い出していた。

夏休みが始まったころ、シヨウとアリスは、ラルドの力によって五千年前の過去へと飛ばされた。そのときに出会ったのが、時空神ダイヤモンドことリアンであった。シヨウは、現代へと戻るため、リアンに時空力の修行を受けていたのだ。

現代に戻ると、家には同じ名前の女の子がいた。シヨウとセリアの娘を名乗っているが、おそらくリアンが三歳児に変化した姿なのだろう。

「いったい、なにを企んでいるのですか？」

シヨウは、子供の姿で家に潜り込んだことも含めて、そう問いかけた。だが、リアンは何も答えようとはしない。

「この街で起こっている心霊現象は…、あなたが原因なんですか！」

シヨウが大きく叫ぶ。シヨウの後ろでは、隠れるようにリウムが唸り声を上げていた。

そんなシヨウたちを見て、リアンはクスツと微笑んだ。

「そうね…。だとしたら、どうするつもり？」

相手をからかうように、リアンは嫌味ったらしく呟いた。

シヨウは、右手だけにしている手袋を外し、甲を胸の位置に構える。アウインの紋章が輝き、シヨウの全身から強大な精霊力が溢れだした。

「へえ…。わたしと、殺り合おうっていうの？」

リアンから笑みが消える。

いまの世界を創造した、十四人のジュエルナイツ。その頂点に君

臨する、偶数月四月の騎士ダイヤモンド……。シヨウは、まさしく史上最強の相手を、敵にしよつとしているのだ。

第12話 時空間旅行へ旅立つ二人？ いいえ三人です

異様な気配に、リウムが脅えだす。リウムがこれほど脅えるのは、トルマリンの力を手に入れたガーティスと対峙したとき以来であった。

「リウム…、お前は戻れ」

シヨウは、庇うようにリウムの前に立ち塞がる。リアンを相手に、リウムでは役不足なのだ。

しかし、シヨウの妨げになったと感じたリウムは、ある行動に出る。闇の霧を発生させ、異空間を渡って、リアンの背後から襲いかかるうとした。

「死…ね！」

リウムの牙がリアンの首筋に迫る。止めようとしたシヨウだったが、すでに遅すぎた。

「がはっ！」

リウムは、大量の血液を吐きだす。リウムの胸には、リアンの手刀が突き刺さっていた。

「おいたはいけませんね〜」

リアンは、にっこりと微笑みながら、手刀を引き抜く。その勢いに任せて、リウムの顎を蹴り上げた。そして、仰け反るリウムの前足にしがみ付き、力任せに打ん投げる。

「リウム！」

シヨウは、リアンの容赦無い攻撃に愕然とした。

辛うじて意識のあったリウムは、身体を反転させてリアンを睨み付ける。だが、耳を伏せて尻尾を股下に隠しているところを見ると、リアンに対する脅えはさらに増大したようだ。

リアンは、手についた血を振り払う。にやりと笑みを浮かべ、リウムに視線を向けた。

「リウムちゃん…。これ以上邪魔するならば、殺します」

突如、リアンから殺気が放たれる。常に気配を感じさせないリアンだったからこそ、その殺気は強烈であった。

まさに、蛇に睨まれた蛙…。リウムはガタガタと震え、動かない身体で必死に逃げようとした。

ぶうん！

聖剣クリソベリルが二人の間に振り下ろされる。その瞬間、金縛りが解けたように、リウムはリアンから距離を取った。

シヨウは、無言でリアンを睨み付ける。そんな態度に、リアンはずかしく嬉しそうな表情をした。

「あらあら…。シヨウくんにも困ったものね…。」

リアンは、シヨウと向かい合う。手を突き出し、時空術を発動させた。すると、凍りついたかのように、全ての動きが固まる。

「ちっ、時を止めたか！」

シヨウは、時の流れに逆らって周囲を確認する。時空力を持たないリウムなど、まるで彫刻のように固まっていた。

「リアンさんは！」

大気すら止まっている中を動くのは、至難の業である。シヨウの動きは、常人レベルまで落ちていた。

「遅いつ！」

リアンが素早くシヨウの背後に回り込む。シヨウを羽交い締めにして、にっこりと微笑んだ。

「さしてシヨウくん…。かわいくなりましようね…。」

リアンは、シヨウの左手を取り、中指にはめている指輪めがけて強力な時空力を照射した。

「なっ！」

シヨウの顔から血の気が引く。過去から戻るとき、リアンから渡された“時の指輪”…。それには、恐ろしい呪いがかけられていたのだ。

「うわあぁー！ー！ー！」

シヨウは、全身に焼けるような痛みを感じる。気を緩めれば、すぐにでも意識を失いそうであった。

「うふふっ」

リアンは、シヨウを解放して、時の流れを動かす。

「ますたー！」

状況が把握できていないリウムは、その光景に驚くしかなかった。一瞬にしてリアンが移動しており、その近くではシヨウが苦しんでいた。時が止まった空間でリアンの攻撃があつたなど、リウムには想像もつかなかった。

次の瞬間、信じられないことが起こる。かわいい擬音が聞こえたかと思うと、シヨウの身体から煙が噴き出した。

煙はすぐに風で流されるが、なかなかシヨウの姿は現われない。

リウムの頭にハテナマークがいくつも浮んでいると、煙の下方から一つの塊が現われた。

「うが……」

大口を開けたリウムが、奇妙な声を漏らす。生体波長は間違いなくシヨウであるのだが、そこにいたのは三歳ほどの子供であった。

「……って、またかよー！」

だばだばな服を着たちびっ子が、頭を抱えて泣き叫ぶ。それは、時の指輪によつて幼児化したシヨウの姿であった。

「あはははっ。シヨウくん、かわいすぎ〜」

リアンが爆笑する。五千年前の過去に引き続き、ちびっ子シヨウが誕生した。

時の指輪には、装着した者の時を逆行させる時空力が備わっている。シヨウは、いままで指輪に己の時空力を上乘せして、能力を無効化していた。しかし、それには常に指輪を超える時空力を発生させておかなくてはならない。呪いのため指輪を外すこともできず、少しでも時空力の発生を怠れば、シヨウはちびっ子に逆戻りする可能性があるのだ。

どうやら、リアンが指輪の時空力を高めたことにより、そのバラ

ンスが崩れてしまったようだ。シヨウの時空力では指輪の能力を無効化できず、情けないちびっ子姿となってしまったわけだ。

「さてと…。遊んでないで、そろそろ仕上げにかかるうかしら…」
笑うことに満足したのか、リアンはシヨウから視線を逸らす。右手を突き出し、信じられないほど強大な時空力を練り上げた。

「まさかっ!」

シヨウは、その方向を確認した。視線の先…、そこには樹神社があった。

「り、りあんさん、なにを!」

シヨウが叫ぶと、リアンにはやりと微笑む。

「ふふっ…。彼女たちには、時空間旅行をしてもらうことになるわね」

リアンが呟くと、樹神社は淡い光に包まれるのだった。

住居の台所では、美咲と優子が忙しく動いていた。いや…、中心となって料理しているのは優子である。美咲は、そのプロ級の腕前に、ただ感心しているだけであった。

「うわあ〜…。優子さんって、料理お上手なんですわ〜」

美咲は、みるみるうちに完成する料理に感動していた。同じ材料を使ったとしても、これほど見事な料理は作れないだろう。美咲は、昨晚に出した自分の料理を思いだし、恥ずかしくなってしまった。

「料理なんて、慣れの問題よ」

優子は、微笑みながら盛り付けをする。母親が仕事の都合で家を空けることが多く、家事全般は幼いころから優子の仕事だったのだ。
「よしっ。下拵えはおしまいと」

優子は、手を拭きながら時間を確認する。御飯が炊き上がるまで、もうしばらくかかるだろう。

「それじゃあ、わたしはお茶碗とか持っていけますね」

美咲は、食器棚から人数分の茶碗を取り出す。箸などと一緒にお盆に乗せ、アリスたちのいる大部屋に向かおうとした。

その瞬間、大きな振動が住居を揺らす。美咲はバランスを崩し、床に倒れてしまった。茶碗が割れ、箸が散らばる。揺れは、治まるどころか、ますます激しくなっていた。

「じ、地震？」

優子は、柱にもたれかかって周囲を確認する。すると、信じられない光景が目の前で展開された。

「美咲ちゃん！」

美咲が淡い光に包まれ、その身体は徐々に透明になってしまう。

「い、いやっ！」

なにが起こっているのか理解できない美咲は、震えながら優子に手を伸ばす。しかし、手は優子に届くことはなく、美咲の姿は忽然と消えてしまった。

愕然とする優子は、自らの身体も同じような光に包まれていることに気づいた。

そこで優子の意識は途切れてしまう。このとき、優子たちはリアンの時空力により、時空間を飛び超えるのだった。

ひと仕事を終えたリアンは、ホツと息をつく。そして、攻撃態勢に入っているシヨウを見て苦笑した。

「はいはい。こうなってしまったからには、わたしにケン力を売っても無駄よ。」

リアンが微笑むと、シヨウは素直に剣を納めた。

「いい子ですね。」

リアンは、呆れ顔のシヨウを抱き上げ、頭を優しく撫でる。

「で……。りあんさんのもくてきは、いったいなんですか？」

シヨウは、子供扱いされながらも、リアンの意思を確認した。ラルドと同じように何を考えているのかわからないが、意味も無くこのような企みはしない人である。それに、紅柱石を混乱させるのであれば、もっと直接的な嫌がらせをするはずだ。

「まあ、あなたたちにも有益なことだから、安心しなさいって。」

失礼な考えを感じ取ったのか、リアンはシヨウの頬をおもいつきり捻った。

「わかりまひた…」

シヨウが頬を摩りながら呟く。リアンが喋らない以上、何を聞いても答えは返ってこないだろう。

「じゃあ…。はやく、もとのすがたにもどしてくださいよ…」

シヨウは、恐る恐るリアンの顔を見上げた。リアンの性格を考えれば、わかりきったお願いだったかもしれない。

「ダメ」

リアンは、とても楽しそうに、シヨウのお願いを却下した。

第13話 生前の葵は、意外に過激かも？

「う…、う…ん…」

優子は、朦朧とする頭を押えながら、ゆっくりと身体を起こした。「いったい、何がどうなって…」

辺りは暗闇に包まれており、いまひとつ状況が把握できない。だが、何者かによって、外へ飛ばされてしまったことは間違いなさそうだ。

意識を集中させると、水のせせらぎが聞こえてくる。立ち上がるのと、細かい玉石が足の裏を刺激して、妙にくすぐったかった。優子は、どうやら小川のほとりに倒れていたようである。

「さて…」

少し落ち着いていた優子は、自分に起こった現象を考えてみる。こういった超常現象には慣れており、多少のことなら驚かない自信もあった。

月が出ていたので、ある程度の夜目がききそうである。しかし、周囲を確認しても人影がまったく見られない。優子は、同じような光に包まれた美咲のことを心配した。

「まさか、夢じゃないでしょうね…」

優子は、試しに頬をつねってみる。痛みが感じられるので、夢才子ではなさそうだ。

「そつえば！」

ある事実気づき、優子は愕然とする。優子に憑いていたはずの葵が、どこにも見当たらないのだ。

「葵さん…。もしかして、成仏しちゃったのかな？」

相手は幽霊だというのに、消えてしまえば寂しいものがある。そんなことを考えて、優子はおもわず苦笑してしまった。

しばらくは考えを巡らせていた優子だったが、このまま何も知らないわけにはいかない。優子は、小川の流れに沿って歩きはじめた。

樹神社の境内……。社の裏側では、優子と同じように飛ばされた美咲が意識を取り戻していた。

「あれ……。わたし、なんで外に……」

美咲は、混乱しながらも立ち上がる。優子と一緒に食事の準備をしていたはずなのに、いつの間にこんな場所に來たのだろうか……。そんなことを考えていると、徐々に気を失う直前の記憶が蘇ってきた。美咲は、慌てて住居の玄関に駆けつける。引き戸に手をかけるが、内側から鍵がかかっているのか開こうとしない。ガタガタとしていると、玄関の明かりが点され、中から女の子の声が聞こえてきた。

「……お姉ちゃん？」

少女は、錠をクルクル回し、玄関を開けようとする。

曇りガラスに映った少女は、美咲と同じような巫女装束を着ていた。しかし、少女の声は、美咲に聞き覚えのないものであった。

「お姉ちゃん、お帰りなさい……」

引き戸を開いた少女は、相手が姉でないことに驚く。

「ご、ごめんなさい！ てっきり、姉が帰ってきたと思ひまして……」

美咲と同じ年ほどの少女は、顔を真っ赤にさせながらおじぎをした。

「それで……、なんの御用でしょうか？」

にっこりと微笑んだ少女は、目の前の“お客さま”に、用件を確認した。

「あ……れ？」

美咲は、後頭部を鈍器で殴られたような衝撃を覚えた。

「……って、あなた誰？ ここは、わたしの家で……」

なぜ、見知らぬ少女が自分の家から出てきたのだろうか……。美咲の知る限り、従姉妹にもこんな少女はいないはずである。美咲は、パニック状態となって、頭を抱えてしまった。

それは、少女にも同じことが言える。現われた少女は、巫女装束を纏い、ここを自分の家だと言う。もちろん、そんなことがあるは

ずもない。

二人の少女は、お互いの顔を見合わせながら、ただ混乱するしかなかった。

十分ほど歩いただろうか、優子は崖に開いた洞窟を見つけた。中を覗き込んでみると、白い何かがぼんやりと浮んで見える。どうやら、大きな石碑のようであった。

「これって…」

優子は、その石碑を見て驚く。それは、美咲に案内されて海岸で見た、邪霊封じの石碑とそっくりだったのだ。

優子は、実体化した怨霊を思い出し、おもわず身震いしてしまう。自らの意思で天空族に変化できない優子にとって、こんなとき怨霊に襲われでもしたら一溜まりもない。優子は、恐怖を感じて、その場を離れようとした。

その瞬間、空気の裂けるような音が聞こえ、背にした崖に一本の矢が突き刺さった。

何者かの気配を感じた優子は、大きな岩の上に視線を向ける。そこには、弓矢を構え、優子を狙っている女性の姿があった。

「あ、葵さん！」

優子は、その姿に驚愕する。巫女装束を纏った女性は、紛れも無く姿を消していた葵だったからだ。

「物の怪の類ではなさそうですが…、いったい何者です！」

葵は、凜とした口調で優子に問いかける。

「葵さん…。いったい、どうしたんですか？」

優子が歩み寄ろうとすると、葵は躊躇わず矢を放った。放たれた矢は、優子の足を掠め、地面に突き刺さる。威嚇のようであったが、優子に矢を射る迷いはなさそうだ。

「結界の中に入ってくるとは、ただの人間とは思えません…」

再び矢をつがえる葵…。

「朱の封印を破ったのは…貴女ですね…」

葵は、きつい口調で言い放った。

葵が何を言っているのか、優子にはわからなかった。しかも、いきなり攻撃してくるなど、信じられないことである。

(なにかおかしい…)

優子は、この異様な状況に、違和感を覚えた。

目の前の葵は、優子のことを知らないようである。それに、葵の生体波長は、今までのように曖昧なものではなく、はっきりとしたものであった。そう…、この葵は幽霊ではなく、生きている人間としか思えないのだ。

優子は、葵の様子をジッと窺う。だが、このままでは的になるだけである。優子は、弓矢に意識を向けながら、葵の間を探った。すると、どこからか別の声が聞こえてくる。

『ああ…。彼女は大丈夫だから』

その声は、優子がよく知る人物のものであった。

「えっ、アリス？」

優子は、突然聞こえてきたアリスの声に驚く。

「あれ…？」

アリスの姿が見当たらず優子が小首を捻っていると、ふわふわと何かが飛んでくる。手に取ってみると、それはシヨウの創った霊視のペンダントであった。その瞬間、優子の前にアリスの姿が浮かび上がる。

「アリス…なの？」

優子は、目を丸くして驚いた。アリスの姿は、半透明に透き通っており、まるで肉体を持たない幽霊のようであった。

『優子…、大丈夫』

アリスは、明るく微笑んだ。

「アリスさまの、お知り合いのかたでしたか…」

岩から飛び降りた葵は、慌てて頭を下げた。アリスと並ぶと、まるでお互いの立場が逆転したようである。

「ごめんなさいね…。わたしは、樹神社の巫女で、“さやか”と申します」

さやかと名乗った葵は、バツが悪そうに呟いた。

「さ、さやか…さん？」

優子は、呆然と立ち尽くす。巫女装束を着ているが、どう見ても葵とは思えなかったのだ。

「ちよつとアリス…。どうということよ…」

優子は、葵に聞こえないような小声で耳打ちをする。優子が知っている葵とは、別人なのだろうか…。

『ここは、たぶん葵さんが生きていた時代ね』

つい最近、過去での冒険を経験していたアリスは、時空間転移の可能性を説いた。

『しかも、三年以上前…。人間界で異世界の存在が知られる前の時代みたい…』

アリスは、優子が握っている霊視のペンダントを見つめた。

もともと妖精族や精霊族は霊体に近い存在で、優子のように普段から人間界で生活していなければ、その姿を見ることはできない。

美咲のように力を持つもの以外は、存在すら確認することができなかった。

三年前の大魔王ザーヴァ襲来で、異世界の存在が明らかとなる。

その事件がきっかけとなり、妖精や精霊を信じる者が増加し、一般人でもアリスたちを見れるようになったわけだ。

『つまり、この時代では精霊界が認知されてないから、あたしの姿も見えないってわけ』

アリスは五歳の頃から人間界に訪れていたが、当時はショウにか姿が見えなかった。

「じゃあ…。ここは、過去の世界って…こと？」

そんな問いかけに、アリスは頷く。しかし、優子にはとても信じられそうになかった。

「それにしても…」

優子は、あらためてアリスの姿を見つめる。

「あんだ…、本当に幽霊みたいだよ…」

優子が呆れ顔で呟くと、アリスは困ったように苦笑する。霊視のペンダントによって見えるようになるなど、アリスと知り合いでなければ、幽霊と間違えたとしてもおかしくはない。

「えっと…、優子さま？　ここは、藍の封印がされた場所…」

二人の会話が途切れたのを見て、さやかは真剣な表情で話し始めた。

「以降、この地には立ち入らないでいただきたいのですが…」

さやかは、申し訳なさそうに頭を下げる。事情はとも有れ、強力な力を持つ優子には封印へ近づいてほしくなかった。

「藍の封印…」

優子は、はじめて聞く言葉に小首を傾げる。

「と、ともかく、ここで立ち話もなんです…。近くに樹神の神社がありますので…、そちらにお越しください」

言葉を濁したさやかは、優子の背中を押しながら、樹神社へと向かうことにした。

第14話 美咲の決意！ たとえ未来が変わることになるうとも…

大部屋に飛び込んだシヨウは、気を失っているセリアを見つけた。「せりあ…、だいじょうぶかあ〜？」

どうやらセリアは、リアンの時空術に巻き込まれなかったようである。シヨウが肩を揺らすと、セリアはゆっくりと目を開いた。

「うう…ん、シヨウ…？」

セリアは、心配そうにしているシヨウに気づく。次の瞬間、一気に目を覚ました。

「えっ…。シヨウ…なの？」

目の前にいたのは、リアンの時空術によって、三歳児姿となったシヨウであった。

「いったい、どうしたのよ…。その姿〜」

セリアは、笑いを堪えながら問いかける。そのかわいさは、メガトン級であった。セリアは、無意識のうちにシヨウを抱っこしていた。

「りあんさんのせいだよ…」

シヨウは、子ども扱いされたことにムツとする。こういうときは、アクアマリンの気持ちがよくわかる。

「リアンちゃんの所為って…。リアンちゃんが来てるの？」

セリアは、最近家にやってきて、シヨウと自分の娘を名乗る女の子を思い出していた。

シヨウは、リアンのことを“さん”付けで呼んでいる。まるで大人に対するような態度であり、暗黒族のリウムも彼女のことを恐れているようだった。

今回の旅行にも連れてこようとしていたのだが、なぜか綾菜から離れようとしなかった。そのため、リアンは光風町の家にいるはずである。

「はあ〜…」

シヨウは、リアンの正体を説明しようかと悩む。さきほど現れた成人の女性、娘を名乗る三歳の女の子、幼いセリアを育てたトエル山の大魔法使い…。すべて同一人物…。つまり時空神ダイヤモンドことリアンであった。

だが、リアンの正体をばらしでもしたら、シヨウの命は無いかもしれない。身震いを感じたシヨウは、やっぱり黙っておくことにした。

「そういえば…、アリスが光に包まれて…」

セリアは、部屋を見回してアリスを探す。しかし、アリスの姿は、どこにも見られなかった。

「あいす、ゆう、みさき…。みんな、じくうかんてんで、べつのだいにとばされたよ」

シヨウは、リアンとのやり取りだけを伏せ、美咲たちに起こった現象を説明した。

さやかに連れられて樹神社へやってきた優子たちは、現代でと同じ大部屋へと案内された。

大部屋では、同じように時空間転移で飛ばされた美咲が、所在無さそうに座っている。美咲は、優子や葵の姿を見て、パツと明るくなった。

「みなさん、御無事だったんです…、えっ！」

美咲の動きは、アリスを見て固まった。

「アリスさん…、いつもお亡くなり…」

涙を流しながら震える美咲…。相変わらずの見事なポケポケに、アリスはずっこけた。

「美咲ちゃんも、無事なようね」

優子は、苦笑しながら問いかける。アリスによると、セリアは時空術の範囲から外れていたようで、この時代に来ていない可能性のほがが高い。つまり、これで全員がそろったわけだ。

「無事なんです…、なにがなんだかわからなくて…」

いまだ状況の把握できない美咲は、頭を抱えて唸っている。アリスが小声で葵の生きている時代に飛ばされたと伝えたと、目を大きく見開いて驚いた。

そのとき、部屋の奥から、美咲用の布団を持ってきた少女が現われた。

「あれ…？ さやかお姉ちゃん、帰ってきて…」

少女は、姉と一緒にいる優子を見て大汗をかく。

「えっと…。お布団、もうひと組み用意しますね…」

それほど巫力が無いのか、少女にはアリスが見えていないようである。美咲が予備に持っていた霊視のペンダントを渡すと、少女はアリスの姿に悲鳴を上げるのだった。

「そつえば…、お腹すいた…」

優子は、お昼から何も食べていないことを思い出す。すると、美咲のお腹がグウ〜となる。みんなに注目されて、美咲は真っ赤になった。

「うふふっ 楓…、食事の準備をお願いね」

さやかが微笑みながら少女に指示を出すと、なぜか美咲がずっこけた。

「かかか…、楓ー！ー！」

突然、美咲が奇声を上げる。少女の顔をまじまじと見て、複雑な表情をした。

「あゝ、樹神楓…ちゃん？」

脅えた少女が頷くと、美咲は大きなため息をついた。

『美咲…、どうしたのよ』

アリスは、嬉しそうに耳打ちをする。美咲が何かに気づき、それに落胆しているようなのだ。

「あははっ…」

美咲は、アリスにしか聞こえないように呟く。

「わたしのお母さん…。樹神楓っていうんですよ…」

それには、さすがのアリスも驚いた。

「葵さん…じゃなかった。さやかさん、さっき封印がどうとか言うてましたよね」

優子は、運ばれてきた食事を取りながら、さやかに問いかけた。すると、さやかがたちまち挙動不振となる。

「藍の封印…。それに…、どこかの封印が破られたとか」

優子の追及に、さやかの顔は引きつった。

「おそらく、朱・山吹・濃緑・藍・藤紫…。つまり五色封印のことです」

美咲の言葉に、さやかは啞然とする。

「紅柱石の樹神は、人間神さま…青金神ラピスラズリの御魂を祀っています。その御力に惹かれ、この地には悪霊や怨霊が集まってくるのです。それを鎮めている封印が五色と呼ばれています」

美咲の説明した内容は、樹神の人間しか知り得ないことであった。

「あ…れ？ 人間神ってトパーズのはずでしょ」

アリスは、自分の知っている内容と違うことに気づく。アリスの知る人間神とは、奇数月十一月の寶石騎士トパーズのことである。

アリスのセリフに、さやかは再び驚愕した。

「は、はい。黄玉神トパーズ、青金神ラピスラズリ…。いずれも人間神さまのことです」

人間神のことを知っているのは、樹神一族の中でもそれほど多くない。現に、美咲はトパーズの存在を知らず、楓など話し自体についていけずに呆然としていた。

「み、みなさんは…、樹神の事情にお詳しいんですね」

さやかは、あらためて優子たちを見つめた。正体不明の巫女…美咲に、退魔の力が異様に高い優子。そして、神の化身としか思えないアリス…。彼女らは、いったいどこからやって来たのだろうか。

「やっぱり、喋っちゃまずいですよね」

美咲は、アリスに小声で確認する。

「そうね…。っていうか、あの子が本当にあんたのお母さんだと

したら、会うだけでもまずいことになるかも…』

アリスは、楓に視線を向けた。

今回の時空間転移は、前回と違い数十年単位の移動である。関係あると思われる人物との接触は、できるだけ避けなくてはならない。接触によって歴史が変わってしまい、元の時代へ戻ったとき、まったく知らない世界になっている可能性もあるのだ。

(なるべく関わらないでおこう…)

美咲が冷や汗をかいていると、優子が小声で話しかけてくる。

「ねえ、美咲ちゃん　これって、葵さんが探している何かを見つけるチャンスじゃないかな？」

優子は、葵の失われた記憶…、成仏できない未練が何なのか、共に行動していればわかるかもしれないと考えていた。

「そう…ですね…」

美咲は、ある事実気づく。目の前にいるさやかは、浮遊霊として現われた葵とほとんど変わらない姿をしている。それは、近い将来、さやかが命を落としてしまうことを意味していた。

(うまくすれば、さやかさんは死ななくてすむのかな…)

さやかには死んでほしくない。だが、さやかを助けることは、楓の運命を変えてしまうことになる。最悪の場合、楓が別の男性と結婚し、美咲が生まれてこないことも考えられた。

時空の流れについては、時空力を操れるシヨウのほう詳しいだろう。結論を言ってしまうえば、美咲の想像した通りであった。

『まあ…。なるようにしか、ならないでしょうね…』

美咲の悩んでいる内容を察したのか、アリスがそんなことを呟く。わかっていない優子は、一人だけ小首を傾げていた。

美咲は、ジツとさやかを見つめる。さやかの命が危険にさらされたとするなら、美咲は迷わず助けるだろう。それが己の死に繋がる結果になるうとも、見捨てることで後悔はしたくなかった。

第15話 最近は、口裂け女つてのが流行っています

翌日の早朝…。目を覚ました美咲は、寝ている優子たちを起さないように、ゆっくりと布団から這い出す。巫女装束を纏い、そつと住居を後にした。

竹ぼうきを持って、まだ薄暗い境内に立つ。東の空に視線を向けると、薄っすらと明るくなっている。もうしばらくすると朝日が昇ってくるのだらう。

「さて…、始めますか」

美咲は、広い境内を見回す。ここが終れば社の掃除に、巫力を高めるための瞑想…。そして、みんなの朝食を用意しなくてはならない。ぐずぐずしている場合ではなかった。

「あら…、早いわね」

同じように竹ぼうきを持ってやって来たさやかは、少しだけ驚いた声を上げる。まさか、美咲が先に掃除をしているとは思わなかったからだ。

「あ、葵さん！ お、おはようございます！」

美咲は、慌てておじぎをする。

（そついえば、ここって過去の世界だった…）

苦笑しながら、そんなことを思いだした。いつもの日課とはいえ、こんな時まで早起きしてしまうなど、美咲は我ながら笑ってしまうのだった。

「楓にも見習ってほしいわ。ほんと、あなたと同じ年とは思えない…」

さやかは、困ったように呟く。楓は、今も間違いない夢の中だろ

う。

「あははっ…」

返答に困る美咲…。

（絶対、無理！）

口にはしなかったが、心の中でそう叫ぶ。楓の寝起きの悪さは、現代でも筋金入りであった。

「ところで…。あなたたち、わたしのことを葵って呼ぶけど…」

さやかは、昨晚から気になっていたことを尋ねた。

「その葵ってひと…。そんなにわたしと似てるの？」

これほど間違えられるのだから、よほどそっくりなのだろう。ぜひ、会ってみたいものである。

それを聞いた美咲の身体は、数センチ跳ね上がった。まさか、“貴女が死んで浮遊霊となったのが葵さんです”などとと言えるはずもない。

「はい！ あ、葵さんは、え〜っと…」

美咲は大汗をかきながら唸り声を上げる。うまく誤魔化さないと、さやかが自分の運命を知ってしまうことになる。

「葵さんは…。わたしの…。そう、わたしのお姉ちゃんです〜」

とんでもない答えに、さやかは啞然とした。まさに、取って付けた様な内容だったからだ。

(聞かないほうがいいみたいね…)

さやかは、美咲が困っているのを見てそう感じた。

「そ、それじゃあ、わたしは祭壇のほうを掃除するから、境内はお願いできるかしら？」

美咲が頷くのを見て、さやかはにっこりと微笑む。普段は一人でしている掃除も、手分けをすれば早く終わるだろう。さやかは、足取りも軽やかに、社の中へと入っていった。

ほっと額の汗を拭う美咲…。

「ふう〜…。誤魔化せたみたいね…」

美咲は、真剣にそんな勘違いをしていた。

「さてと…」

美咲は、朝日を浴びて目を細める。こうしていると、ここが過去の世界ということも忘れてしまいそうだ。

そのとき、社から悲鳴に似た声が聞こえてくる。美咲が駆けつけると、祭壇を見つめたさやかが、呆然と立ち尽くしていた。

「さやか…さん？」

美咲が近づいてみると、御神体に埋め込まれている五つの玉のうち、二つにヒビが入っていた。

「えっ！」

美咲は、御神体を見て驚愕する。玉にヒビが入っていたからではない。美咲の知る御神体には、五つの玉など最初から埋め込まれていなかったからだ。

「朱に続いて、濃緑の封印が破られました…」

さやかは、声を震わせて呟く。

「この宝玉は、五色封印と繋がっているの…」

さやかによると、宝玉が砕けたということは、封印が破られたことになるらしい。

立て続けに封印が破られるなど、もはや偶然だとは思えない。やはり、何者かが意図的に封印を破っているのだろう。

すると、突然、社の中に稲光が射し込んでくる。続いて、ゴロゴロとした音が大気を震わせた。

美咲たちは、急いで社の入口へ走る。空を見上げて、信じられないといった顔をした。さきほどまでと打って変わり、暗雲が日の光を遮断している。だが、それだけではない。空には無数の死霊が漂い、まるで死後の世界に迷い込んでしまったようなのだ。

「う、うそ…でしょ…」

その光景に、美咲は己の瞳を疑う。

「さっきまで、あんなに晴れていたのに…」

それを聞いたさやかは、豪快にずっこけた。

「驚くところが違うでしょ！」

さやかが大きく叫ぶ。そこに、異変に気づいたアリスが現われた。

「アリスさま…」

さやかが深々と頭を下げると、アリスは困ったように苦笑する。

「なんだか、厄介なことになってるみたいね…」

霊視のペンダントを付けていないアリスだったが、霊体に近い立場となったことで、死霊が見えるようになっていた。

「まだ、三つの封印が残っているの、しばらくするとあの死霊たちも鎮まるでしょう…」

さやかは、真剣な表情で美咲たちを見つめる。

「でも、これ以上封印が破られると、力のある怨霊の復活も考えられる…。わたしは、これから破られていない封印の地に向かいます…」

さやかは、弱々しく微笑んだ。

「うん、わかった。こっちでも、戦いの備をしておくね」

アリスの言葉に、美咲たちはギョツとする。

「あたしの勘だと、これから怨霊との戦いがある。かといって、明らかに戦力不足だし…」

アリスは、腕を組んで考え込んだ。

「ねえ美咲…。先に確認しておくけど…。いま、銀星さんたち召喚できる？」

アリスの問いかけに、美咲は小首を傾げた。

「はあ…。でも、銀星さんたちって、怨霊を祓うことできないんです…」

退魔の力を持っていない銀星たちでは、戦ったとしても怨霊に傷を付けることぐらいしかできない。あくまでも、怨霊を祓うことができるのは、美咲たち退魔師だけなのだ。

「いいから、試してみて！」

アリスが叫ぶと、美咲は袖をまくり、しゅしゅ腕輪を構えた。

「そ、その腕輪は…」

さやかは、美咲の付けている腕輪を見て驚く。それは、樹神社に伝わる召喚の腕輪だったからだ。しかも、召喚の腕輪を操るためには、かなりの巫力が必要とされる。さやかですら、腕輪を操ることはできなかった。

「あ…れ？」

瞳を瞑り意識を集中させていた美咲だったが、付いている契約石は一つも反応しない。

「どうして…」

美咲は、焦りながらアリスを見つめた。

「やっぱりね…」

アリスは、五千年前の精霊界で五精霊になれなかったことを思い出していた。

『この時代で、美咲との契約は成立していない…。つまり、銀星さんたちの力は借りれないってことよ』

予想通りの結果に、アリスは落胆した。

「この時代…って。美咲ちゃん、あなたたち…」

さやかは、会話の妙な箇所気づく。聞いていると、ある予想が頭を過ぎるのだ。

『そつ あたしたちは、未来からやって来たの』

困っている美咲の代わりに、アリスが答える。さやかは、黙って次の言葉を待った。

『で、彼女の名前は樹神美咲…。あなたの妹、樹神楓の娘さん…だったり』

アリスは、さやかの反応を楽しむように微笑んだ。

「なるほど」

さやかは、冷静に事実を受け止めた。美咲たちがただ者でないことは、最初からわかっていたことである。

「でも…。まさか、楓の娘だったなんてね」

さやかは、苦笑しながら呟く。

「ってことは…。わたし…、あなたの伯母さんに…なるわけ？」

そんな考えに辿り着き、さやかは複雑な表情をした。美咲は、さらに返答に困ってしまう。

『ほらほら、和んでる場合じゃないでしょ…』

アリスは、大きなため息をつく。シヨウがない以上、アリスが

しっかりとしなければならぬ。アリスは、慣れない分析を始めた。

『さやかさんと美咲は問題ないとして…、楓の戦力は？』

さやかは、頭を横に振る。どうやら、それほど大したことはなさそうである。

『被えないにしても、怨霊を弱めることができれば…。さやかさん、この辺りに契約できそうな物の怪っているかな？』

アリスは、この時代で美咲に新たな契約を結んでもらおうと考えた。

「もののけ…ですか？」

さやかは、唸りながら考え込む。

「そうね…。最近、口裂け女…ってのが流行ってるかしら…」

そんな意味不明な呟きに、美咲はずっこけた。

『いや…、流行りがどうかじゃなくってね…』

アリスは、さやかのぼけぼけに、美咲と血の繋がりを感ずるのだった。

第16話 主要アイテムのパワーアップは、冒険活劇のおやくそく

遙か上空…、風に包まれたアリスと美咲は、広がる雲を見下ろしながら高速飛行していた。

「うわっ、うわあああー！ー！」

信じられないスピードで景色が流れる。美咲は、アリスにしがみ付き、ただ悲鳴を上げるしかなかった。

『よしっ、見えた！』

時間にしてわずか数分。アリスたちは、紅柱石から三百キロ以上も離れた光風町に辿り着いた。

自然公園に広がる迷いの森、その中央に聳え立つ巨大樹こだまの樹…。アリスは、躊躇わずにこだまの樹の広場に降り立った。

広場には、オーブと呼ばれる発光体が無数に浮遊している。オーブとは精霊力が集まったもので、こだまの樹は人間界と精霊界を繋ぐゲートの役割があった。

アリスは、樹の根に駆け登り、幹に手をかざす。すると、浮遊していたオーブが一箇所に集まり、精霊界へと繋がるゲートが出現した。

ぐったりとしている美咲を引きずって、アリスはゲートへ突入する。青白い光に包まれ、時空の流れに身を委ねた。

しばらくして光がはじけると、アリスたちは空中にほおり出される。真下には大きな湖が広がっていた。ここは、精霊界第三聖界アイオライトにある島…、精霊族の聖域サンストーンである。

「よっと」

水面にぶつかる寸前、アリスは風を纏って浮遊する。湖畔に降り立ち、そのままダッシュで走りだした。

腕を掴まれている美咲など、重力に逆らって真横になびいている。精霊界に入り実体化したアリスは、実家でもあるログハウスに飛び込んだ。

「おじいちゃん！」

アリスが大声で叫ぶ。そこには、驚きのあまり目を丸くして立ち尽くす、子供時代のファリスがいた。

「いや〜ん　ファリスさん、かわいい〜」

アリスは、おもわずファリスを抱きしめる。おそらく、八歳ぐらいのファリスなのだろう。

「あ……」

そこで、アリスは重要なことを思いだした。

ファリスが赤ん坊のアリスを育て始めるのは、彼女が十六歳のときである。この時代では、アリスは五千年前の世界から転生すらしていないのだ。

「キサマ、何をしている……」

そのとき、部屋の奥から、呆れ顔のラルドが現われた。

「いや〜、なんともうしましようか〜。あたしたちは、けっして怪しい者では……」

サンストーンには、選ばれた者しか入ることができない。アリスは、今の状況を、どのように説明しようか悩んだ。

「だから、何か用があつて来たんじゃないのか……」

ラルドは、にやりと微笑む。ラルドの意味不明さは、この時代でも健在であった。

「あれ？　おじいちゃん、あたしのことわかるの？」

その瞬間、ラルドの鉄拳がアリスの顔を捉える。アリスは、錐揉み状態でぶつ飛び、壁に激突した。

「おじいちゃんじゃねえ〜……。お兄ちゃんと呼べ……」

ラルドは、不機嫌そうに訂正する。

いつものつつこみを受け、アリスはラルドが自分のことを知っていることと確信した。

「ほお〜。つまり、怨霊との戦いに備えて、この娘と契約してくれる仲間を捜しているわけだな……」

ラルドは、アリスの説明を受けて、テーブルにうつ伏せている美咲を見つめた。

美咲は、アリスの全力移動に付き合わされて、全身が死ぬほど痛かった。退魔師として一般の人間以上の力を持つ美咲だが、アリスと比べられては堪らない。美咲は、生きていることを、神に感謝していた。

「お姉ちゃん、大丈夫？」

ちびっ子フアリスは、美咲を心配して飲み物を持ってくる。

「し、死んじゃうよ……」

美咲は、力無く頂垂れた。

ラルドは、微笑みながら美咲の頭を撫でる。

「それにしても、かなりの力を持っているようだな……。どうだ、元の時代に戻ったら修行を受けてみる気はないか？」

ラルドがそんな提案を持ちかけるとは、美咲の潜在能力はかなり高そうである。

「は、はあ……」

美咲は、困ったように苦笑する。アリスを横目で窺うと、必死に断れと合図していた。

「か、考えておきます……」

ラルドの気迫に押されて答えると、アリスは顔を押しさえて落胆する。

「うむ」

ラルドは、満足そうに頷いた。

「よし、わかった。美咲を連れて精霊界を回ることを許可する。ただし……第一・第二聖界は魔王軍に支配されているから、気を付けるんだぞ……」

この時代の精霊界は、精霊神が不在のため、第三聖界以外を魔王に支配されていた。

「ついでに、ブライとカーズも倒しとこうか？」

アリスは、未来で自分とシヨウウが倒すことになる魔王の名前を上

げた。今のアリスなら、小一時間もあれば魔王軍を全滅させられるだろう。もちろん、そんなことをすると歴史が変わってしまうため、実際にできるはずもないのだが…。

「戯言はおいといて…」

ラルドが美咲の腕を取る。

「この腕輪のリミッター、外しておくぞ」

そう言つて、ラルドは腕輪の表面を指でなぞつた。

「リミッター？」

アリスが不思議そうに腕輪を眺める。だが、特に変化が起こつたように見えない。

「何かのポイントが、五倍に増えたはずだ…。美咲ほどの力があれば、扱えるだろう…」

ラルドによつて、腕輪に付けられる契約石ポイントは、十から五十へとアップした。

「おそらく今回の事件は、ラピスラズリの復活が関係している。アリス…、美咲はお前が護るんだぞ…」

ラルドの言葉に、アリスは大きく頷いた。

目覚ましが鳴り響き、優子はゆっくりと起き上がった。

美咲たちの布団は、すでに片付けられている。ふと、枕元に視線を向けると、書置きのようなものが残されていた。

「ちよつと出かけてきます…、ねえ」

優子は、書置きに目を通す。

「こんな早くから、どこに行つたのかな…」

大きなあくびをして、身体を伸ばす。優子は、縁側の雨戸が、ガタガタと震えているのに気づいた。

そつと雨戸を開けてみると、外は嵐のように荒れていた。雨こそ降っていないものの、激しい暴風で家が軋んでいる。時折、稲光が起こり、腹に響くような雷鳴も轟く。異様な雰囲気、優子は身震いを感じるのだった。

手持ち無沙汰な優子は、美咲たちがいつ戻ってきてもいいように、台所を借りて朝食の準備を始めた。お米を炊き、味噌汁の具を火にかける。手の空いた間、優子はテーブルに置かれていた新聞を手にした。最初に確認したのは、もちろん、この時代の年月である。

「え〜つと…、二十三年前か〜…」

どうやら、優子たちの時代と、それほど離れていないようだ。また、日付まではずれていない。つまり、この時代でも、学生にとっては夏休み中であつた。

新聞を眺めていた優子は、ある写真に注目する。古い塚にある小さな社が壊れたという記事の写真である。

「これって…」

その写真を見た優子は、慌てて記事に目を通す。塚の名前を見て、心底驚いた。

「我周塚…」

それは、美咲に連れられて出向いた、あの不思議な塚であつた。どうやら二日前、何者かによつて社が破壊されたらしい。我周塚は、ある怨念を鎮めるため建てられたもので、その記事も祟りを恐れた内容となつていた。

優子は、我周塚に現われた女性の言葉を思いだす。我周塚は、美咲と優子、そして葵に大きく関係しているという。過去に飛ばされたことと、我周塚が破壊されたことは、何か繋がりがあつたのだろうか…。

そのとき、何者かの気配を感じた優子は、台所の入口に視線を向ける。そこには、眠そうに目を擦っている美咲の姿があつた。

「ふああ〜…。おはようございまふ〜…」

美咲は、大きなあくびをして挨拶をする。だが、朝食の準備をしているのがさやかではないと気づき、一気に目を覚まして赤面した。「い、ごめんなさい！ お客さまに、ご飯の準備をもらっちゃつてー！」

大慌てで優子と代わろうとするが、何も無い床で見事にずっこけ

てしまう。

「痛った~~~~い……」

うつ伏せた状態の楓は、涙目でヒリヒリするおでこを押さえた。

「ほら〜、なにやってるのよ」

優子は、苦笑しながら楓に近づく。どうやら楓は、純天然系のようである。この系統に属する人たちは、何をやっても微笑ましい結果となってしまうのだ。

楓を起こそうと、優子が手を差し出す。その瞬間、真横から優子の手首が握られた。

ハッとした優子は、その方向に視線を向ける。が…、そこには誰の姿もない。気のせいかと思つて視線を戻すと、身体を起こした楓が真っ青な顔で震えていた。

第17話 幽霊は恐いけど、いざとなったら落ち着いたものです

「う、そ…。神社には、結界が張ってあるはず…。なのに」

楓は、震える手で、印を結ぶ。

「あ、あれ…。変だな…」

指刀で空中を切るように何度も被うが、あまり効果はなさそうだ。
「えっと…」

優子は、慌てず騒がず、味噌汁の入った鍋を竈から除ける。後始末をして、火の心配がないことを確認した。

「さて、楓ちゃん」

とことこ近づいた優子は、楓の腕を取って引き寄せる。

「逃げるわよ！」

優子は、楓を抱えるように、台所から逃げ出した。

「きゃああ、わあああつ、いやぁー！」

楓は、いろんな場所を見て悲鳴を上げる。

優子は、内心の恐怖を抑えながら、大部屋へと飛び込んだ。お膳の上に置いてある霊視のペンダントを手に取り、辺りを確認する。すると、数え切れないほど無数の死霊が浮かび上がってきた。

葵のようにはつきりとしていないが、全て人の形をしている。恨めしそうな、苦しそうな表情をした霊たちは、優子たちを見つめて、ジリジリとすり寄ってきた。

「あははっ…」

優子の全身に鳥肌が立つ。この状況を、どのようにしろというのだろうか…。優子は、裸足のまま庭に飛び出る。

「な、なによ…。これ…」

その光景に、優子は己の瞳を疑った。

空には青白く光る何かが飛び交っている。それらは、彗星のように光の尾を引いていた。

よく見ると、光の塊は人の顔であることがわかった。まるで叫ん

でいるような表情をした霊体は、ゆっくりと漂いながら、この樹神神社に集まってきていた。

「優子さん！」

楓は、優子の手を取り、社を目指して走り出す。結界の力が強い社なら、死霊から逃れられると考えたのだ。だが、その目論見は大きく外れることとなる。死霊たちは、社の周りに終結し、結界を破ろうとしていたからだ。

死霊の一部が、ゆっくりと近づいてくる。背後からも迫ってきており、優子たちは周りを囲まれ逃げ場を失った。

「い、嫌っ！」

優子は、恐怖に身を竦ませる。楓は、泣きながら必死に死霊を祓おうとしていた。しかし、楓の巫力では、なす術がない。

（お兄ちゃん！ 助けて！）

優子は、瞳を瞑り、心の中でシヨウに助けを求めた。

ガシュツッ！

閃光が走り、数体の死霊が祓われる。優子は、自分たち以外の気配を感じて瞳を開いた。

長髪を首筋で縛った一人の青年が、剣を構えて死霊を牽制している。

「二人とも、大丈夫か……」

青年は振り返り、優子たちの無事を確認する。それは、神官の装束を纏った、二十歳ぐらいの男性であった。

無数の死霊が、再び紅柱石の空を覆いつくす。山吹の地にいるさやかは、五色封印の一つが破られたと悟った。

「藤紫……あるいは藍の封印か……」

さやかは、神社に残してきた楓たちを心配した。

樹神神社近くの小川にある藍の封印は、日頃からさやかが結界の力を高めている。そのため、封印の地を特定することは容易ではない。だが、昨晚の優子のように、力の強い者であれば結界内に進入

することもできた。

さやかが山吹の地に出向いたことで、藍の封印が破られ、楓たちが死霊に襲われている…。そんなことが脳裏を過り、さやかは不安に身体を震わせた。

その瞬間、山吹の地が異様な雰囲気に包まれる。さやかは、短剣を手に、退魔の力を高めた。全方向に意識を集中させ、正体不明な敵の登場を待つ。

『うう…ぐううう…』

地の底から、不気味な呻き声が響いてくる。

地面が盛り上がるような錯覚を感じると、さやかの前に一体の怨霊が現れた。独特な退魔師の衣を纏った怨霊は、冷たい視線でさやかを睨みつける。その姿は、陽炎のように揺らいでいた。

「なっ！」

さやかは、怨霊が纏っていた衣を見て驚愕する。

「まさか…、樹神の退魔師！」

それは、樹神の特徴を持った退魔師の装束であった。

退魔師の怨霊がさやかに迫る。さやかは、退魔の力を付加させた短剣で、すれ違いざまに怨霊を斬り裂いた。

『うごおああっ！』

脇腹を斬られた怨霊は、狂ったように苦しみだす。

「五色の封印を破っていたのが、樹神の怨霊だったとは…」

さやかは、とどめを刺そうと振り返った。

「うぐっ！」

突然、左肩に激痛が走る。腕を伝い、温かい液体が地面に流れた。視線を向けると、肩が裂け、純白の装束が赤く染まっていた。

怨霊の手には、怨念によって創られた短刀が握られている。怨霊は、不気味に笑みを浮べ、再びさやかに襲いかかった。

「恭介お兄ちゃん」

楓の表情がパツと明るくなる。助かったというだけでなく、ど

こか嬉しそだった。楓は、呆然としている優子に、現われた青年を紹介する。

二人の危機を救ったのは、朱の封印が破られたと連絡を受け、本家から様子を見にきた樹神恭介であった。

手にした青銅の剣を構える恭介…。

「楓ちゃん…、下がって！」

剣には刃が付いていないものの、練り上げた退魔の力を付加させることで死霊をひき裂くことができた。恭介は、近づいてくる数体の死霊を、わずか一振りで祓ってしまった。

「なんか…、わたしの中で樹神のイメージが変わった気がする…」

優子は、複雑な表情でため息をついた。

優子が知る樹神といえば、親友の飛鳥のことである。飛鳥は、美咲たちのように退魔の力を持つわけでもなく、ごくごく普通の女の子だ。唯一変わっているとすれば、最近、人間神候補と勘違いされ、魔族に命を狙われていることぐらいであった。

樹神一族がこのような特殊集団だとは思いつかなかった。だが、すべての樹神が特殊能力を持っているわけではない。退魔の力に秀でているのは、光風町の本家と、紅柱石の樹神家だけなのだ。

光風町の樹神神社は黄玉神トパーズ、紅柱石の樹神神社では青金神ラピスラズリの御魂を守護している。両神社では、古来より人間神の御力に惹かれて集まってくる邪霊や怨霊と戦っており、退魔師としての特殊な技や術が伝わっていた。それ以外の樹神は、ごく普通の神社である。

恭介の登場により、次々と死霊が祓われる。しかし、それも長くはもたなかった。

「お兄ちゃん、危ない！」

楓が悲痛な声を上げる。

退魔の力を発生させることは、かなりの集中力を必要とする。恭介の動きは、疲労のため徐々に鈍くなっていた。

「数が多すぎる…。とても一人じゃ…」

優子は、何の武器も携帯していないことを後悔した。アリスやセリアなら別空間に置かれた武器を取り出すのも可能だが、優子にそんな芸当ができるはずもない。

「いったい、どうすれば……」

優子は、この状況を打開する方法がないか考えた。

「……う……さ……。……優子さん！」

そのとき、背後から優子を呼ぶ声が聞こえてくる。振り返ると、現代で優子にとり憑いた浮遊霊、葵の姿があった。

「あ、葵さん……なんですか？」

一瞬、さやかかと思っただが、霊体であるため葵と思われる。

「葵さん、いままでどこに」

優子は、葵が消えていた理由を問いただす。

「そんな場合ではありません……」

葵は、真剣な表情で死霊の群れを見つめた。

「優子さん……。わたしに、あなたの力を貸してください……」

そう言うと、着ていたコートを脱ぎすてる。葵は巫女装束を纏っており、手には和弓が握られていた。

「さあ、優子さん……。弓に手を添えて……」

葵に促され、優子は彼女と重なるように弓を握った。

葵が破邪の力を発生させると、それに反応して優子の天空力が高まる。矢の形をイメージして、弓につがえた。葵と優子は、天空力の矢を空に向けて一気に放つ。

閃光が天へと駆け上った。天空力の矢は、雲を裂き、上空で大きく弾けた。しばらくすると、無数の光の矢が紅柱石の街に降り注ぐ。矢は死霊たちを貫き、瞬時に除霊した。死霊が全て祓われたとき、立ち込めていた暗雲が消え、日差しも戻って青空が広がった。

第18話 真相の告白 記憶を取り戻した葵

死霊が祓われると、天候の異変は嘘のように治まった。

『ふう〜…』

さやかは、弓を下ろし、額の汗を拭う仕種をする。そして、優子たちの視線に気づき、力なく微笑んだ。

「お…姉ちゃん…」

楓は、霊体の葵を見て驚愕する。巫女装束を纏った葵は、さやかと見分けがつかない姿をしていた。

「さやか…。おまえ…、どうして…」

恭介は、震える身体で葵に近づく。葵が苦笑すると、視線を逸らして頂垂れた。恭介たちは、死んださやかが霊体となって助けに来たと考えていた。

『わたしは、この時代のさやかではありません…』

葵は、穏やかな表情で、楓たちに微笑みかける。

「葵さん！ き、記憶が戻ったの？」

優子が叫ぶと、葵はゆっくり頷いた。

過去へと飛ばされた葵は、優子から離され、闇の空間を漂っていた。何も見えず、何も聞こえない。身体の内もきかず、葵はついに成仏の瞬間が訪れたと考えた。

しばらくすると、葵の視覚に、ある映像が流れ込んでくる。それは、月明かりに照らされた優子を、弓矢で狙っている光景だった。

慌てて止めようとするが、葵の身体はまったく動かない。逃げるように伝えたくても声すら出てこない。葵は、流れてくる何者かの視界を、ただ“見る”ことだけしかできなかった。

矢が放たれ、驚いた優子がこちらを見上げる。何者かの姿を見て、優子はなぜか葵の名前を口にした。

『物の怪の類ではなさそうですが…、いったい何者です！』

葵の言葉ではない、葵の声が聞こえてくる。葵は、自分が喋っているような感覚に陥った。

アリスの登場により、戦いは回避される。葵が見ているのは、さやかという女性の視界であることがわかった。どうやら葵は、樹神の退魔師さやかと一体化しているようだった。

葵の意識はそのままに、さやかたちは樹神社に戻る。現れた楓の姿を見て、葵は涙が止まらなくなってしまった。どうしてかわからなかったが、楓を見ていると哀しくなってくるのだ。

その後、美咲によって五色封印の説明がされたとき、葵の意識は闇へと落ちてしまう…。再び意識が戻ると、朝日が昇る前の境内にいた。

『あら…、早いわね』

先に掃除をしていた美咲を見て、さやかは少し驚いた。そんな感情の変化も、葵の心に伝わってくる。さやかが葵のことを訊ねると、美咲は自分の姉だと答えた。

社の中に入ったさやかが祭壇の戸を開くと、彼女の愕然とした意識が流れ込んでくる。

『朱に続いて、濃緑の封印が破られました…』

さやかは、ヒビの入った玉を見て、全身が震え出した。

(このままでは、“青金神ラピスラズリ”の封印が破られてしまう！)

その瞬間、さやかの意思に弾き飛ばされるように、葵は闇の空間に戻された。

闇が徐々に明るくなる。目の前には、いくつもの映像が浮かんで消えていく。湖に漂う無数の発光体。巨大な石碑に佇む霊体の少女。禍々しい姿をした退魔師の怨霊。そして、巨大な水晶に包まれている自分自身。それらの映像が重なり合い、葵は眩い光りの渦のみ込まれた。

ゆっくりと瞳を開く葵…。そこは、樹神社の社であった。祭壇に目をやると、三つめの玉にヒビが入っている。それを見たとき、

葵はすべてを思いだした。

『わたしは、樹神の退魔師…。樹神さやか!』

葵が叫ぶと、全身から退魔の力が溢れ出す。その力は、優子の天空力に負けないほど高まっていた。

優子の言葉に、楓たちは驚く。記憶が戻ったとは、どういうことなのだろうか…。

『楓…、落ち着いて聞いて…』

葵は、驚く楓に優しく微笑みかけた。

『ここにいる優子さん、美咲ちゃんにアリスさま…。わたしたちは、二十年以上前の未来からやって来ました…』

すべてを思いだした葵は、楓たちに真実を告げた。

「なっ! さやか…、何を言ってるんだ?」

恭介は、あることに気づいて狼狽する。

「未来つて…。おまえの姿は…」

さやかと会うのは久しぶりだが、それでも二十年後の姿とは思えない。

この世に留まっているような霊は、よほどの例外を除き、死の間を迎えたときの姿をしている。それを考えると、さやかの死期はそれほど先のことではないのかもしれないのだ。

「お、お姉ちゃん…」

楓も、恭介と同じことを考えていた。

『楓…』

葵は、瞳をつむって苦笑する。

『生きているわたしがあなたと会う機会は、もう無いでしょう…』
想像通りの内容に、楓の身体がガクガクと震え出す。

『この時代のわたしに代わって言うておきます…。あなたを一人にしてしまつて…。本当にごめんなさい…。』

葵の瞳には、うつすらと涙が浮かんでいた。

「うつ…、お姉ちゃん…!」

楓は、その場に泣き崩れる。姉の死という事実を、わけもわからず、ただ受け入れなければならぬのだろうか。

葵は、楓の肩に手を置こうとする。しかし、霊体である彼女には、楓を抱きしめてあげることができなかつた。

「葵さん……」

優子が落ち込むように頂垂れる。そのとき、何かが弾けたような音が聞こえた。

「まさか！」

嫌な予感を覚えた恭介が、社の中に飛び込む。再び現れた恭介の顔は、真っ青であつた。

「濃緑、山吹、藤紫の封印が破られている……。残りは、藍の封印のみ……」

恭介は、樹神社の裏側……。森に囲まれた川の上流を睨みつけた。『藍の封印だけでも護らなければなりません……。急ぎましょう……』

葵は、キリツとした表情で立ち上がる。最後の封印が破られることは、なんとしても阻止しなければならないのだ。

一瞬の隙をつき、怨霊が山吹の封印に飛び込む。怨念を高めた手を突き出すと、山吹の地で怨霊を鎮めていた石碑は、真っ二つに割れてしまつた。

さやかは、傷ついた身体を強引に反転させ、退魔の力を付加させた短剣を振り下ろす。放たれた退魔の刃が怨霊に迫る。だが、怨霊の姿は、溶けるように地面へ消えてしまつた。

「ちっ……」

さやかは、苦しそうな表情で岩壁にもたれかかる。左肩が大きく裂け、右太股にもかなりの斬り傷があつた。樹神の装束を着た怨霊に、まんまと封印を破られたのだ。

割れた石碑から、煙のような靄が立ち昇る。それは、徳の高い神官の霊であつた。

その途端、辺りの気配が一変する。陰気な気配が場を包み、無数

の死霊が地中から湧き出てきた。さやかは、退魔の力を高め、死霊を薙ぎ払う。しかし、数が多すぎるため、すべてを祓うなど不可能であった。

死霊らは、さやかに構わず、上空へ逃れる。何かに惹きつけられるように漂い、樹神社の方角を目指した。

「はあはあはあ」

さやかは、肩で大きく息をしながら、その場に崩れ落ちる。

「残る封印は…、あと一つ…」

山吹の封印を護れなかった悔しさに、さやかは奥歯を噛み締めた。「それにしても…、あの怨霊はいつたい…」

さやかは、あらためて怨霊の姿を思いだした。

怨霊は、相当古い霊のようで、樹神の退魔師の衣装を纏っていた。つまり、封印を護るはずの樹神一族が、今回の事件を起こしていることになるわけだ。

いまのさやかでは、太刀打ちできないかもしれない…。怨霊の力は、それほど凄まじいものであった。

別れ間際に聞いたアリスの言葉が、さやかの脳裏に浮かんできて。「さやかさん。封印が破られちゃっても、絶対に深追いしちゃダメだからね…」

もちろん、聞き入れることのできる提案ではなかった。

身体を起こしたさやかは、ゆっくりと立ち上がる。そして、片足を引きずるように歩き始めた。

「あの怨霊なら、最後の封印を破るのは時間の問題ね…」

さやかは、山吹の洞窟に入り、石碑の裏側を調べる。意識を集中させると、微かな風が感じられた。

突き当たりの壁には、亀裂が見られる。さやかは、短剣の柄を壁に叩きつけた。

乾いた音が響き岩壁が崩れ落ちると、さらに奥へと続く空間が現れる。さやかは、備え付けられていた松明に火を点した。

洞窟内の壁が暖かな光で照らされる。どうやら、かなり先のほう

まで繋がっているようだ。

「目的地に先回りして…、必ず被ってみせる！」

強い意志と共に、退魔の力が高まる。さやかは、紅柱石の地下に広がる洞窟を進み、五色封印の中心にある“青金神の祠”を目指した。

第19話 リウムとトルマリン 歴史的和解！？

現代の樹神社では、時空間転移によって飛ばされた美咲の代わりに、セリアが竹ぼうきで境内を掃除していた。

そこに、石段を登ってきた中年の男女が現れる。セリアが掃除している姿を見て、女性はかなり驚いているようであった。

「あ…。いらっしやいませ…」

セリアは、苦笑しながら頭を下げる。参拝に来た相手に“いらっしやいませ”ではどうかと思ったが、さすがに無視をするわけにはいかないだろう。

「えっと…、飛鳥ちゃんのお友だちのかたですね」

女性は、につこりと微笑みを浮べる。セリアが呆然としていて、二人は自己紹介を始めた。

「わたしは、美咲の母親の樹神楓…。そして、夫の恭介です」

楓たちは、近くの街に出没した魔を祓い終え、樹神社に戻ってきたのだ。

「あつ、美咲ちゃんの御両親！」

セリアは、納得して頷いた。

「はじめまして、わたしは飛鳥さんと仲良くさせてもらっているセリアと申します。このたびは、たいへんお世話になっております」

セリアの上品な態度に、楓は面食らってしまう。さすがは、精霊界のお姫さまである。

「ところで、美咲の姿が見えないようですが…」

楓は、辺りを見回して美咲の姿を捜す。お客様に掃除をさせているなど、楓は呆れて大きなため息をついた。

「美咲…ちゃんですか…。じつは…ですね…」

セリアが困っていると、時の指輪を無効化して元の姿に戻ったシヨウが現れた。

「ふう…、やっと戻れた…って。あ…、おはようございます」

天使のような微笑みを浮べるシヨウに、楓たちはどぎまぎしてしまふ。セリアに美咲の両親だと聞かされ、シヨウはにっこりと頷いた。

すると、楓の動きが固まってしまふ。何かを思いだしたのか、シヨウを指差して大きく叫んだ。

「ゆ、優子さんっ!」

楓の叫びに、恭介もハツとする。

「そ、そんな…。あれは、わたしが中学の頃の話で…。もしかして、優子さんの“娘さん”?」

その問いかけに、シヨウの顔は引きつった。

「オレの名前は、如月翔です…。で、その優子って子のお話を、もう少し詳しく聞かせていただけませんか?」

シヨウの予想だと、楓が言っているのは間違いなく優子のことである。楓の話聞くことで、時空間転移で飛ばされた優子たちの情報かわかるかもしれなかった。

「は、はい…」

楓が説明しようとしたとき、隠れるようにシヨウの身体にしがみ付いている女の子に気づいた。

「まあ、かわいい　あなた、お名前は…」

楓は、しゃがみ込んで女の子と視線を合わせる。優子のことなど、すっかり頭から抜け落ちていた。

女の子は、楓たちに警戒していたが、頭を撫でられて安心したのか、無表情に微笑んだ。

「りうむ…」

リウムは、お尻から出ている尻尾を軽く振った。

「えっ…」

楓は、リウムの頭に、獣のような耳があることに驚く。獣耳に尻尾だけでも普通ではないのに、リウムの額には真っ赤な石がへばり憑いていた。

そのとき、何かに気づいたのか、リウムが後ろを振り向く。神社

裏の森を凝視し、低い唸り声を上げる。額に憑いた石が輝き出し、突然の魔獣化が始まった。

大型肉食獣の数倍はあろうかという魔獣となったりウムは、闇の霧を発生させて忽然と姿を消してしまふ。

異様な出来事に、ただ呆然とする楓…。シヨウは、そんな光景に、苦笑するしかなかった。

大きな樹の枝に、一人の少年が座っている。シヨウたちの様子を窺うようにしている少年は、昨晚、海水浴場で優子たちが怨霊を祓うのを見ていたあの少年であった。

「やれやれ…」

少年は、大きなため息をつく。

「怨霊騒動を起こさせたかとおもえば、今度は監視するだけにしろだなんて…。リアンさんは、いったい何を考えてるのかな…」

少年は、ムツとして頬を膨らませた。

リアンは、時空間転移で優子たちを過去へと飛ばしてしまう。これでは、怨霊を活性化させたとしても面白くはない。少年は、玩具を取り上げられた子どものように剥れていた。

「なっ！」

危険を察した少年は、逃げるように身体を投げ出す。その瞬間、巨大な爪が振り下ろされ、少年のシャツが引き裂かれた。

逃げるのが少しでも遅かったら、少年の胸は抉られていただろう。地上に降り立った少年は、冷や汗をかきながら、爪の振り下ろされた位置を確認した。

そこには闇の霧が発生しており、中から真つ赤な三つ目をした巨大な魔獣リウムが現れた。

「がああああ！」

リウムは、怒声を上げて、殺気を込めた瞳で少年を睨みつける。「とるまりん…、殺す…」

リウムの怒りに応じて、場の魔力は一気に膨れあがった。

少年は、引き裂かれたシャツを見た。素肌があらわとなっており、胸元にはリウムと同じような青い宝石が憑いている。

「ボクは、トルマリンだけど、トルマリンじゃないよ……」

普通なら心臓が停止してもおかしくない殺気を、少年は軽やかに受け流す。

「ボクの名はインディコライト。インディって呼んで欲しいな」
「余裕の現われか、インディと名乗った少年は、にっこりと微笑んだ。」

もちろん、リウムに納得できるはずがない。少年から発せられる気配は、トルマリンの魔石を憑けた魔族ガーティスと同じ……。そう、五千年前の精霊界で、前世のリウムを殺したトルマリンと同じ気配をしていたのだ。

「ねえ……お姉ちゃん。もしかして、ボクの所為で魔石に戻っちゃったこと、怨んでるの？」

インディは、敵意を剥き出しで突っ込んでくるリウムに問いかけた。

鉱物生命体である暗黒族は、本体である暗黒石を砕かれない限り死ぬことはない。肉体が亡んでも、魔石の状態で他の生命体に寄生し、成長することで暗黒族として復活する。

しかし、魂の情報は引き継がれるが、生きていたときの記憶は失われてしまう。それは、死と同意であり、前世のリウムはトルマリんに殺されたといえた。

ただし、目の前の少年は、五千年前に存在していたトルマリンではない。彼もまた、過去に飛ばされたショウとアリスに倒され、現代において魔族ガーティスに寄生して復活した暗黒族であった。

「ちょっとだけ言い訳させてもらえないかな……」

リウムの激しい攻撃をかわしながら、インディは苦笑する。リウムの実力では、どう足掻いてもジュエルナイトに敵うはずもなかった。インディは、申しわけなさそうに呟く。

「あの頃のボクは、たくさん暗黒族を取り込み、邪悪な意思に支

配られていて……」

だが、リウムは聞く耳持たなかった。

「ちよつと、お姉ちゃん。聞いてるの？」

このままでは埒が明かない。インディは、手加減しながらも、反撃に出ることにした。すると、なぜかリウムの動きがピタリと止まる。

「……………」

リウムは、インディの存在を忘れたかのように、無防備に立ち尽くす。

なんともいえない重苦しい空気が辺りを包み込む。

「お、お姉ちゃん……？」

インディは、大汗をかきながら問いかける。リウムの殺気は、嘘のように消えていた。

何かの作戦かと警戒していたインディだったが、リウムは頂垂れながら情けない声を上げる。

「……おなか……へった……」

その途端、リウムのお腹がぐうぐうと鳴った。

インディは、豪快にずっこけてしまう。どうやら、朝食を食べていないという魔力戦をやらかしたので、激しくお腹が減ってしまったようだ。

啞然とするインディ……。リウムは、戦う意思を完全になくしたようである。

「え……つと……。ボクの家にご飯……食べにくる？」

インディが恐る恐る確認すると、リウムはゆっくりと顔を上げた。目を丸くして、何かを期待するような表情をする。軽く尻尾が振られているので、喜んでいるみたいだ。

大きなため息をもらし、インディは紅柱石の中心に向かって歩き出す。リウムも、当然のように、その後を追った。

「この近くに、ボクがお世話になっている家があるんだ」

インディは、平然と魔獣リウムに喋りかける。

「瑠璃お姉ちゃんにお願いして、何か作ってもらうね」

その言葉を聞いたリウムは、激しく尻尾を揺らした。

その後、紅柱石の街では、ちょっとした騒ぎが起こる。小さな子どもその後ろを歩く巨大な獣は、昨晚のニュースで騒がれていた狼型の魔獣だったからだ。

第20話 魔王ブライとは シリーズ1のラスボスです

精霊界にやって来た美咲たちは、契約できる仲間を捜して、それぞれの聖界をさまよっていた。

第三聖界アイオライト、第二聖界カーネリアンと回ってみるも、思ったような相手が見つからない。さやかが一人で五色封印に向かっていることを考えると、あまりゆっくりしているわけにもいかなかった。

第一聖界スフェーンは、精霊界の中でも魔族との戦いが激しい聖界である。戦力の差は歴然としており、精霊族の敗北は必至…。数ヶ月後には、魔王に支配されることが予想された。

そんな聖界で、美咲たちは今、なぜか数万もの魔王軍と対峙していた。魔王軍は、どうやらスフェーン最大の都市アクロアイトに、総攻撃をしようとしていたようである。

「あああ…、アリスさん？」

美咲は、恐怖に震えながらアリスにしがみつく。話にしかなかったことのない魔族や魔物が目の前にいる。美咲は、なぜこんなことになったのか、さっぱりわからなかった。

魔王軍は、魔族を中心にレベルの高そうな魔物で構成されている。一体一体が強大な力を持っていることは、美咲にも直感的に感じ取ることができた。

「小娘ども…、そこを退け」

禍々しい鎧に身を包んだ一人の魔族が美咲たちの前に進み出る。

アリスが何も答えないことに、魔族は怒りの声を上げた。

「ただちに立ち去れば見逃そう…。そこを退け！」

魔族は、殺気を込めた視線でアリスを睨みつけた。

心臓が鷲掴みされたように感じる。美咲は、涙を流してガタガタと震えた。

「アリスさん！」

美咲がアリスの身体を揺らすと、彼女の口からとんでもない言葉が出た。

「はあく……。強そうな魔族か魔物を見繕って契約しようと思ってたけど……。ほんと、“雑魚”ばかりね。」

やれやれといったように、アリスはため息をつく。その言葉に怒ったのだらう、魔族は無言で抜刀した。

「やめなさい……。あなたたちでは、あたしに勝てない……」

今度は、アリスが魔族を制する。それが魔族の逆鱗に触れてしまった。

「では、キサマの力とやら、見せてもらおう！」

魔族の号令により、魔物たちが美咲たちに襲いかかった。

「いやあああつ！」

魔王軍に囲まれた美咲たちに逃げ場はない。美咲は、確実な死を覚悟した。

「えっ？」

突然の浮遊感に、美咲は瞳を開く。周りは青一色……。魔族の影も形もなかった。

「アリスさ……」

そのとき美咲は、自分が異様な状況に置かれていることに気づいた。

「う……そ……」

美咲の身体が信じられないスピードで落下をはじめ。美咲は、アリスによって、上空に投げ飛ばされていたのだ。

「わぎやあああー！ー！ー！」

悲鳴を上げる美咲……。地上では、アリスの一方的な戦いがはじまっていた。

左手だけになっている手袋を外し、甲を胸の位置に構える。アリスの左手には、シヨウと同じ“アウインの紋章”があった。

アリスは、左手をおもいきり振り下ろす。すると、前方の空間

にアウインの紋章が浮かび上がり、眩い光を放ちながらアリスの身体を包み込んだ。

光が収まると、独特な風の鎧を纏ったアリスが現れる。アリスは、虚空から聖剣クリソベリルを取りだし、群がる魔物の中に躍り出た。「なっ！」

魔族は、その事実には驚愕する。アリスの精霊力は、精霊神と間違えるほど強力であったからだ。

強大な相手に、力押しでの戦いは無駄である。魔族は、態勢を整えるため、一時撤退を命じた。だが、それも遅すぎたと魔族は思い知らされる。

次々と魔物に止めを刺すアリスは、まさに疾風のようなものであった。アリスの格闘剣術は、力で敵を薙ぎ払うものではない。シヨウと同じく、舞うように華麗で、確実に急所を狙う剣術だ。

複数の敵が同時に襲ってこようが、アリスには関係なかった。もともとラルドの教える格闘剣術は一对多を前提としており、そんな戦いにシヨウとアリスは無敗を誇っていた。

魔物の数は、信じられないスピードで削られていく。戦いの号令をかけた魔族は、そのことを後悔していた。

「…いやああー！！」

まっ逆さまに落下する美咲は、ただ悲鳴を上げるしかなかった。

地面に激突する寸前、アリスが美咲を受け止める。

「お帰りなさい」

腰が砕けている美咲をしっかりと立たせて、アリスはにっこりと微笑んだ。

「し…、死んじゃうよ…」

美咲の目からは、まるで漫画のように滝の涙が流れた。

勝敗は、目に見えて明らかである。一分にも満たない間に、数万を誇った魔王軍が十分の一になってしまった。魔族にしてみれば、悪夢のような出来事であった。

「キサマは…、いったい…」

魔族が震えながら問いかける。たとえ十倍の軍隊で挑んでも、勝てる気がしない。いや、目の前の少女からは、仕えている魔王以上の強さを感じるのだ。

「それは…、秘密です」

アリスは、人差し指を口元にもってゆく。その悪魔の微笑に、魔族は底知れぬ恐怖を感じた。

「さて…、ケン力を売られたからには黙ってられない…。美咲…、いまから魔王城まで行って、ブライに直接文句を言うわよ」
アリスは、もの凄く嬉しそうに叫んだ。

魔王軍の悪夢は続いていた。城壁を護っていた魔物を蹴散らし、二人の少女が城内に突入してくる。その強さは非常識…。いってしまえば、めっちゃくちゃであった。

魔王直属の最強魔族が立ち塞がる。それでもアリスは止まることがない。最強魔族は、冗談のように遙か彼方へぶっ飛ばされた。

数多くの戦いを経験して成長したアリスには、通常の魔族では相手にならない。まして、大魔王ザーヴァの三魔王ブライに仕える魔族など、物の数には入らなかった。

アリスは、難なく魔王城の最上部…。魔王ブライのいる王座へとやってきた。

「ほお…。まさか、お前のような小娘がここまでたどり着こうとは…」

一人の魔族が王座についている。その魔力は強大で、これまで戦ってきた魔族とは、明らかに桁が違っていた。

「あのっ！…、こんなことやってる場合じゃ…」

美咲は、ブライの威圧に身震いしながら呟く。

記憶に間違いがなければ、美咲たちは仲間を求めて精霊界にやって来たはずである。それが、なぜ魔王と対峙しなければならないのだらうか…。アリスが強いのはわかるが、美咲は一般人である。精霊界と魔族の戦いには、まったく無関係なのだ。

美咲は、ブライの眼光から逃れるように身を竦ませる。アリスは、美咲を庇うようにブライを睨みつけた。

「この時代の魔王軍って、けっこう戦力があつたのね。」
アリスは、シヨウと初めて出会った五歳の頃を思いだす。シヨウとスフェーンを冒険したときは、これほどの戦力が揃っていなかったはずだ。あれほどの大軍でアクロアイトを侵略しようとしていたなど、アリスにも驚きの事実であった。

「ま、あたしには、どうでもいいことなただけど…」
アリスは、ブライから視線を逸らすことなく呟いた。

魔王ブライは、アリスをジツと観察する。どうやら妖精族である少女は、数年前まで存在していた精霊神ファロールに匹敵する精霊力を持っていた。

これほどの実力者なら、いままでも何らかの情報があつたはずである。それがなかったということは、彼女が無から現れたとしか考えられない。

「それで…、何用だ？」

ブライは、憎々しく問いかける。この状況を考えれば、自分を倒しに来たのだろう。アリスの力はブライを遥かに超えており、戦いとなれば確実に殺されてしまう。だが、ブライにも魔王としてのプライドがある。ブライは、平静を保ち、アリスを睨みつけた。

「ふふっ　そう構えないで。あたしたちは、べつに戦いに来たわけじゃない…」

アリスがにっこりと微笑む。そして、充分な間をあげ、本題を切り出した。

「と、いうわけで、　あんだ、この子と契約してあげてよ。」

アリスは、身体を押し出すように美咲を紹介した。

ピシッ！

すべての動きが固まる。まるで、リアンによって時が止められたかのように、誰も動こうとしない。いや、思考すら止まっていただろう。

「あ、あの…、アリス…さん？」

カクカクした動きで、美咲が問いかける。まさか、魔王ブライと仲間の契約をしようとしてもいっのたるうか…。美咲が見つめると、アリスの顔は呆れるほど真剣であった。

「で…、どうなの？」

アリスが最後の確認をする。人を小バカにしたような微笑み…。

アリスは、リアンやラルドと同じ微笑みをしていた。

「断わる！」

王座には、ブライの怒声が響き渡る。この瞬間、魔王ブライとの交渉は決裂した。

第21話 天空の守護竜 その名はビジョンブラッド

「いや、さすがに魔王との契約は難しいか」
街道を歩きながら、アリスは苦笑気味に呟く。

この一発ギャグを成功させるため、アリスはわざと魔王軍にケンを売ったようだ。その結果、魔王軍は壊滅的なダメージを受け、スフェーンの完全支配が十数年は延びたとされた。

「はあ……」

美咲は、大きなため息をつく。出会って三日しか経っていないが、アリスの性格は十分に理解できた。

「そんなことより……。そろそろ戻らないと、さやかさんが心配です……」

こうしている間も、さやかは五色封印を護るために戦っているはずだ。あまりのんびりとしているわけにはいかない。

「そうね……。契約ができなかったのが心残りだけど……」

アリスは、ガツクリと頂垂れる。だが、落ち着いて考えてみれば、当然のことであった。

退魔の力を持たないのであれば、武術や剣術の達人と契約するのが望ましい。アリスは、そのような相手を捜していた。しかし、自分を基準としていたことがそもそもの間違いである。

あのシヨウですら、霊体を被うことはできなかった。シヨウやアリス以上の達人でない限り、あまり戦力にはならないと思われる。そんな相手など、この時代の精霊界には皆無である。つまり、アリスが求めるような仲間とは、捜しても見つかるはずがなかった。

二人が落胆しながら歩いていると、険しく聳える山が見えてきた。アクロアイト地方の外れにあり、頂上に大魔法使いが住むと噂されるトエル山である。

「ふう……。ダメもとで当たってみるか」

アリスは、複雑な表情で呟く。できれば関わりたくない相手がト

エル山には住んでいるのだ。

「美咲は…、ここで待ってね。」

そう言うと、アリスは猛スピードで走り出す。残された美咲は、呆然と立ち尽くすしかなかった。

「ひ、一人にしないでくださいよ…。」

美咲は、不安に押し潰されそうになる。

退魔師としてなら自信を持っていたが、精霊界では勝手が違ってくる。美咲程度の力では、その辺りの魔物ですら対抗できるかわからない。アリスたちが怨霊を祓えないように、魔物との戦いなど美咲には専門外であった。

身震いを感じていると、途端に獣の遠吠えが聞こえてくる。美咲は、逃げるように、森の中へ身を隠そうとした。

「待ちなさい…。森に入るのは、かえって危険です…。」

いつからそこにいたのだろう…。一人の女性が美咲に近づいてくる。雰囲気ごとくなくシヨウや優子に似ている、美人なお姉さんであった。

「あ…。え…つと…、こんにちは。」

美咲は、慌てておじぎをする。異世界の住人と会話するのは緊張したが、今は誰かと一緒にいる安心感のほうが強かった。

女性は、無言で美咲を見つめる。美咲が大汗をかいていると、何かに納得したのか、女性はにっこりと微笑んだ。

「あなたが美咲ちゃんね…。話はラルから聞きました…。」

どうやら女性は、美咲のことを知っているようである。

「仲間を捜しているみたいだけど…、いい契約は結べた?」

女性は、美咲たちの成果を確認する。美咲が否定すると、女性は懐から何かを取り出した。

それは、血をイメージさせる鮮やかな赤色をした一つの宝石…。

女性は、その宝石を美咲に手渡す。

「す、す…いい!」

美咲は、宝石から溢れ出るように感じられる力の強さに驚愕した。
「これって、契約石？」

信じられないが、宝石は凄まじい力を持つ者の契約石であった。
「天空の守護竜ピジョンブラッド…。きっとあなたの力になってくれるはずです…」

女性は、にっこりと微笑んだ。

「ただ…、三千年も眠り続けているから、寝起きは悪いかもしれないけど…」

なぜか、女性の歯切れは急に悪くなる。

「さ、三千年…ですか？」

美咲は、おもわず呆れてしまう。守護竜なのに、三千年も眠っていたら勤めが果せないのではないだろうか…。美咲は、あらためて契約石を召喚の腕輪に付けてみる。すると、元から付けていた契約石がすべて外れてしまった。

召喚の腕輪は、契約石ポイントが十から五十へとアップしている。それでも真つ赤な契約石は、全てのポイントを必要とするようだ。

契約石ポイントと召喚される者の力は比例している。つまり、ピジョンブラッドとは、とてつもなく凄い竜であることが予想された。
「それじゃあ…。わたしは、あの子が戻ってくるまえに消えておきますね…」

女性は、満足そうに頷き、ゆっくりと立ち去ろうとした。

「あのっ！ ま、待ってください…」

美咲は、慌てて女性を呼び止める。なぜ契約石を持っているのか…。どうして、自分に渡すのか…。聞きたいことはたくさんあった。しかし、美咲は一番単純な質問を口にしていた。

「あ、あなたのお名前は…」

自分でも間抜けな質問をしたと思ったのだろう。美咲は、真つ赤な顔をして苦笑した。

意外な質問に、女性も驚く。まったく予想していなかったのか、女性は腕を組んで考え込んでしまった。

「そうね。わたしのことは…、綾菜…とでも呼んでください」
まるで、つい今しがた思いついたように呟く。美咲が呆然として
いると、綾菜は逃げるように立ち去っていった。

綾菜と入れ替わるように、トエル山へ向かっていたアリスが戻っ
てきた。

「あははっ、“ふざけるな”って怒られちゃった」

アリスは、苦笑しながら、交渉が上手くいかなかったことを報告
する。

「ん…、どうしたの？」

美咲が嬉しそうにしているのを見て、アリスは小首を傾げた。

「アリスさん、見てください」

美咲が袖をまくと、召喚の腕輪に赤く輝く大きな契約石が付い
ている。その契約石からは、かなり強大な力が発せられていた。

「じつは、綾菜ってお姉さんから、この契約石をいただいたんです
」

それを聞いたアリスは、石像のように固まってしまった。

「あ、綾菜…さん？」

アリスは、小声でぶつぶつ呟く。美咲が出会ったのは、あの綾菜
なのだろうか…。

如月綾菜…、なにを隠そうシヨウと優子の母親である。もちろん、
ただの人間族ではない。彼女の正体は、背中に翼のある天空族…。
奇数月九月の宝石騎士サファイアであり、天空界の神という立場で
あった。

数万年を生きている彼女が現れたとしても、なんら不思議ではな
い。ただ、なぜ綾菜が美咲のことを知っていたのだろう。

「で…。その契約石って、何が召喚できるの？」

アリスは、重要なことを質問した。

力の強い何か召喚されるのは間違いないだろうが、まったく役
に立たない可能性だって考えられる。召喚される何か、理性を持

たず力の加減が出来ない狂戦士だった場合……。いかに強くても、己の力を制御できないのであれば意味はない。

もう一つは、召喚できる何か、必要以上に巨大だった場合……。街中で召喚することを考えると、最大でもリウムぐらいの大きさが理想だった。

「天空の守護竜……って言うてましたから、竜が召喚できるんだと思います……」

美咲は、難しそうな顔をしているアリスを見つめる。それほど深く考えていない美咲には、アリスが何を悩んでいるのかわからなかった。

「紅柱石へ戻る前に、一度召喚してみましよう……」
色々な可能性を踏まえて、アリスは提案した。

そんな提案に美咲は驚いたが、アリスの真剣な表情を見て何かを感じ取る。瞳を瞑って腕輪を構え、召喚に必要な巫力を高めた。

辺りは異様な空気に包まれた。腕輪によって巫力が時空力へと変換され、美咲のいる空間と対象のいる空間が繋がる。それを感じ取った美咲は、息を大きく吸い込んだ。

「出でよ、天空の守護竜……」
瞳を開き、美咲が叫ぶ。

「ピジョンブラッド！」
名前を口にした瞬間、空一面に魔方陣のような図が浮かび上がった。

「う……そ……」
美咲は、その大きさに言葉を失ってしまう。魔方陣の大きさから考えて、ピジョンブラッドとは、紅柱石を覆い尽くすほど巨大と思われた。

「やっぱり……」

空間干渉の影響で暴風が吹き荒れる。アリスは、予想通りの結果に苦笑するしかなかった。だが、落胆は驚きに変わる。魔方陣はあるものの、天空竜はいつこうに現れないのだ。

そうこうしていると、魔方阵が消えてしまい、召喚の儀式も終了してしまう。

「あれ？」

美咲は、召喚の腕輪を見つめた。召喚者が現れないなど、これまでになかったことである。再び空を見上げると、小さな点が美咲目掛けて落下してきた。

「わきゃっ！」

危険を感じた美咲は、頭を庇いながらしゃがみ込んでしまう。その瞬間、美咲の頭上に、柔らかなタオルのようなものが覆い被さった。

「はい？」

美咲の頭には、ふさふさの毛並みをした、温かな何かがへばり付いている。

「もしかして…、それが天空竜？」

アリスは、啞然としながら天空竜を指差す。それは、どこからどう見ても、かわいい仔猫のようにしか思えなかったからだ。

第22話 真の姿にびっくり 伝説のねむり猫

美咲は、頭に乗っかっていた天空竜をゆっくり降ろす。

「かわいいですね…」

美咲が率直な感想を呟くと、ピジョンブラッドと思われる仔猫は大きなあくびをした。

「なんだこいつ…」

アリスは、仔猫の頭をぐりぐりとつつく。すると、仔猫は眠そうな瞳でアリスを見つめた。

「あの…。やめていただけませんか？」

仔猫は、アリスの攻撃を受け、迷惑そうに呟いた。

なんとも間抜けな反応に、アリスと美咲は啞然とする。だが、言葉を操ったことで、この仔猫がピジョンブラッドであると確信を持てた。

「あ～～～っ。どうして竜族ってやつは、こうかわいいやつが多いかな…」

アリスは、最近になって如月家にやって来たアクアマリンを思いだしていた。

アクアは、精霊界の聖獣…、光竜の幼体である。

光竜形態では魔獣化したリウムと同じぐらいの大きさだが、普段は仔犬のような姿をしている。そのかわいい容姿からペットのように扱われているが、知能や戦闘能力はずば抜けて高かった。この仔猫にしか見えないピジョンブラッドも、姿だけで判断してはいけないのかもしれない。

「ふにや～～～あ…」

ピジョンブラッドは、再び大きなあくびをした。美咲の胸に抱かれ、すやすやと寝息をたてる。

「って、寝るなー！」

アリスは、ピジョンブラッドを美咲から奪い取り、地面に叩きつ

けた。

さすが猫の姿をしているだけのことはある。ピジョンブラッドは、瞬時に態勢を整え、軽やかに着地する。そして、そのまま崩れ落ちるように眠ってしまった。

「……………」

言葉を失うアリス…。

「たぶん、役に立たないよ。これ…」

ピジョンブラッドを指差し、無表情な顔で美咲を見つめた。

「かわいいから、問題ないです」

美咲は、ピジョンブラッドを抱き上げる。このかわいさは、美咲が別に契約している、河童の“か〜くん”に匹敵していた。

人間界に戻った美咲たちは、超速飛行で紅柱石に向かっていった。

紅柱石に近づくほど高まる魔に、美咲は身震いを感じる。新たに封印が破られたのは、まず間違いないだろう。

封印が破られたということは、死霊が鎮められないだけでなく、今まで封じられてきた怨霊や悪霊が解放されてしまったことになる。そうなれば、紅柱石は死霊の群がる地となってしまうのだ。

「アリスさん、急いで！」

美咲は、継るように懇願した。それを聞いたアリスは、飛ぶスピードを上げる。美咲の気持ちは、アリスにも痛いほどわかっていた。ただし、ピジョンブラッドはのんきなものである。ピジョンブラッドは、美咲の懐に入り、頭だけ出した状態で眠りつつづけていた。しばらくすると紅柱石が見えてくる。紅柱石の上空には暗雲が広がり、たくさんの死霊が漂っている。まさに、今朝と同じような光景が広がっていた。

中でも、樹神社の状態は異様である。すべての死霊は樹神社を目指しており、御神体が祀られている社など、霊が密集して建物の形すらわからなかった。

アリスは、死霊の群れに突入し、強引に境内へ降り立つ。

「このっ！」

虚空より取り出した聖剣クリソベルルで、迫ってくる死霊を一閃する。霊体に近い存在となったアリスには、死霊を斬り裂くことができた。しかし、被うまでの力は無く、死霊はたちまち元の姿へと戻ってしまふ。

「ちっ！」

やはり、死霊を被うことができるのは、退魔の力を持った退魔師だけのようだ。

「はぁーっ！」

美咲は、退魔の力を練り上げ、一気に解放する。退魔の力は、美咲を中心に広がり、死霊たちを霧状の粒子に変換させた。だが、死霊の数が多すぎて、焼け石に水のようにであった。

「このままじゃ！」

アリスは、状況を見誤ったことに後悔していた。消滅しきれない死霊は、アリスではなく美咲に集りはじめたからだ。

「美咲！」

いくつもの死霊が、退魔の力をかわして美咲に憑こうとする。アリスは死霊から美咲を護ろうとするが、もはやすべてが遅すぎた。

「うっ！」

美咲が悲痛な声を上げる。憑かれた箇所は激痛が走り、斬り裂かれたかのような赤い傷痕が浮かび上がる。美咲は、必死に退魔の力を高め、己の中から魔を被おうとした。

「あの……。もしかして、こいつらを被おうとしてるんですか？」

死霊に纏わり憑かれうんざりしたのか、ピジョンブラッドがゆっくりと目を覚ます。ピジョンブラッドは、まったく慌てた様子もなく辺りを見回した。

「こんな低級霊を相手にてこずっているようじゃ、まだまだですね。」

装束から這い出したピジョンブラッドは、美咲の肩に乗り、集ってくる死霊を睨み付ける。内なる天空力を解放し、美咲に群がる死

霊を、一瞬で被ってみせた。

美咲が咳き込むようにうづくまる。憑かれた死霊も被われたので、命に別状はなさそうだ。

石畳に降り立つピジョンブラッド…。悠然としているものの、やはり眠そうであった。

『へえ〜…。なかなかやるじゃない、ねむすけ』

アリスは、意外な戦力に驚く。

『にしても…、天空力が有効だったなんて…』

天空竜というだけあって、その天空力はかなりのものであった。

「ね、ねむすけ…?」

ピジョンブラッドは複雑な表情をする。ねむすけとは、愛称なのだろうか…。

『ねむすけ…、こいつら被うことができる?』

アリスは、死霊を警戒しながら問いかける。ちらつと横目で見ると、ピジョンはうとうととしていた。

『だから、寝るなあー！』

アリスの叫びに、ピジョンはハツとする。怒ったアリスは、死霊を警戒することも忘れ、ピジョンの頭を鷲掴みにして睨みつけた。

『寝る前に、この状況をなんとかしなさい…』

アリスの迫力に恐怖したのか、ピジョンは泣きながらガタガタと震える。

解放されたピジョンは、大慌てで死霊の前に立つ。四つ足でふんばり、背中から鳥のような翼を出現させた。地面を蹴り、翼を羽ばたかせる。そして、まるで獲物を狙う猛禽類のように、死霊の群れに突っ込んでいった。

「と、飛んだ！」

猫に翼が生えて空を飛ぶ。そんな異様な光景に、美咲は啞然とする。もちろん、ピジョンブラッドは天空竜であって猫ではないのだが…。

樹神社に集まっていた死霊は、ピジョンによって抜われる。けつして特別なことをしたわけではない。ピジョンは、天空力を高めながら飛び回っただけなのだ。それでも、紅柱石の上空には、まだまだ死霊が漂っていた。

「しかたないですね…」

ピジョンは、上空へと昇っていく。暗雲に突っ込み、内なる力を開放させた。

何かが弾けたような衝撃が起こり、眩い光が発生する。陰気な暗雲が消滅し、広がる青空には太陽のように輝く光の塊が浮いていた。光からゆつくりと翼が伸び、紅柱石を覆いつくすほどの大きさとなる。その姿は、伝説に残る想像上の瑞鳥、鳳凰のような美しさであった。

「なぁー！ー！ー！」

驚愕した美咲は、大きな奇声を上げる。雄大に浮ぶその姿は、まさに天空竜に相応しいものがあつたからだ。

ピジョンから美しい音色が聞こえてくる。それに伴い、淡い光が紅柱石を覆いつくした。その瞬間、紅柱石に漂っていた死霊は、一気に抜われるのだった。

「マジですか…」

アリスは、ピジョンの天空力に唾然とした。信じられないことに、ピジョンは天空神サファイアに匹敵するほどの天空力を持っているようだ。

「って…、あれ？」

アリスは、ピジョンに異変を感じて、小首を傾げる。

「ちよつとちよつと〜」

死霊を抜ったピジョンは、ピクリとも動かず、まっ逆さまに落ちてきた。

このままでは、紅柱石の街が押し潰されてしまう…。すると、ピジョンブラッドの身体は、穴の開いた風船のように小さく縮んでしまった。

「あわっ、わわわっ！」

美咲は、行ったり来たりしながら、落ちてくるピジョンを受け止めようとすする。

「ふう〜…」

なんとか受け止めることができず、美咲はホッと額の汗を拭いた。仔猫の姿に戻ったピジョンは、力なくぐったりとしている。三千年ぶりに目覚めてあれほどの力を発揮したのだ、身体に変調が無いはずもない。美咲は、嫌な予感を覚え、大慌てでピジョンブラッドに耳を当てた。

「すう、すう〜…」

ピジョンは、静かな寝息を立てている。心配を余所に、眠っているだけのようであった。

アリスが呆れたのは、いうまでもない。しかし、美咲はピジョンの可愛さに、思わず抱きしめてしまっただった。

第23話 五色結界消滅 青金神の復活？

葵と重なった優子は、天空力の矢を放つ。迫る死霊を次々と被いながら、藍の封印のある洞窟を護っていた。

「な、なに…あれ…」

優子は、信じられないものに気づいて愕然とする。巨大な光の鳥が、紅柱石の街を覆い尽くしていたからだ。

光の鳥から美しい音色が聞こえ、優子たちを囲んでいた死霊たちが崩壊しはじめる。次の瞬間、光の鳥は、忽然とその姿を消してしまった。

呆然と立ち尽くす優子たち…。光の鳥の正体がなんであるかわからなかったが、死霊が被われ藍の封印が護られたことには違いなかった。

「これで、一息つけるな…」

恭介は、玉砂利の上に座り込み、大きく息をついた。巫力を使い果した恭介は、本家に伝わる剣の力を使い、辛うじて死霊を被っている状態であった。

「お兄ちゃん！」

岩陰に隠れていた楓は、恭介の元に駆けつける。

「だ、大丈夫…？」

疲労困憊の恭介を見て、自分が何の役にも立てないことを落胆した。

樹神の退魔師として半人前以下の楓は、あきらかに戦力不足である。戦いとなれば、死霊を完全に被うことも出来ず、恭介に護られているのが現状だった。つまり、藍の封印を護るためには、葵と優子にがんばってもらうしかないのだ。

隠れ天空族である優子にとって、疲れはあるものの天空力が無くなる心配はない。また、今までできなかった天空力のコントロールも、葵と重なることでコツをつかむことができた。

これなら優子一人でも、死霊を祓うことができるだろう。葵は、優子から離れ、恭介の様子を確認した。

『恭介…、あなた弱くなってない？』

封印に群がる死霊を祓ったのは、ほとんど葵たちである。恭介は、楓を護りながら十数体を祓っただけであった。

「おまえが強くなったんだよ…」

恭介は、愚痴るように呟く。

さやかと恭介の力は、ほとんど同レベルであったはずだ。しかし、目の前の葵は退魔の力が桁違いであり、雰囲気もかなり変わっている。葵が別人といい張れば、恭介たちはそれを信じたことだろう。恭介は、自分の不甲斐無さに、大きなため息をついた。

そんなやりとりに優子が苦笑していると、洞窟内で強力な魔の発生を感じた。

『いつの間にも！』

葵が慌てて突入しようとする、無情にも洞窟内から硬い何かが砕ける音が聞こえてくる。葵は、最後の封印が破られたことを悟った。

そのとき、神社の方角が眩く光り輝く。優子たちが視線を向けると、一本の光の柱が上空に向かって伸びていた。

「そ、そんな…」

楓は、最悪な結果に頂垂れてしまう。五色封印が全て破られ、紅柱石は死霊の徘徊する地となってしまったのだ。

『楓…、まだ諦めてはいけません…』

再び優子と重なった葵は、落ち込む楓に声をかける。そして、藍の封印が破られたことで復活した死霊に、天空力の矢を放つ。

『あの子が…、美咲がなんとかしてくれるはずですよ！』

葵は、確信した声を上げた。

「そうそう」 ああ見えて、アリスも結構頼りになるし…」

優子は、つがえた矢で死霊に狙いを定める。

「それに…。いざとなったら、わたしのお兄ちゃんが何とかしてく

れるから」

優子は、自信満々に微笑んだ。

葵は、やたら美人なシヨウを思いだす。優子の言うように、シヨウならどんなことでも可能にしてしまう気がするのだった。

突然、社から光の柱が立ち昇る。それは、力の強い何か解き放たれたような気配であった。

美咲は、社の中に飛び込み、御神体を確認した。

「すべての封印が解かれた！」

美咲の予想通り、御神体に埋められていた五色の宝石は、粉々に砕けていた。

五色封印とは、紅柱石に集まる死霊らを、鎮め捉えるためのもの…。しかし、もう一つの効果が隠されていた。

すなわち、青金神ラピスラズリの御魂を封印することである。

紅柱石に死霊が集まるのは、人間神であるラピスラズリの御力に惹かれてのこと…。そう考えた過去の樹神は、ラピスラズリの封印を実行した。

御魂が復活しないよう二つに分け、樹神社に祀られていた御神体と、紅柱石の地下にあるとされる青金神の祠にそれぞれを封印する。それによつて、紅柱石の怪奇現象は、ある程度の収まりをみせた。

本来、ラピスラズリを祀るはずの紅柱石の樹神一族。ラピスラズリの封印は、口頭のみで伝わる出来事であり、他言無用な事柄であった。

「まさか、本当に復活…」

美咲は、人間神の封印など、ただの作り話だと思っていた。実際、美咲の時代では、御神体や五色封印から、何の力も感じられなかったのだ。

だが、この時代では違っているようである。

街全体から封印の力が感じられ、御神体や五色封印からも何らか

の力を感じた。それらを考えると、古より伝わる人間神封印は、事実なのかもしれない。

「アリスさん……。わたしは、青金神の祠に向かいます！」

美咲は、ラピスラズリの御魂を鎮めるべく、青金神の祠に向かう決意をした。

解放されたラピスラズリの御魂は、五色封印の中心、紅柱石の地下洞窟にあるとされる青金神の祠に向かったはずだ。

「……って、まさかあたしを置いていくつもりじゃないでしょうね」
アリスは、左手の甲にあるアウインの紋章を見せる。

「それでも勇者なんだから、役に立たなくてもついて行くわよ」
にっこりと微笑んで、美咲の肩に手を乗せた。

「ありがとうございます……」

美咲は、素直に頭を下げた。

今回の怪奇現象は、樹神の問題であり、アリスや優子は巻き込まれただけである。それなのに、アリスたちは何の見返りも求めずに手伝ってくれている。

その心意気は嬉しかったし、たとえアリスに退魔の力が無かったとしても、一緒にいてくれるだけで心強く感じられるのだった。

美咲は、境内にある大きな石灯籠に近づいた。

土台に飛び乗り、頂上の宝珠をゆっくりと回す。すると、灯籠が動き出し、地下へと繋がる階段が現れた。

「おお」

アリスは、驚きの声を上げる。まさか、人間界でこのようなカラクリにお目にかかるうとは思わなかったのだ。

「この階段は、紅柱石の地下洞窟に繋がっています」

美咲は、青金神の祠への道のりを説明しはじめた。

紅柱石の地下には、狭く入り組んだ洞窟が広がっている。また、地下洞窟と五色封印の地は、一つに繋がっていた。

本来、青金神の祠へ向かうためには、五色封印の通路を通らなけ

ればならない。だが、緊急を要する事態の発生に備え、樹神社から直接向えるように隠し通路が造られていた。

まさに、今がそのときである。美咲は、松明を用意して、慎重に階段へ足を踏み入れた。

「長らく人の出入りがありませんでしたので、中はかなり湿っています。コケなどで滑らないよう、充分に注意して……っわあきゃっ！」
そう言つて、美咲は豪快にずっこけた。

後頭部を石段に強打して、七転八倒する美咲……。美咲の懐に入つて寝ていたピジョンブラッドなど、何事が起きたのかと目を白黒させていた。

「美咲つて……、ほんと天然だよね……」

美咲のおやくそく的な行動に、アリスはおもわず微笑んでしまう。知り合つて間もなかったが、アリスは美咲のことをかなり気に入っていた。

第24話 登場 青金神ラピス・ラズリ

美咲たちは、青金神の祠に向かうべく、狭い洞窟内を進んでいた。
『ねえ美咲…。その青金神の祠つてのはまだなの？』

かなり進んだ気もするが、狭いうえに入り組んでおり、距離感がつかめない。アリスは、さやかのことか心配で、少し苛立ちを覚えていた。

『え〜と…。じつは、この洞窟に入るのって初めてだから、いまいちわからないんですよ〜』

美咲は、困ったように頭をかく。その瞬間、アリスに襟を掴まれて、強引に停止させられた。

『うぐっ…』

頭だけを外に出していたピジョンブラッドは、巫女装束で首が絞まってしまふ。

『ちよつと…。待って…』

アリスは、目頭を押えて呟く。

『いくつも分岐があったけど…。まさか、適当に進んでいただけ…とか？』

大汗をかきながら、恐る恐る問いかける。

『あはっ』 美咲は、可愛い笑顔で返答した。

『あんたはー！』

アリスは、先に言えとばかりに叫んでしまふ。先導して走っていたから、当然、道を知っているものだと思っていたのだ。

アリスは、瞳をつむって意識を集中させる。アリスを中心にそよ風が発生すると、風は洞窟に沿って流れはじめた。

神経を張り巡らせるように、風が洞窟内へ行き渡る。アリスは、風の流れを感じ取り、洞窟内の全てを確認した。

『え〜…。ここがこうなってる…』

アリスは、頭の中で地図を組み立てる。その辺り、さすがは数多

くのダンジョンをクリアしているだけのことはあった。

『扉があつたり、隠し部屋なんかはわからないけど、自然の洞窟だからそんなの無いはずだし…。よしっ、マップの完成く』

アリスが手を翳すと、空中に地図が浮かび上がった。

「す、すごい…ですね」

美咲は、感動していいものか呆れたものか、思わず悩んでしまう。まさに、非常識な特殊能力であった。

『うわあ…、これが本当に街の地下に広がってるの？』

表示された地図をあらためて見たアリスは、その複雑な形に大汗をかく。洞窟は、やたら入り組んでおり、まるで迷路のようになっている。道幅が狭いうえ目印になるようなものもなく、地図が無ければ確実に迷ってしまいそうな構造であった。

『これって、精霊界でもA級にあたる難しさだよ…』

熟練した冒険者でも、洞窟内を探索するのはかなり苦労することだろう。美咲だけが入っていれば、青金神の祠に辿りつけるどころか、帰り道すらわからなくなっていたはずだ。

「外側にある五つが五色封印で、中央の大きな空間に青金神の祠があるんだと…思います」

美咲は、申し訳なさそうにアリスに視線を向ける。現在地は、目的の空間からかなり外れているようだった。

『はあ…、かなり戻らないといけないみたいね』

アリスは、がっくりと項垂れる。神社から祠へたどり着ける道は一つしかない。どうやら、最初のころに分岐を間違えていたようだ。「ところでアリスさん…。ここに光っている場所がありますが、いったいなんですか？」

美咲は、地図の端に点滅している箇所があることに気づいた。地図を見ても行き方がよくわからない場所である。

『ああ、ここ？』

アリスは、記憶の情報を引っ張り出す。

『なんか、黄金でできたこれぐらいの俵型をした板が…』

指で楕円を作って説明する。

『たぶん昔のお金ね〜これ…。それも、かなり大量にあるから、財宝ってやつかしら？』

アリスは、いかにも感心なさそうに呟いた。

「そ、そうですか…」

美咲は、この地に残るある伝説を思いだしていた。ここ紅柱石には、とある武将の埋蔵金が見られていると伝わっているのだ。だが、いまの状況で埋蔵金が見つかったとしても、あまり意味はない。

「先を…、急ぎましようか…」

美咲は、急いで青金神の祠に向かうことを提案した。

二人が迷っていたころ、さやかは目的の空間に到着していた。

そこは、蛍のような発光体がたくさん漂う、とても幻想的な場所である。発光体はオーブと呼ばれるもので、ここが精霊力に満ちた地であることの証明でもあった。

オーブによつて、洞窟内は明るく照らされている。さやかは、備え付けられていた台座に、松明を立てかけた。

「どうやら、まにあつたみたいね…」

さやかは、魔の気配が感じられないことにホッとすする。そして、あらためて辺りを見回した。大きな地底湖が広がり、中央には浮島がある。石橋が架けられているので、浮島へ渡ることはできそうだ。

「うっ…」

怨霊との戦いで受けた傷が激しく痛む。さやかは、傷を庇うように、ゆっくりと石橋へ近づいた。

浮島に渡ると、石の鳥居があり、その先には青金神ラピスラズリの祠が建っている。祠といっても巨石で組まれた門のようなもので、中には青白い光の塊が浮いていた。

さやかは、懐から五つの水晶を取りだす。それぞれが、朱・山吹・濃緑・藍・藤紫の色をした小さな水晶球である。さやかは水晶球を、祠を中心にして、五角形となるように設置した。

「簡易な結界だけど、これで復活を抑えることができれば…」
さやかは、印を結び、巫力を高めた。

『あの…、何をなさっているのですか？』

突然、祠の中から声が聞こえてくる。さやかがハッとすると、身体が透き通った美しい少女の霊体が現われた。

『こんにちは、樹神のお嬢さん』

少女は、にっこりと微笑みを浮かべた。

「人間神…ラピスラズリ…さま」

さやかは、おもわず身構える。印を結び、退魔の力を高めて戦闘態勢を整えた。

『あら…。樹神がわたしに戦いを挑もうとするなんて、時代も変わったものね…』

ラピスは、なぜか楽しそうである。ラピスにとって、さやかなど取るに足りない存在なのだ。

『あなたと争う気はありません…。すこし落ち着きなさい…』

ラピスは、諭すようにさやかを制した。

「千数百年の昔…、この地に集まる死霊を封じるため、紅柱石の樹神はあなたさまを封印した…。それをお怨みではないのですか…」

さやかは、警戒しながら問いかける。すると、ラピスは怪訝な顔をした。

『うーん…。どうやら、事実が違って伝わっているようですね…』

ラピスは、苦笑しながら呟く。

『たしかに樹神によって封印されましたが、それはわたしの指示によるものです…。あなたが気にすることではありませんよ…』

ラピスは、微笑みながらさやかに近づいた。

片膝をつき、慌てて頭を下げるさやか…。ラピスは、手を翳して精霊力を高めた。

「えっ…」

さやかは、驚きの声を上げる。暖かな力の流れを感じると、怨霊との戦いで受けた傷が徐々に塞がったのだ。

『痛みは増したと思いますが、傷は回復したはずです。それより、あなたのお名前を聞かせていただけませんか？』

さやかが自己紹介すると、ラピスはにっこりと微笑む。

『いい名前ですね』

何かを躊躇うように俯き、ラピスはとんでもないことを口にした。

『さやか…、わたしのお友達になっていただけませんか？』

ラピスは、恥ずかしそうにもじもじする。

意外なお願いに、さやかは啞然とした。

ラピスから桁外れの力を感じるが、とても神様とは思えない。すこし威厳のある、お嬢様といったところである。さやかは、おもわず笑いだしてしまう。それにつられて、ラピスもクスクスと笑いはじめるのだった。

さやかは、これまでに起こった怪奇現象を報告する。

「五色封印を破ったのは、樹神一族の怨霊…。死霊の解放というより、あなたの復活が目的だと考えるべきでしょう」

さやかは、退魔師の怨霊を思いだし、恐怖に身震いをした。

『樹神の怨霊…。おそらく、樹神我周ですね…』

ラピスは、信じられない名前を口にする。

「我周…。数日前、何者かに我周塚が破壊されている！」

さやかは、事件の真相が、一本の線で繋がったような気がした。

『塚が破壊されたのも偶然ではないでしょう…。我周の念によって、操られた者の仕業です』

静かに瞳を瞑るラピス…。

『生前の我周は、他の樹神を巻き込み、わたしの力を手に入れようとしていましたから…』

ラピスは、五色封印の意味を…、自分がなぜ封印されていたのかを語りはじめた。

第25話 真実 我周の執念

それは、五色封印がされる前のことである。当時の紅柱石は、悪霊や怨霊の蔓延る地であった。

元々紅柱石はこの世とあの世を繋ぐ霊場なのだが、青金神ラピスラズリが現存することによって、より強力な魔が集まってきていた。そんな死霊を祓っていたのが、さやか祖先である紅柱石の樹神であった。

常に死霊との戦いを強いられる紅柱石の樹神は、一族の中でも特殊な存在である。退魔の力に秀でた者を、人々は樹神の退魔師と呼んでいた。

樹神の退魔師の活躍により、紅柱石は仮初めの平穏を手にする。だが、樹神の中には、終りの見えない死霊との戦いに、疑問を唱える者も多々いた。そして、ある退魔師の登場により、事態は一変することとなった。

その退魔師というのが、樹神我周である。

我周は、諸悪の根源を青金神とし、ラピスを封印してしまおうと提案した。もちろん、そのような話を通るはずもない。我周の提案は、次第に立ち消えとなってしまった。

二年後、我周は別の提案を持ちかける。

それが、集まる死霊を捉え縛り付ける、五色とよばれる封印の設置であった。五色封印は、多くの賛同を得て実行に移された。

紅柱石を囲むように五つの石碑が建てられ、巫力の高い五人の神官たちが祈りを捧げる。儀式は、不眠不休で三日間続いた。

ここからが悲劇の始まりである。我周は、各封印の地を回り、疲労困憊の神官を殺害……。その魂を、成仏できないよう石碑に縛り付けてしまう。我周の考えた五色封印とは、聖なる力で死霊を祓うのではなく、縛られた神官の魂を餌に、死霊を引き寄せるものなのだ。殺害された神官たちの怨みや憎しみは、青金神ラピスラズリの御

力を弱める結果となる。それこそ、我周が目論んだことであつた。我周は、ラピスをも殺害し、その御魂を自身に取り込もうと考えていたようだ。

しかし、その計画は樹神本家に知られ、我周は咎人として捕らえられる。牢獄の中、我周が自らの命を絶つたことで、この事件は終結した。

ラピスは、自分が狙われたことより、五つの命が失われたことを悲しむ。その怨念が少しでも和らぐようと、五色の玉が埋め込まれた鏡に人間神の力を封じる。また、封印の中心に青金神の祠を作り、自らの魂を封じるのだった。

怨念が和らいだことにより、五色封印は、引き寄せた死霊を封じ込めるといふ本来の機能を取り戻す。

皮肉にも、徳の高い神官の魂が捧げられたことで、五色封印はより完全な効果が発揮されることになった。

『神官の魂が開放され、わたしの封印も意味を無くしました…』

一気に話し終えたラピスは、ホツと息をつく。

ラピスの語つた真実に、さやかは愕然とした。五色封印にそんな悲劇が隠されていたようとは、夢にも思わなかつたのだ。

『死してなお、人間神の力を欲しているようですが、それも無駄なこと…。わたしの存在は…、もうすぐ消えてしまいますから』

暗い雰囲気吹き飛ばすように、ラピスはにっこりと微笑んだ。

魂を分けられて封印されていたラピスは、人間神としての力をほとんど失っていた。今回の事件がなくとも、数年もしないうちにラピスの存在は消えていたはずである。

「では、紅柱石は…。ラピスさまがおられない紅柱石は、死霊を封じることが…できない…」

さやかは、あまりのことに、めまいを起こしそうになった。

『霊道としての紅柱石は、その役目を終えようとしています…。でも、それは今ではありません』

途端に厳しい表情となるラピス。

『五色の封印に代わる、新たな封印が必要なのです…』

ラピスは、訴えるようにさやかを見つめた。

「新たな…封印…」

さやかは、ラピスの意図を理解する。

五色の代わりとするのに、普通の封印では意味がない。ラピスは、樹神の魂…、さやかの命を必要としているのだ。

そのとき、邪悪な空気が辺りを包み込む。

カマイタチのような真空が発生し、さやかの肩を引き裂いた。さやかは、その衝撃で地底湖に弾き飛ばされてしまう。

『なっ！』

突然なことに、ラピスは呆然と立ち尽くす。さやかを攻撃したソレは、地面から陽炎のように立ち昇っていた。

「ぶはっ！」

さやかは、浮かび上がって息をつぐ。それほど深くはないが、水は刺すようにつめたい。さやかは、湖から這い上がり、魔の気配を探った。

浮かび上がったのはゲル状の塊…。徐々に人の形となり、真っ赤な瞳でラピスを睨みつけた。

『やはり、あなただったのですね…。樹神我周…』

ラピスは、樹神の怨霊に問いかける。しかし、我周は唸るだけで何も答えようとしない。

『もはや、わたしを取り込もうとする意思のみで動いているのか…』
ラピスは、瞳を閉じて頂垂れる。我周の自我はすでに崩壊しており、人間神の力を手に入れるという欲望のみで行動していた。

我周は、じりじりとラピスに近づく。

「させない！」

短剣を手にしたさやかが、ラピスを庇うように立ち塞がる。退魔の力を練り上げ、我周を被おうとした。

「えっ…」

その瞬間、視界が揺らぎ、さやかは倒れ込んでしまう。

何が起こったのか理解できなかったさやかだが、太股に走る激痛で我週の攻撃にあったと気づく。見ると、さやかの太股は深く裂けており、白い大腿骨が覗いていた。

「うっ、わああー！」

慌てて太股を強く押えるさやかだったが、それで溢れる血が止まるはずもない。さやかは、あまりのことにパニックとなった。

「さやか！」

ラピスは、さやかに駆け寄って傷口に手を翳す。すると、暖かな光が溢れ、傷は完全に塞がった。ほっとしたラピスは、立ち上がって我周に向き合う。

「我周…。あなたの命はすでに尽きています。迷わず成仏しなさい…」

ラピスの言霊に怯むことなく、我周は大きな叫び声を上げて近づいてきた。

「しかたないですね…」

ラピスは、内なる精霊力を高める。

残り少ない精霊力を高めることで、身体の末端が霧状となる。戦闘態勢を整えたラピスは、いまにも消えてしまいそうなほど揺らいでいた。

「嫌な予感がする…」

アリスは、祠の方角から感じる気配に身震いをした。今まで戦ってきた死霊とは、比べものにならないほどの魔を感じるのだ。

「早くしないと、さやかさんが…」

美咲もそれを感じているようで、駆ける足を速める。その途端、美咲は豪快にずっこけた。

「痛っ…」

涙目で額を押える美咲。懐に入っていたピジョンブラッドは、美咲の体重に押し潰されてしまった。

「あああゝ、もお！ 壁を壊してでも進むわよ！」

苛立ったアリスは、精霊力を高め、壁を破壊しようと身構えた。もちろん、こんな狭い洞窟内で精霊術を発動させれば、アリスたちもただではすまない。美咲は、アリスの身体に飛びついて、強引に止めさせた。

直線距離で目と鼻の先にある青金神の祠だが、たどり着くためには反対方向へと進まないといけない。さらに、入り組んだ分岐を進み、大きくUターンをしなければならなかった。

シヨウなら空間転移も可能だろうが、時空力を持たないアリスには無理な話である。アリスたちは、洞窟に沿って、先を急ぐしかなかった。

「って、こんなことやってる場合じゃないか……」

冷静を取り戻したアリスは、美咲の状態を確認する。足を挫いた様子もなく、走るのに問題なさそうだ。

「美咲……、急ぎましょう……」

アリスは、先導するように走り出した。

「さやかさん……」

後を追う美咲には、一つの確信があった。この事件が葵の未練であること……。そして、このままではさやかが死んでしまうことになるだろうと……。

第26話 葵の最後 魂を使った封印

我周の登場は、祠のある洞窟にも変化をもたらしていた。

闇が増したことでオーブの数は減り、場の精霊力も弱まる。そのことで、紅柱石の地に封じられていた古の怨霊が姿を現した。

それは、五色封印が破られ、ラピスラズリが消滅しようとしている結果でもある。新たな封印がされない場合、紅柱石はこのように死霊の蔓延る地となってしまうのだ。

「ラピスさま！」

さやかは、ラピスの背後から迫る怨霊を斬り裂く。だが、疲労の蓄積したさやかの力では、怨霊を完全に祓うことはできない。

「ちっ！」

さやかは、懐から鈴の付いた小刀を取り出し、怨霊目掛けて投げ放つ。凜とした鈴の音が響き、怨霊は金縛りにあつたように動きを止めた。

さやかは、目にも止まらぬ速さで九字を切り、退魔の力を練り直す。そして、一刀のもと、怨霊を両断する。怨霊は、霧状の粒子となって四散した。

リンリンと鈴の音が響く。さやかは、次々と小刀を放ち、怨霊の動きを止める。ラピスに迫ろうとする怨霊を、華麗に祓ってみせた。一方のラピスは、ジツと我周だけを見据える。他の怨霊はさやかに任せ、我周を滅ぼすことだけに集中していた。

「はっ！」

ラピスは、精霊力を解放し、指刀で宙を斬る。その瞬間、我周の身体が引き裂かれ、霊体が崩壊しはじめた。

「がああぎゃあああ！」

肉体の死とは比べものにならない激痛が我周を襲う。ラピスは、我周を祓い清めるのではなく、魂に直接攻撃を与えた。

苦痛にのたうつ我周……。魂の消滅であるため、成仏して霊界に向

かうことも、今後生まれ変わることもない。我周は、輪廻の流れから外れ、その存在を完全に消してしまった。

『己の行いを悔いなさい…』

ラピスは、残り少ない人間神としての力を使い、他の怨霊をも祓うのだった。

静けさが戻り、再びオーブが洞窟に充満する。

「ラピスさま…」

さやかは、ラピスに視線を向ける。残された力を使ってしまったことで、ラピスの身体は徐々に崩壊しはじめていた。

ばつが悪そうに苦笑するラピスを見て、さやかは顔を背ける。この世に留まるだけの力もなく、このままでは、数分もしないうちに消滅してしまうだろう。

『どうやら、わたしもこれまでのようですね…』

ラピスは、大きなため息をついた。

『でも…。わたしにとっては、有益な一件でした…』

その言葉に、さやかは小首を傾げる。

『だって、消滅する前に、初めてのお友達ができましたから』

ラピスは、さやかと向い合い、にっこりと微笑んだ。

過去の時代において、ラピスは人間神として存在していた。そこには人としての生活があるわけでもなく、ただ敬われ崇められるだけであった。

一方的なお願ひではあったが、さやかはラピスにとって初めての友達となった。

「そうですね…。神さまとお友達だなんて、普通はありえませんか」

さやかは、おもわず笑ってしまふ。どんなに強大な力を持っていても、ラピスは普通の女の子にしか思えなかった。

つられて笑い出すラピス…。しかし、それも長くは続かなかった。ラピスは、意を決したように、さやかを見つめる。

ラピスの考えがわかるのか、さやかは微笑みを返す。そして、ゆつくりと青金神の祠へ近づいた。

『良いのですか…』

ラピスは、さやかの意思を確認する。

「新しい封印が…、必要なでしょ…」

さやかは、祠に凭れかかる。

「それに、あなたが消えた後では間に合わないだろうし…」

現在には、五色ほどの死霊封印を作り上げる術は伝わっていない。ラピスが消滅してしまっただけでは、全てが遅すぎるのだ。

さやかの決意に、ラピスは難色を示す。

五色に代わる封印を作るには、樹神の命が必要となる。そのことは、さやかが人柱となることを意味していた。

『あなたは、偶然この場面に居合せただけ…。誰もあなたを責めることはできません…』

ラピスは、最後の確認をする。だが、さやかの考えは変わらなかった。

「わたしは、妹の住む紅柱石を護りたいだけ…」

さやかは、ジツとラピスを見つめる。

「ラピス…、わたしを友達といってくれるのならお願い…。わたしの魂を使って、封印の儀式を…」

もはやさやかには、迷う気持ちなどまったく無かった。

その言葉に、ラピスは息をのむ。自ら言いだしたことではあつたが、まさか、本当に人柱となることを承知するとは思わなかったのだ。

『わかりました…。樹神の命を使った封印…、わたしも再び罪を背負いましょう』

覚悟を決めたラピスは、印を結んで念じる。すると、さやかの足元から、水晶の結晶が湧き上がってきた。

「こ、これは…」

さやかを包み込むように、六角柱状の水晶が形成される。膝まで

水晶に埋まっているというのに、まるでお湯に浸かっているかのような心地よさがあった。

『紅柱石全体を補うための封印……。魂だけでなく、その肉体も捧げてもらいます……』

ラピスは、一気に精霊力を高める。それは、言葉の通り、まさに人柱であった。

「はあ、はあ、はあ！」

美咲は、入り組んだ通路を全力で走っていた。

さきほどまで感じられていた魔は、聖なる力の発生を機に消滅している。戦いの終結を意味していると思われたが、どうしても嫌な予感まで消し去ることはできなかった。

『見えた！』

光を感じたアリスは、そこが祠のある空間だと確信する。虚空より聖剣クリソベルルを取り出し、突発的な戦闘に備えた。

「さやかさん！」

美咲は、大きな声で叫ぶ。手にした松明を投げ捨て、辺りを見回した。

そこは、蛍のような発光体が飛び交う、幻想的な空間であった。大きな地底湖が広がり、石橋の先には浮島がある。美咲たちは、迷わず石橋に向かった。鳥居をくぐり浮島にたどり着くと、美咲たちは信じられない光景を目にした。

霊体の少女が力を高め、さやかに手を翳している。さやかは、祈るような姿勢で動こうとはしない。そして、足元からは水晶のようなモノが湧きあがり、さよかの身体を包み込もうとしていた。

「やめてー！ー！ー！」

美咲は、悲鳴を上げる。さよかの身体は、すでに腰の辺りまで水晶に埋もれていた。

「あなた、いったい何を！」

美咲は、霊体の少女を睨み付ける。その姿を見て、おもわず絶句

してしまった。

(る、瑠璃さん…)

その少女は、現代において紅柱石に住む、美咲の知り合いと瓜二つであったのだ。

「人間神ラピスラズリ！」

直感的に少女の正体を見抜いたアリスは、一瞬でラピスとの間を詰める。左上側から、叩きつけるようにクリソベリルを振り下ろした。

しかし、クリソベリルの刃は、ラピスを斬り裂く寸前で止められた。

「…、わたしを倒さないのですか？ アメシストの魂を受け継ぐ少女よ…」

ラピスは、精霊力を弱めることなく、アリスに問いかけた。

アリスは、頭を欠きながらクリソベリルを収める。

「…、あなたすぐにも消滅してしまいそうだし…。それに、彼女が嫌がってないのには、何か理由があるのでしょうか」

アリスは、さやかを見つめる。さやかは、無言の眼差しで、アリスに何かを訴えていた。

「アリスさん、何をしているんですか！」

美咲は、アリスの行動に驚く。このままでは、さやかが水晶柱に取り込まれてしまう。美咲は、退魔の力を練り上げ、ラピスを抜おうと試みた。

「美咲ちゃん…。これはわたしが望んだことなの…」

さやかは、美咲の祈りを遮るように呟く。青金神の力を手に入れようとしていた我周の存在…。五色封印の意味などを簡潔に説明した。

「封印が無くなれば、この街は大変なことになる…。楓の暮らすこの町が…」

楓の名前を口にしたさやかは、ハツとして哀しそうな顔をした。

「楓…、ごめんね…。お姉ちゃん、あなたにお別れも言えなかった

…

胸の位置まで水晶に包まれたさやかは、一筋の涙を流して意識を失ってしまった。

美咲の悲鳴に似た叫びが響く。だが、さやかに、その声が届くことはなかった。

第27話 青金の封印

「まだ…、ダメ！」

突然、ラピスの力が大きく乱れる。その身体は、いまにも消えそうなほど揺らいでいた。

「こ、このままじゃ、さやかの魂が砕けてしまう…！」

儀式が完全でなければ、新しい封印どころか、さやかの魂が崩壊してしまう。なんとしても、それだけは避けなくてはならなかった。だが、ラピスの力は、すでに尽きようとしていた。

「ちよつと、しっかりしなさいよ！」

アリスがラピスに活を入れる。

「ラピス…、わたしたちにできることはないの？」

アリスは、そんなことを口にした。

ラピスは、特殊な術を重ねて封印を形成している。下手に支援することは、邪魔以外の何物でもない。手助けするにも、細心の注意が必要なのだ。

「では、いますぐアメシストに…なってください！」

ラピスは、苦しそうに呟く。

「天空神アメシスト…。あなたがアメシストに覚醒すれば、その天空力で封印を完成させることができます…！」

この状況をなんとかするには、それしか考えられなかった。

「無理…！」

アリスは、速答で返事をする。

「悪いけど、自分の意思で覚醒することってできないのよ〜」

アリスは、苦笑しながら呟いた。

「役立たずー！ー！」

ラピスは、激怒したように叫ぶ。アリスも怒りですが、いまはそれどころではなかった。

「さやかさん！」

美咲は、さやかに声をかける。しかし、意識を失っているさやかは、ピクリとも反応しない。

「そ、そんな…」

美咲の瞳に涙が浮かんだ。目の前で、さやかの魂が砕けようとしているのを、ただ黙って見ているしかないのだろうか…。

そのとき、美咲の胸元から、ピジョンブラッドがひょっこりと顔を出した。

「やれやれ…、しかたないな…」

ピジョンは、懐から飛び出し、さやかの肩に乗っかる。そして、ひたすら眠そうに、大きなあくびをした。

『まさか、天空竜…』

ラピスは、一瞬でピジョンの正体を見破る。

「え〜っと、そこのお姉ちゃん。ボクの力を使って、封印を完成させてよ」

ピジョンブラッドは、翼を広げて、天空力を高めた。

まるで、さやかに翼が生えたように見える。ピジョンの天空力により、水晶は再び成長をはじめたのだった。

さやかの肩に乗ったまま、自らも水晶に包まれるピジョンブラッド…。そんなピジョンの行動に、美咲は驚きの表情をする。美咲に気づいたピジョンは、にやりと微笑んだ。

「ま〜、どこで寝てもボクにとっては同じことだからね」

そんなことを言い残し、ピジョンブラッドは、さやかと共に巨大な水晶に包み込まれてしまった。

呆然と立ち尽くす美咲たち…。すでにラピスの姿も消えており、場には美咲とアリスだけが残されていた。

『これで…、良かったのかな…』

アリスは、独り言のように呟く。あまりにも展開が速すぎて、何が正しいのか判断がつかない。わかっているのは、我周という怨霊が被われ、五色封印の代わりにさやかが封印されたことだけである。

「さやかさん…」

美咲は、そつと水晶柱に手を添える。さやかは、とても穏やかな表情をしており、いまにも喋りかけてきそうであった。

その瞬間、地面に魔方陣のような紋様が浮かび上がり、淡い光が点滅しだす。それは、昨晚と同じ、時空間転移の力であった。

「いったい、わたしに何をさせたかったのよっ！」

美咲は、無情な時空間転移の力に、怒りを感じた。いきなり過去へ飛ばされて、再びこの時代から転移させられようとしている。身勝手にもほどがあるのだ。

もちろんそんな意思には関係なく、何もできなかったという喪失感だけを残し、美咲たちは時空間転移の光に包まれた。

死霊たちは、嘘のように静まっていく。藍の地で、死霊と戦っていた優子たちは、呆然とその光景を見つめていた。

『終わった…ようね…』

葵は、この時代のさやかが、新たな封印を作るために魂を捧げたのだと悟る。

『樹神さやかという存在は…、消滅しました…』

葵が哀しそうに呟くと、楓は大声で泣き出してしまった。

「楓ちゃん…」

優子は、泣き崩れる楓を、優しく抱きしめる。どう慰めていいものか、優子にはわからなかった。

『恭介…。悪いんだけど、楓のことをお願いできるかしら…』

葵は、楓の今後を、恭介にお願いした。今の葵は、肉体もない浮遊霊である。まして、この時代の存在ではないため、楓にしてあげられることは何もない…。

恭介は、無言で頷く。何があっても楓を護ろうと、心に硬く誓うのだった。

場に異様な気配が漂い、地面に魔方陣が出現する。すべてが終わったことで、優子たちも美咲やアリスと同じように、時空間転移の光に包まれたのだ。

「…、どうやらお別れみたいね…」

優子の身体が、徐々に透き通ってくる。まるで、成仏する霊のよう
うに、優子は光り輝いていた。

「楓ちゃん…、哀しんでばかりじゃダメだからね…」

優子の言葉に、楓はハツとする。

「これからは、あなたがこの街を護らなくちゃいけない…。さやか
さんが命をかけて護ろうとした、この紅柱石を…」

楓がはつきりと頷いたことで、優子はにっこりと微笑んだ。

「え…」

楓は、消えていく優子の背に、天使の翼を見たような気がした。

『優子さん…、ありがとう…』

葵は、一筋の涙を流す。優子のおかげで、楓は強い心を持つてく
れたようだ。

『これで、心置きなく…』

葵は、そんなことを呟くのだった。

光に包まれて、この時代から姿を消す優子たち…。そんな様子を、
崖の上から見つめている女性の姿があった。

それは、トエル山の大魔法使い…。時空神ダイヤモンドことリア
ンであった。

リアンは、時空間転移の力を感じて、トエル山から優子たちの様
子を監視していた。そして、ラピスラズリが復活したことで、この
紅柱石にやって来たのだ。

難しそうな顔をして状況を考え込むリアン…。もしかすると、未
来の自分が関係しているかもしれない。

そのとき、消えそうなほど薄い姿をしたラピスラズリが現れる。

リアンは、ラピスの霊体を見て、苦笑気味に微笑んだ。

「久しぶりに再会したっていうのに、すぐにでもお別れみたいね…」

リアンは、ラピスの力が微弱であることを感じ取る。数分もしな
いうちに、ラピスは消滅してしまうだろう。

『リアン…。わたしが消えた後のことを…』

ラピスが言い終えるまえに、リアンはわかっているとばかりに頷く。それを見て、ラピスは満足そうに微笑んだ。

『おそらく、あと二十年ほどでこの地にある霊道は閉じられます。そうなれば、死霊を祓う封印の意味もなくなるでしょう…』

リアンは、黙ってラピスの言葉を聞く。

『そのときには彼女の…。わたしの友達の魂を解放してあげてくださいね…』

ラピスの身体は、霧状の粒子となって、いまにも消えそうに揺らいでいた。

「まかせなさい…。それまでには、とびっきりのイベントを考えておくから」

リアンは、優子たちをこの時代に送り込んだのが自分であると確信した。

美咲たちの時代で起こる怨霊騒ぎ…。それこそ、未来のリアンが用意したイベントであった。

インディコライトの力で怨霊を活性化させ、戦わせることで美咲の力を高めさせる。我周塚では、美咲たちの前に姿を現し、意味深な言葉を残した。

夜の海岸で実体化した怨霊と戦わせ、時空間転移を発動させてこの時代に送り込む。すべては、リアンの思惑通りに進むことになるのだ。

『ありがとう…。リアン…』

ラピスが素直に頭を下げると、リアンはにっこりと微笑む。それに安心したのか、ラピスは光の粒子となって消滅した。

「ラピス…。あなたは、安心して生まれ変わらなさい…」

そう言い残し、リアンは時空間転移の力によって、紅柱石から姿を消すのだった。

第28話 万事解決？

夕暮れどきの樹神社に、大きな爆音が響く。シヨウたちが駆けつけると、境内には美咲たちが折り重なるように倒れていた。

「痛ったー！ーい！」

優子は、上に負ぶさっているアリスを弾き飛ばす。

「いったい、なんなの…って…。お兄ちゃんに…、セリア？」

優子は、心配そうにしているシヨウたちに気づく。

「わたしたち、戻ってこれたの。」

パツと明るくなり、美咲やアリスの顔を見た。

「どうやら、そうみたいね。」

現代に戻り、実体化したアリスは、美咲を横目で窺いながら立ち上がった。美咲は、頂垂れたまま、暗い表情をしている。

「おや…？」

そのとき、アリスは見慣れない男女が、口をパクパクしていることに気づいた。

「もしかして…、楓ちゃん？」

アリスは、女性に問いかける。女性は、カクカクした動きで頷いた。

「楓…ちゃん？ って…、ええー！ー！ー！」

優子は、驚愕のあまり、心臓が止まりそうになる。言われてみれば、なんとなく雰囲気が似ている気がする。

「じ、じゃあ…。恭介さん？」

優子は、恐る恐る隣りの男性を指差す。男性は、ゆっくりと頷いた。

とんでもない再会に、優子たちは喜ぶ。しかし、そんな中で、美咲だけは泣きそうな顔をしていた。

「美咲…」

それに気づいた楓は、美咲に近づく。

「美咲…、どうしたの？」

楓は、美咲の頭を撫でながら、そつと問いかける。

「お母さん！ さやかさんが…、さやかさんが！」

美咲は、顔をくしゃくしゃにしなから、大声で泣きはじめた。

その言葉に、楓はハツとする。そして、美咲が何に哀しんでいるのかを理解した。楓は、泣きじゃくる美咲を、優しく抱きしめる。気持ちが治まるまで、頭を撫で続けるのだった。

「お…母さん…？」

優子は、丸太で頭を殴られたような衝撃を受ける。

「え…、お母さんって？」

美咲たちを指差して、アリスに問いかけた。

「あ…。優子は知らなかったんだ」

アリスは、嬉しそうな顔をする。

「あの二人…、親子だよ」

真っ白になる優子を見て、アリスは笑いを堪えるのに必死だった。

大部屋に戻った優子たちは、過去での出来事を、シヨウとセリアに説明していた。

「まさか…、美咲ちゃんのお母さんが、あの楓ちゃんだったなんて…」

年下だった楓は、いまや四十歳近いおばさんである。優子は、自分たちが過去の時代に飛ばされていたことを、あらためて思い知らされた。

「まるで、浦島太郎にでもなった気分ね…」

優子にとっては、楓が一瞬で成長してしまったようなものだ。

「わたしたちにとっても、忘れることのできない二日間でした…」

楓は、懐かしむように瞳を瞑る。未来からやって来たという少女たち。そして、唯一の肉親だったさやかの死…。

「優子さんの“強くなれ”って言葉があったからこそ、いまのわたしがあるのです…」

楓は、優子に感謝していた。

「で……。恭介さんと愛が芽生えて、結婚したと……」

優子がおどけた調子で問いかけると、楓は真っ赤な顔で頂垂れてしまった。

「でも、姉は……さやかは、成仏してしまったんですよね……」

楓は、過去から戻った中に、葵がいなかったことを落胆していた。たとえ浮遊霊の状態だったとしても、もう一度、会ってみたかったのだ。

過去へ渡ったときと同じように姿が見えないだけなのか、あるいは楓と再会したことで未練を無くし成仏してしまったのか……。優子たちには、わかりようもなかった。

「へえ……。じゃあ葵さんの記憶、戻ってたんだ」

アリスは、納得したように呟く。美咲と精霊界へ向かっていた間に、そんなことがあったとは驚きであった。

「じゃあ、こつちであったことを話すね」

アリスは、青金神の祠での出来事を話そうとした。すると、突然美咲が立ち上がる。

「ご、ごめんなさい！ わたし、疲れたから先に休ませてもらいます……」

美咲は、思いつめた表情で頂垂れ、逃げるように部屋へ戻って行った。

その瞬間、シヨウの拳骨がアリスの頭に炸裂する。

「痛っ！」

アリスは、怒ったようにシヨウを睨みつける。だが、シヨウの言いたいこともわかったため、あえて文句を言わなかった。

「やっぱり、かなりシヨックだったみたいね……」

優子は、楓に視線を向ける。楓は、複雑な表情で苦笑していた。

巨樹の枝の上、一人の少年が樹神社を見下ろしていた。その少年とは、紅柱石の怨霊を活性化させていたインディコライトである。

「ふふ〜ん やつと帰ってきたみたいだね〜」

インディは、嬉しそうに呟く。

「それじゃあ、さっそく魔を活性化させて〜」

インディは、掌を上に向け、暗黒力を高めた。

そんな行動を遮るように、突然現われた一人の女性がインディを抱き上げる。

「はいはい、トルマリくん。もう終わったのよ〜」

女性は、覗き込むようにインディの顔を見た。

「リ、リアンさん…」

インディは、ため息をつく。それは、インディに怨霊騒ぎを命じた張本人、リアンであった。

「もう終わったって…?」

今回の騒ぎは、リアンが命じたことである。それなのに、なにが終わったというのだろう。

「ラピスラズリの願いは叶いました。あとは、あの子が気づくかどうかにかかっています」

リアンは、自分の部屋に戻ろうと廊下を歩いている美咲を見つめた。

「どういう…こと?」

インディが問いかけると、リアンはにっこりと微笑む。

「あのお姉ちゃんに、いったい何をさせようとしているの?」

インディは、無駄とわかっていながら問いかけた。

「まあいいじゃない」

リアンの答えは、やはり適当なものである。

「これ以降、あの子にちょっかい出すのなら、それはあなたの意思でつてことにね」

リアンは、インディを枝に降ろし、頭を優しく撫でた。

「べつに、ちょっかい出しても構わないと?」

インディは、リアンの考えを探ろうとする。だが、リアンは、黙ったまま微笑みを浮かべるだけであった。

「まあいいですよ…。あのお姉ちゃんは面白そうだし、これからも遊んでもらうから…」

実際、美咲ほど力を持つ者はそうそういない。暗黒神トルマリンの遊び相手には、ちょうどいいと思われた。

「あゝ、でもあまりやり過ぎないようにね」

リアンは、念押しをする。彼女にもしものことがあれば、シヨウたちも黙ってはいないだろう。如月家に厄介になっている以上、シヨウたちとあまり気まづくはなかつた。

「はいはい、わかりましたって…。あゝあ、今日はやる気が失せたなゝ」

インディは、頭をかきながらため息をつく。すると、リアンは満足したように微笑み、空間転移の術を発動させる。リアンの姿は、陽炎のように揺らいで消えてしまった。インディは、身体を投げ出して地面に降りる。

「はあゝ、もう帰ろうつと…」

頂垂れながら、紅柱石の住宅街に向かって歩きだした。

そのとき、大きな物が落下してくるような音が聞こえてくる。見上げてみると、巨大な黒い塊が、インディ目掛けて落ちてくるところだった。

「いんでいゝ」

謎の物体から、かわいい声が発せられる。物体は、インディの真上に着地した。

「…え？」

インディの全身が、生暖かい何かに包まれる。視界が塞がれ、呼吸もできず息苦しい。

「あれ？」

インディが焦っていると、足元が持ち上がるような浮遊感を覚え、身体が横向きに倒される。

「なああー！」

身体を動かすと、弾力のある壁が波打つように動きはじめた。

「はむはむ……」

謎の物体……いや、魔獣姿のリウムが口をゆっくりと動かす。インディの身体は、足首だけ残し、リウムの口に収まっていた。

口の中で激しく暴れるインディ……。しばらくしゃぶって満足したのか、リウムはインディをでろっと吐きだした。

「ぜえぜえぜえ……」

インディは、大きく息をする。危うく窒息死するところであった。インディは、リウムに視線を向ける。リウムは、お座りをして、インディを睨みつけていた。

「いんでい……。るり……。お姉ちゃんが……。ごはん……。だって」

リウムは、得意そうに瑠璃の言葉を伝える。

その言葉に、インディは啞然とした。

「って……。ご飯を呼びに来た……。だけ？」

インディが問いかけると、リウムはこくりと頷く。

「お姉ちゃん……。やっぱりボクのこと、怨んでない？」

リウムは即座に否定する。悪気が無いのはわかるが、行動に殺意を感じるのは、気のせいなのだろうか……。

尻尾が軽く振られているところを見ると、嘘をついているわけではなさそうだった。

第29話 動き始めた時間

草木も静まるような深夜……。美咲は、自分の部屋で眠っていた。過去の出来事がよほど堪えたのか、美咲はぴくりとも動かずに寝息を立てている。美咲は、深い眠りの中で、ある人物と再会していた。

『葵さん……』

美咲の問いかけに、葵はにっこりと微笑む。その表情は穏やかなもので、まるで浮遊霊が成仏するときのようである。美咲は、これが夢であることに気づいていた。しかし、たとえ夢だとしても、葵と再会できたことは嬉しいことであった。

葵は、優しく微笑み、何かを喋っている。だが、美咲には、その言葉が聞き取れない。美咲が近づこうとすると、その分だけ葵が遠ざかる。葵の身体は、徐々に薄くなり、光に混ざるように消えようとしていた。

必死に手を伸ばす美咲……。その瞬間、眩い光に包まれた。

「葵さん！」

美咲は、がばっと身体を起こす。周りを見回し、やはり夢だったことを思い知らされる。

「……………」

美咲は、しばらく考え込み、何かを決意してゆっくりと立ち上がった。

巫女装束を纏い、ライトを手にする。時計を見ると、午前三時になろうとしていた。

美咲は、物音を立てないように境内へ出る。石灯籠の仕掛けを動かす、階段を下って青金神の祠に向かおうとした。

迷いながらも、美咲は青金神の祠にたどり着く。そこは、まるで時の流れが止まっていたかのように、あのときそのままであった。

石橋を渡って浮島に足を踏み入れる美咲…。青金神の祠があり、その隣りには、さやかが眠っている青金の封印が立っていた。ゆっくり近づくと、封印の前に青白い光が漂っている。それは、水晶柱に包まれた自分を見つめている葵の姿であった。

「葵さん…」

美咲は、そつと葵に声をかける。

『まいっちゃんよね、これは…』

美咲に気づいた葵は、苦笑気味に呟く。

『まさか、探し物が自分のお墓だったなんて…』

水晶柱に手を添えて、やり場のない笑みを浮べる。記憶を失っていた葵は、何かを探すためにさまよっていた。美咲たちは、その未練を探して、葵を成仏させようとしていたのだ。

『愛する人を捜してるってのなら、かつこもついたでしょうけど…』

葵は、苦笑しながら祠に凭れかかる。

『おまけに、封印としては出来損ない…。魂が離れちゃったら、五色封印の代わりとしても意味ないもんね』

葵は、可愛く舌を出した。

樹神の魂を糧とする五色封印…。葵が浮遊霊として出歩いていたのでは、死霊を封じる効果は得られない。落ち込む葵に、美咲はかける言葉も見つからなかった。

「あれ…？」

そのとき、美咲は違和感を覚えた。封印として効果が無いのであれば、過去の五色封印と同じように、死霊が溢れ出ていたとしてもおかしくないのではないだろうか。

「葵さんって、この封印があるかぎり、成仏できないんですよね…」

美咲は、水晶柱に手を添える。葵が小首を傾げていると、美咲はとんでもないことを言いだした。

「この封印…、破っちゃいましょう」

美咲は、にやりと微笑んだ。

『ななな、なに言ってるのよ！ 封印が無くなれば、この街は再び』

怨霊が蔓延る地になつて…』

「大丈夫」

葵の言葉は、美咲の叫びで遮られる。

「怨霊なんて、わたしが全部祓つてみせますから」

美咲は、自信満々に胸を張った。葵の魂が縛られたままでは、あまりにも哀しすぎる。美咲は、真剣に自分だけで怨霊を祓おうと考えていた。

そんな自信に、葵は呆れてしまう。たしかに美咲の巫力は桁外れに強い。それでも、無限に現れる怨霊を祓いつづけることなど、不可能だと思われた。だが、美咲の優しい心も、痛いほどわかる。美咲は、成仏できない自分の魂を、解放してくれようとしているのだ。「もう決めましたから、葵さんが何を言おうと、封印は破っちゃいます」

美咲は、にこにこ顔で印を結び、巫力を高めた。しかし、美咲の動きはぴたりと止まる。

「え〜っと…、この封印って、どうやったら破れるんでしょうか？」

苦笑しながら呟く美咲…。葵は、豪快にずっこけてしまった。

「ねえ…、もう諦めましょう」

葵は、いろんな方法で封印解除を試す美咲に声をかける。

「わたしは、このままでも構わないし…。それに、青金神さまの施した封印が、そう簡単に解けるはずないじゃない…」

葵は、大きなため息を漏らした。美咲は、かれこれ二時間はがんばっている。どうやら姪は、かなりの頑固者であるようだ。

「葵さんは黙っててください！」

美咲は、近くに転がる岩を持ち上げる。勢いをつけて、水晶柱に投げつけた。

「でやあぁー！」

岩は、大きな音を立てて砕け散る。それでも水晶には、傷一つ付

いていなかった。

「うう、疲れた……」

疲労が頂点に達した美咲は、仰向けに倒れ込む。全身は汗びっしりで、激しい呼吸を繰り返していた。

「大丈夫？」

葵は、美咲の顔を覗き込む。頭を撫でてやりたいのはやまやまだが、肉体が無いためそれも叶わない。葵は、微笑みで労うことしかできなかった。

「よつと、大丈夫です」

美咲は、元気に飛び起きる。そして、あらためて封印の水晶を眺めてみた。水晶の中には、さやかが眠るように埋っている。その肩に、翼の生えた仔猫の姿があった。

「はあ……。ピジョンくん、いい気なものね……」

共に封印されたピジョンブラッドは、とても幸せそうな顔をして眠っていた。

美咲は、召喚の腕輪に付いている一つの宝石を見つめた。

過去の世界で貰った真つ赤な契約石……。召喚されたのは、仔猫のような姿をしたピジョンブラッドである。綾菜は、ピジョンがきつと力になってくれると言っていた。

もちろん、ラピスラズリが施した封印を完成させたのは、天空竜ピジョンブラッドであり、その力は疑いようもない。だが美咲は、綾菜が別の意味で役に立つと言ったように思えてならなかった。

「もしかして……」

美咲は、召喚の腕輪を構える。息を吸い込み、大きな声で叫んだ。「いい加減に起きなさい！ ピジョンブラッドー！」

その瞬間、ピジョンブラッドの瞳が開き、封印の水晶は粉々に砕け散る。水晶の欠片が、まるで粉雪のように宙を舞う。すると、葵の身体は、淡い光に包まれた。

「美咲ちゃん、ありがとう……」

光に包まれた葵は、美咲に微笑みかける。

『これで、本当にお別れのような…』

葵は、泣き顔をしている美咲を見て苦笑した。

『ほら、泣かないの…。封印が無くなっただから、あなたがしっかりしないといけないでしょ…。』

泣きじゃくる美咲の頬に、葵はそっと手を添える。

「さようなら…。葵さん…」

徐々に消滅していく葵に、美咲は、最後のお別れをした。

早朝の樹神社では、美咲が忽然と消えていたことで、ちょっとした騒ぎとなっていた。

住居のどこにも姿が見えず、再び美咲だけが過去へと飛ばされたのではないかと、優子たちを心配させる。しかし、石灯笼の仕掛けが動いていることで、美咲が青金神の祠に向かったと気づくのだった。

道順を知っているアリスは、美咲を迎えに行くと言い出す。階段を降りようとしたとき、奥から足音が聞こえ、ゆっくりと美咲が現われた。

「あ…れ？ みんな、なにしてるの？」

美咲は、全員が集まっていることに驚く。

「って、あんたねー！ 黙っていなくなったら、心配するでしょーが！」

アリスは、美咲の頭を叩く。美咲が青金神の祠に向かった理由は、アリスにもわかっていた。なにしろ、その現場に居合わせていたのだから。だが、それとこれとは話が違う。出かけるのなら、一言断っておくべきである。

「うう…」

美咲は涙目で抗議したが、本気で心配されていると感じて頂垂れしてしまう。

「美咲、みんなに心配かけたのよ…。ちゃんとあやまり…」

楓は母親らしく注意したが、その言葉は最後まで続かなかった。

美咲の後ろに、信じられない姿を見たからだ。

「まあまあ…。美咲ちゃん、わたしを心配して来てくれたんだから、怒らないであげてよ。」

朝日に照らされた女性は、にっこりと微笑む。巫女装束を纏っている女性は、幽霊でも幻でもない。それは、間違いなく葵…。いや、樹神さやかか姿だった。

「お、お姉ちゃん！」

楓は、目を丸くして驚く。なにしろ、死んだはずの姉が、姿を消したときのままで現われたのだから。

同じように、恭介も啞然とする。信じられないとは、まさにこのことであった。

さやかは、楓と恭介の様子を見て、二人の関係に気づいた。

「あなたたち。」

複雑な表情で、ひとこと呟く。

「老けたわね…」

やれやれといったふう、さやかは苦笑した。

その言葉に怒り出す楓だったが、どこか嬉しそうである。そんな騒がしい中、ピジョンブラッドだけは、美咲の腕の中ですやすやと眠っていた。

第30話 やっぱり霊に好かれる体質のようで・・・

照りつける日差しの中、優子たちは海岸に来ていた。

怨霊騒ぎも解決したいま、当初の目的であった海水浴に行こうということになったのだ。

「う〜み〜」

水着姿となった優子は、両手を広げて大きく叫ぶ。

初日は散々な目にあってしまったが、夏といえばやはり海である。夕方には小田が迎えに来てくれるので、それまでにしっかり泳いでおこうと考えていた。

優子は、波打ち際に駆けつける。そして、ある異変に気づき、引きつった表情をした。

「く、くらげ…」

崩れるように砂浜へ倒れ込んだ優子は、滝のような涙を流す。悲しいことに、海にはクラゲが大量発生していた。

「う〜ん…、残念ですね〜」

同じく水着姿の美咲は、その光景に苦笑する。美咲も海水浴は久しぶりなのだが、これではとても泳げそうにない。

「美咲ちゃん！ 河童を召喚して、くらげを退治しましょう」

優子がとんでもないことを言いはじめる。はたして、河童は海水でも平気なのだろうか…。

「あははっ…」

美咲が意味有りげに苦笑する。

「かくくん、泳げないからな〜」

その信じられない言葉に、優子は啞然とするのだった。

優子が波際に向かったころ、さやかたちは海の家でくつろいでいた。

「ふう〜…」

大きなため息をつくさやか。

「目覚めてみれば、二十数年後…。妹は結婚して、わたしより年上…。さらに、十五になる娘がいるなんてね。」

さやかは、からかうように呟く。

「あゝあ…。恭介は、わたしのことが好きだと思ってたのに。」
意地悪そうな笑みを浮べ、恭介に視線を向けた。

「いや…。それは…。だな。」

恭介は、慌てふためきながら説明しようとする。そんな恭介を、
楓は冷たい視線でじつと睨んでいた。

「それにしても、葵さ…。いや。さやかさんが樹神の人だったなんて驚いたな。」

シヨウは、笑いながらさやかを見つめる。その頭上では、ピジョンブラッドが寝息を立てていた。

ピジョンブラッドと共に封印されていたさやかは、今や天空族と変わらないほどの天空力を持っている。少し修業をすれば、シヨウたちと肩を並べて戦えることだろう。シヨウがそんなことを考えていると、さやかは頬を赤らめて俯いた。

「え〜つと、葵…。でも、別に構いません。」

さやかは、照れたように頭をかく。そして、真剣な表情でシヨウを見つめた。

「シヨウくんって…。年上の女性は、恋愛対象…かな？」

その瞬間、さやかの顔は、茹でダコのように真っ赤となった。

「……………はあ？」

シヨウは、間の抜けた声を上げる。さやかの言った内容を理解するのに、数分は必要とした。

「そういえば、お姉ちゃんって面食いだっただよね。」

楓は、呆れたようにため息をつく。なぜか恭介は、悲しそうに頭垂れていた。

「…ん？」

そのとき、シヨウはシャツを引っ張られるのを感じる。振り返る

と、青っぽい宝石が胸に憑いた、五歳ぐらいの少年が立っていた。

「げっ、トルマリッ…」

シヨウは、引きつった顔で呟く。それは、魔族ガーティスに憑いて成長した暗黒族トルマリッごとインディであった。

「ますた〜」

インディの背後には、魔獣化したリウムがお座りをしている。それに気づいた人々は、悲鳴を上げて逃げ始めた。

インディは、困ったように苦笑する。

「ボクの名前はインディコライト…。で〜、シヨウお兄ちゃん。そろそろ、リウムちゃんを…引き取ってもらえないかな〜…」

涙を浮べて、シヨウに懇願した。リウムは、かなりインディになつているようである。

「リウム…。いいから、元の姿に戻りなさい…」

シヨウは、目頭を押えながら命令した。すると、リウムの姿は、八歳ぐらいの少女となる。リウムは、当然のようにシヨウの膝の上に座った。

「で…、インディ…だったな。戦うつもりなら相手になるが…？」

シヨウが警戒しながら問いかけると、インディは慌てて否定する。戦いとなれば、お互い無傷ではすまないだろう。

「ボクは、瑠璃お姉ちゃんと一緒に、遊びに来ただけだから」

インディは、後ろを振り向いた。

「インディ〜くん、リウムちゃん…。どこにいったの〜？」

海の家に、一人の少女がやってくる。

その姿を見て、さやかは愕然とした。

「青金神、ラピス…ラズリ…」

瑠璃と呼ばれた少女は、青金神の祠に封印されていた、人間神ラピスラズリと瓜二つだったのだ。

「あ…れ、樹神社の…」

瑠璃は、楓たちに気づいておじぎをする。

「みなさんも、海水浴にこられたんですか〜？」

そう言つて、にっこりと微笑みを浮べた。

「ラピス！」

さやかは、瑠璃の両肩をぎゅっと掴む。脅える瑠璃を見て、その勘違いに気づいた。

「あつ、ごめんなさい。はじめまして…よね、わたしは美咲の姉で、葵っていうの。」

さやかは、落ち着いた様子で微笑む。

「美咲ちゃんの…お姉さん！」

美咲に姉がいたとは、瑠璃にも驚きであつた。

「わたしは、瑠璃…といいます」

瑠璃は、あらためて自己紹介をした。

「瑠璃ちゃん、お友達になりましょう」

さやかは、そんなことを口にする。

突然の申し出に、瑠璃は戸惑う。だが、瑠璃もさやかを気に入つてしまい、断わる理由など見当たらなかつた。

「はい…。よろしくお願いします」

瑠璃は、差し出された手を、しっかりと握り返すのだった。

なんとかクラゲを撃退した優子は、海面に浮かびながら空を見上げていた。

「平和ですね…」

優子は、この数日間を思い出して、しみじみと呟く。

海で溺れかけて、気がつけば浮遊霊の葵に憑かれていた。葵の末練を探して成仏させようとするが、なぜか過去の世界に飛ばされる。そこからは、まるでジェットコースターに乗っているような展開であつた。

さやかには殺されかけるし、朝起きると死霊が溢れかえっていた。恭介に助けられ、一緒に藍の封印を護ることになる。封印は破られて死霊との戦いとなるが、またもや時空移動で現代に飛ばされてしまった。

無事に終わつたと思いきや、なんと、二十年間封印されていたさやかが復活する。信じられない出来事ばかりだが、すべて現実起こつたことなのだ。

「わたしって…、運が悪いのかな…」

優子は、唸りながら考え込む。

アリスたちと出会ってから、トラブルに巻き込まれる確率が異様に高い。しかし、今回の事件は、休みのイベントとして、なかなか面白かつたと思えるのも事実だつた。

「さ…て…、そろそろ戻りますか」

優子は、身体を起こし立ち泳ぎをはじめた。近くには、泳げるようになったセリアがいたため、優子は声をかけておくことにする。そのとき、背後の水面が盛り上がり、何かが背中にしがみ付いてきた。

「またアリスね…。ほんと、いい加減に…」

優子は、ため息をつく。だが、浜辺で美咲とビーチバレーをしているアリスの姿に気づき、血の気が引くのを感じた。

「あ…れ？」

しがみ付いている何かは、アリスに比べるとかなり小さく、そして、異様に冷たく感じられた。

覚悟を決めた優子は、ゆっくりと振り返る。優子に負ぶさるようになっていたのは、身体が半分透き通つた見慣れない小さな女の子であつた。

「お姉ちゃん…。いつしよに…、あそぼ…」

そんな声が優子の頭に直接響く。気が付けば、回りにたくさん幽霊が集まっていた。

「い…。いや…！…！…！」

優子は、全力で浜辺に向かつて泳ぎだす。なぜか優子の身体は、徐々に重くなつてきた。

「た、助けて…！…！」

泳ぎながら叫ぶ優子…。そんな姿に、美咲だけが気づいていた。

美咲は、優子の周りに群がる霊体を確認する。それほど力の無い低級霊であるため、助ける必要性は感じられなかった。

「遊んでほしいだけみたいね〜」

美咲は、慌てる優子を見て苦笑する。

優子は、慈愛に満ちた生体波長を持っている。葵もそうだったが、どうやら優子には、霊を引き付ける魅力があるようだ。それに加えて、浮遊霊の葵が憑いていたことで、優子の霊能力が高まっている。しばらくの間は、心霊現象に悩まされることになるだろう。

第30話 やっぱり霊に好かれる体質のようで・・・（後書き）

あとがき

まず始めに、なかなか更新できなくてすみませんでした。（ぺこり）

え〜、「7の4」もしかして怪談？」は、Crystal Legend シリーズの外伝として書き始めた作品で（そればかり？）、書き始めたとき（第1話を書いている段階）の予定では『優子たちが海水浴に出かけて、旅館で恐怖体験をするお話し』みたいな感じでした。

美咲は旅行先の旅館の娘で、この作品限りのゲストキャラ。それなのに、第2話を書いていたら飛鳥の従妹となり樹神社の娘となっていました・・・あれ？（大汗）

しかも、いつのまにか樹神一族がとんでもない集団になってるし！（退魔師というより忍者です）

いったいどうしてこんなお話になったのだろう・・・（ときどきとき）

そんなこんなで、シリーズ7の4番目作品となったわけですが、最終話で今後の重要キャラである瑠璃が登場しました。でも、これ以降、しばらく出番はありません。

そういえば、紅柱石の樹神は人間神ラピス・ラズリを祀っているので、さやか（葵）も美咲も立場的にはショウたちの敵になるのかな〜？（えっ？）

このあと、シリーズ7の5番目作品「Crystal Legend 7-5」ようこそ勇者部へ」に続きます・・・と言いたいところですが、現在、第25話までしか書きあがっていません。っていうか、どんな話を書いたか覚えていません（問題発言！）

。たしか、グランゾルシリーズでおなじみのカナリーさんが出てきたところで終ってたかと・・・。

なんとか残り話数をがんばって書き上げ、公開できるようがんばります。

2008/11/05 クリスタル Crystal

「Crystal Legend 7 | 4」もしかして怪談?」
2003/11/20～2004/02/24 連載作品

同一作者小説紹介

Crystal Legend シリーズ 「Crystal Legend 7 | 2」トルマリンの胎動」、 「Crystal Legend 7 | 3」はじまりの時代」、 「Crystal Legend 7 | 4」もしかして怪談?」
超獣神グランゾル シリーズ 「超獣神グランゾル」、 「鳳凰編」

なんちゃらプラネット シリーズ 「なんちゃらプラネット」
美咲ちゃん シリーズ 「もしかして怪談?」
4コマ劇場 シリーズ 「桜のひみつ」、 「ラズベリル ショート劇場」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4888e/>

Crystal Legend 7_4 ~もしかして怪談? ~

2010年10月8日13時29分発行